

〔史料紹介〕

## 百瀬和夫「アメリカ遠征日誌」(1932年4月7日～7月2日)

宮本正明

### 【解説】

#### はじめに

今回とりあげる「アメリカ遠征日誌」は、2012年に立教大学へ寄贈された「百瀬和夫資料」(正式名称は「野球部OB百瀬和夫氏遺品資料」)に含まれるものである。「百瀬和夫資料」については、雑誌『立教』第226号(2013年9月)所収の拙稿「戦前期立教大学生のアメリカ体験—『百瀬和夫資料』の寄贈によせて」でその概要は示されている。とはいえ、この寄稿文では紙幅の関係で、旧蔵者である百瀬和夫氏の経歴、「百瀬和夫資料」の寄贈経緯、立教大学野球部によるアメリカ遠征の経過、「アメリカ遠征日誌」のなりたちなどに関して十分な言及ができなかった。本解題ではそれらの点を補足しつつ、改めて「アメリカ遠征日誌」に関する解説を提示しておきたい。

#### 「百瀬和夫資料」の寄贈経緯

まず最初に「百瀬和夫資料」の寄贈経緯について言及しておきたい。

立教大学野球部では、2009(平成21)年の創部百周年を機に、野球部長の前田一男教授が中心となり、立教大学野球部OBの方々に関連資料の提供をよびかけてきた。そのなかで、OB会の横川賢次会長より、自分の同期生で、野球部出身の父親から受け継いだ資料を持っている人物がいる、という情報が寄せられた。

横川会長を通じてご紹介をいただいたその方が、百瀬和夫氏のご長男、百瀬国夫氏であった。百瀬国夫氏は1963(昭和38)年卒で、在学中はご尊父と同じく野球部で活躍された方である。2011年2月、前田部長が百瀬国夫氏の自宅(長野県松本市)を訪れ、資料の現物をみせていただくことができた。

それは、後述するように、戦前期の立教大学野球部に関する貴重な資料の数々であった。百瀬国夫氏は常々この資料の将来的な行く末を案じておられたことから、前田部長より立教学院にご寄贈いただきたい旨の申出をおこなった。百瀬国夫氏のご好意をもってこの申出を受け入れてくださり、2012年11月、立教学院史資料センターへの寄贈が実現する運びとなった。さらに2013年11月には、アメリカ遠征にまつわる資料の追加寄贈をいただくことができた。

このように、「百瀬和夫資料」の寄贈にあたっては、百瀬国夫氏、横川賢次会長、前田一男部長をはじめとする関係者の方々のご尽力をたまわった。ここに改めて深く感謝を申し上げたい。

#### 旧蔵者・百瀬和夫氏のこと

「百瀬和夫資料」の旧蔵者である百瀬和夫氏(1908～1998年)については前掲拙稿で簡単に紹介したように、戦前期の立教大学野球部で捕手・副将をつとめ、1931年の東京六大学野球において立教大学を初優勝に導いた主力メンバーであった。ただ、前掲拙稿ではそれ以上のプロフィールに言及できなかった。百瀬氏の経歴については、『松商学園歴史栄光室報』第4号(2012年4月)の誌上に詳細な年譜がまとめられている。ここではその年譜に依拠しつつ(若干の補足も加えて)、百瀬和夫氏の略歴を

紹介しておきたい。

百瀬和夫氏は、1908年、長野県東筑摩郡にて出生。1924年4月、松本商業学校（松商学園高等学校の前身）に入学、野球部に所属する。松本商業の野球部は当時より強豪として全国的に知られ、百瀬和夫氏の在籍時も全国中等学校優勝野球大会（現在の全国高等学校野球選手権大会）・全国選抜中等学校野球大会（現在の選抜高等学校野球大会）に6回の出場を重ね、1924年の第10回全国優勝大会および1926年の第3回全国選抜大会で準優勝、1928年の第14回全国優勝大会で優勝を勝ち取る。

1929年3月に松本商業学校を卒業後、同年4月に立教大学予科二年に入学（1931年3月に予科修了）、ついで本科に進み経済学部経済学科で学ぶ。ご長男の百瀬国夫氏によると、松本商業学校から初めての立教大学進学者であったとのことで、「立大の強いスカウトにより、早、明をけて」の進学・入部であったという（『アメリカ遠征日誌』末尾の「アメリカ遠征に参加された人々の紹介」〔今回の翻刻では割愛〕における自身の紹介文）。野球部には予科在籍時より入部し、1931年の東京六大学野球秋季リーグ戦および1933年の同リーグ戦（この年から一シーズン制に変更）で優勝をなしとげた。

1934年3月に立教大学を卒業。それに伴い同年4月に朝鮮殖産銀行に就職して朝鮮に渡り、京城府にあった本店のほか、清津・忠州・釜山などの各支店に勤務した。1945年8月15日は赴任当日の釜山で迎え、同年9月に家族とともに仙崎へ到着、しばらく仙崎で朝鮮殖産銀行関係の引揚者の世話をおこなう。同年11月に故郷の松本に戻り、その後は松本市や民間企業で要職を歴任した。1998年、89歳にて逝去。

野球の活動については、松本商業高校在籍時の活躍を紹介した「百瀬和夫—松商優勝時の捕手」（信濃毎日新聞社編集局編『スポーツ山脈—信州あの人はいま』信濃毎日新聞社、1992年）、ご自身が立教大学在籍時のことを回想した「あの試合あの選手」（立教大学野球部編纂委員会編『立教大学野球部史』セントポールズ・ベースボール・クラブ、1981年）がある。野球関連では同時代の史料にも、百瀬氏による記名論稿や座談会・インタビューでの発言記録、百瀬氏に関する人物紹介記事がある。例えば、雑誌『野球界』所収のものだけ見ても、「六大学新人感想録（一）百瀬和夫」（第19巻第8号、1929年6月）、百瀬和夫「夢中で放つたアノー打」（第22巻第1号、1932年1月）、同「ミシガン大学軍の強みを語る」・同「感銘した一つのこと」（第22巻第12号、1932年9月）、「宵越しの早立第三回戦を語る座談会」（第23巻第14号、1933年12月）、「我が軍の新鋭を語る座談会」（第24巻第6号、1934年5月 ※立教大学卒業後）などが挙げられる。

野球以外でも、日本敗戦前後の朝鮮・日本本国での活動についてはご自身の回想文「敗戦痛恨」（殖産銀行友会編『朝鮮殖産銀行終戦時の記録』殖産銀行友会、1977年）が、戦後のものでは敗戦直後の時期、分県期成同盟囑託という肩書きでの談話内容が「観光的見地より分県問題を見る」（『信州観光タイムス』第56号、1948年5月9日付。大串潤児「戦後長野県内における観光関係新聞（二）」、『内陸文化研究』第4号、2005年、参照）として収載されている。

## 「百瀬和夫資料」の概要

「百瀬和夫資料」は以下のモノ資料・文献資料から構成される。

- ◎野球用具（6点）…バープ・ルース、ルー・ゲーリックを含むニューヨークヤンキース選手によるサインボール二個、キャッチャーミット、バットケース、スパイクシューズケース、ボール収納筒

- ◎アメリカ遠征関係物品（4点）…トランク、ボストンバッグ、カメラ、カミソリ
- ◎アルバム（7点・写真569葉）…立教大学在学時期の各種写真をおさめたアルバム5冊、アメリカ遠征時のアルバム1冊、台湾遠征時（1933～34年）のアルバム1冊（これらとは別に、新たにアルバムをつくりなおす前に写真が貼付されていた元のアルバム1冊がある）
- ◎アメリカ遠征関係史料
  - ・日誌関係2点…日誌、裏面に感想メモを記した食事メニュー表
  - ・ペープ・ルース、ルー・ゲーリックのサイン入りパンフレット1点
  - ・スケジュール・催事関係7点…日程表、歓迎会通知など
  - ・野球・スポーツ関係7点…対抗戦・観戦試合のスコアブックなど
  - ・荷札ラベル・大学ベナント・宿泊先ラベル67点
  - ・客船・列車内の食事メニュー表58点
  - ・ニュース通信・情報誌3点
  - ・書籍1点
  - ・大学関係冊子6点
  - ・都市・名所のガイドブック18点
  - ・列車の路線図・時刻表など10点
  - ・ホテルの案内6点
  - ・企業・商品の宣伝冊子3点
  - ・百瀬和夫氏関連の記事掲載誌・手記など6点

## 立教大学野球部のアメリカ遠征について

### 《遠征実現までの経緯》

当時の東京六大学野球では、優勝チームが翌年度の次期リーグ戦を休み、対外試合のためアメリカを訪問することがしばしばおこなわれていた。1931年秋季リーグ戦で初優勝を果たした立教大学の野球部メンバーにとって、渡米という夢の実現に手が届く状況が生まれていた。しかし、当時の野球部マネージャーの藤田寛治氏による回想「野球部米国遠征記」（後掲）によれば、実際にアメリカ遠征へ出発するに至るまでには紆余曲折があった。実行計画案の検討過程で、遠征費用の財源や、聖公会を除いてアメリカ内での伝手に乏しいなどの問題が浮上し、このため選手の周囲ではいったん遠征を中止するという姿勢が有力となってきたが、これには選手たちが激しく反発し、その要請を受け入れる形でアメリカ遠征が断行されたのだという。

この当時の立教大学評議会の記録を見ても、遠征実行の可否をめぐり、大学首脳部も揺れ動いていることが分かる。優勝直後の1931年10月段階では財源確保の見通しがある場合は実行するという見解を示しており、翌32年1月には費用の概算も算出されていた。3月に入ると一転、「時節」を考慮して渡米の中止が提起されていったん合意がなされる。しかし、その直後にはスポーツ活動を遠慮する必要はないという「先輩」の意見や、今後のリーグ戦に臨む野球部員の士気にも関わるという配慮が働いた結果、最終的に決行に至っている。「時節」の具体的な内容については明記がないが、1932年3月前後には前年の「満洲事変」に伴う中国東北部での日本軍の活動継続に加え、「上海事変」、そして「満洲国」

建国宣言などがあいついでいた。いったんは渡米中止とされた根拠については複数の要因がからんでいると思われるが、大学首脳部においては、日本軍の軍事行動に伴う対外的な緊張関係の高まりを特に深刻にとらえていたことがうかがえる。

渡米の断行・出発にあたり、久保田正次野球部長や当時の主将である関口慶一郎氏は「スポーツ使節」であることを掲げ（『東京朝日新聞』1932年3月16日・4月8日付記事）、「対米国際感情の先鋭化最初の平和使節」とも位置づけられた（『東京朝日新聞』1932年3月16日付記事）。実際に渡米した立教大学野球部メンバーが各地で「破格」の大歓迎を受けたことは前掲拙稿でも触れたところであるが、改めて「アメリカ遠征日誌」の原文でご確認いただきたい。

#### 《アメリカ遠征の行程》

訪米の行程を「アメリカ遠征日誌」にもとづいてまとめると次の通りになる。

#### 4月

4月7日：横浜港で日枝丸に乗船、出航。

4月18日：カナダのバンクーバーに上陸。バンクーバー市の消防団を中心とした選抜チームと対戦（○8：6）。バンクーバーを出航。

4月19日：アメリカのシアトルに上陸。パシフィック・コーストリーグの開幕戦を観戦。

4月20日：タコマ・オリンピックを訪問。

4月21日：ワシントン大学のグラウンドで練習。

4月22日：ワシントン大学のチームと対戦（●スコアの記載なし※『東京朝日新聞』1932年4月4日付の記事では12回延長の末0：1）。

4月23日：ワシントン大学のチームと対戦（○6：4）。

4月25日：シアトルの大洋（日本人チーム）とダブルヘッダー対戦（第一試合○6：4、第二試合●2：4）。シアトルを出発、列車でシカゴに向かう。

4月28日：シカゴに到着。カブス対セントルイスの試合を観戦。

4月29日：シカゴ大学のチームと対戦（●3：5）。オハイオに向けて列車移動。

4月30日：オハイオに到着。

#### 5月

5月1日：オハイオ大学の学生寮で宿泊。

5月2日：オハイオ大学のチームと対戦（●1：2）。列車でデトロイトへ向う。

5月3日：デトロイトに到着。フォード社・エジソンの研究室を見学。

5月4日：デトロイトからアンナーバーへ移動。ミシガン大学のチームと対戦（●4：7。※『野球界』1932年9月号の記事ではスコアは9：13）。ミシガン大学の学生寮で宿泊。

5月5日：ヒルスデールでカレッジのチームと対戦（●1：4）。

5月7日：アンナーバーからデトロイトへ移動。デトロイトから列車でバッファローに向かう。

5月8日：バッファローに到着。ナイアガラの瀧を見学。

5月9日：列車とバスを乗り継いでニューヘブーンに到着。

5月10日：エール大学のチームと対戦（○8：4※『読売新聞』1932年5月12日付の記事では8：1）。

列車でニューヨークに到着。

5月11日：エンバイヤステートビルを見学。ヤンキースタジアムに向かいペープ・ルースおよびルー・ゲーリックと記念撮影をしたほか、ヤンキース対セントルイスの試合を観戦。スポーツマンシップ主催の歓迎会に出席、ペープ・ルース、ルー・ゲーリックらからボールへのサイン。

5月13日：自由の女神像を横目に見つつ船でニューヨークを出発。ペンシルバニアで列車に乗り換えワシントンD.C.に到着。国務省・アーリントン墓地・駐米日本大使館を訪問。列車でフィラデルフィアへ向かう。

5月14日：フィラデルフィアに到着。大リーグの試合を観戦。列車でカンザスシティへ向かう。

5月15日：カンザスシティで一時的下車、市内をドライブ。引き続き列車移動、ドッジシティを通過。

5月16日：列車移動、ニューメキシコ・ウィンスローを通過。

5月17日：サンキストを経てロサンゼルスに到着。

5月18日：ハリウッド、チャップリンの邸宅を見学。南カリフォルニア大学のチームとナイター対戦（●2：5）。

5月19日：ロサンゼルスを出発、列車でサンフランシスコへ向かう。

5月20日：途中下車してスタンフォード大学のチームと対戦（●2：4）。サンフランシスコに到着。

5月21日：サンフランシスコを出発、大洋丸でハワイに向かう。

5月27日：ハワイに到着。

5月29日：朝日（日系チーム）と対戦（●6：8※『アサヒスポーツ』1932年7月15日号、『読売新聞』1932年5月31日付の記事では2：6）。

5月30日：ブレイブス（日系チーム）と対戦（●2：5）。

## 6月

6月2日：日本から立教大学野球部メンバー5人がハワイに到着。

6月4日：ワンダラス（日系チーム）と対戦（○7：5）。

6月5日：中国人チームと対戦（○11：10）。

6月11日：全ハワイ選抜チームと対戦（○6：4）。

6月12日：アメリカ海軍チームと対戦（●3：4※前掲『アサヒスポーツ』、『東京朝日新聞』・『読売新聞』1932年6月14日付の記事では5：6）。

6月22日：ハワイを出発、春洋丸で日本に向かう。

## 7月

7月2日：横浜港に入港、帰国。

アメリカ遠征は、移動・試合・歓迎会などがたまたみかけるように折り重なる強行スケジュールのなかで敢行された。「アメリカ遠征日誌」には、野球関連に限っても、本場の大リーグの観戦、ナイターの体験、アメリカにおける野球文化や設備、強豪エール大学戦での勝利、ペープ・ルースやルー・ゲーリックとの対面、ハワイでの中国人チームとの対戦などにまつわる、多彩なエピソードや百瀬和夫氏自身の瑞々しい見聞・所感が盛り込まれている。読者の方々には実際に読み進めていくなかで、その叙述内容を味わっていただけると幸甚である。

## 《アメリカ遠征の評価》

同時代における個々のメンバーの感想や受け止め方は『野球界』をはじめ、同時代の新聞・雑誌の各種記事で知ることができる。百瀬氏によるものとしては、前掲「ミシガン大学軍の強みを語る」および「感銘した一つのこと」（後者の方は「アメリカ遠征日誌」中の「シヤトルで実感した教訓 一、少年の善行」〔本文106頁〕と同様の内容である）。では、野球部にとってのアメリカ遠征自体の評価はどのようなものであったのか。渡米に随行した久保田正次野球部長がこの点について「アメリカ遠征を顧みる」上・下（『立教大学新聞』1932年7月8日・8月18日付）で述べている。ここではアメリカ遠征を「この大事な『試合』でふ観点からのみ失敗であつたことに深い遺憾の念を押へることが出来ない」としている。今回の遠征は「見学を主として、試合を従とするのプラン」で決行したものの、「歓迎攻め」による疲労と、「試合をやる以上勝たねばならない。負けても良いのではない」という思いと、アメリカの学生野球をめぐる環境の未整備というジレンマのなかで、スケジュールの消化を迫られることになった。遠征から帰国してその胸に去来したものは「収穫において或は私どもの意を充分に満たし得なかつたかもしれない」という感慨であった。

しかし、野球部員の方では、来るべきリーグ戦に備えてアメリカ遠征を活用した側面も見られた。1932年6月2日、ハワイに滞在している遠征メンバーのもとに日本から立教大学野球部員が合流した。山崎幸治（本科一年）・松本謙吉（本科一年）・沢木仁行（本科一年）・生田規之（未詳）および宮田正男（本科一年、マネジャー）の5名である。「アメリカ遠征日誌」では「この連中の中から、秋季リーグ戦の活力になる者を、選考する目的で、ハワイへの参加とした」（1932年6月4日条、本文80頁）とその意図を明かしている。また、ハワイでの練習を「秋のリーグ戦に備へ、新メンバーで臨むための、ハワイキャンプでもある」（6月8日条、本文78頁）と位置付けている。

## 「アメリカ遠征日誌」について

百瀬和夫氏はアメリカ遠征時に限らず、一日一日の出来事や思いを備忘録の形で日々つづっている。そしてアメリカ遠征時にもその習慣が生かされている。「アメリカ遠征日誌」の冒頭の記述によれば、百瀬氏は遠征の期間中「試合その他で疲労していても、就寝前とか、振動する」「船中、車中、ホテル内で、随意に書き綴」っていた。それらの記述が「乱筆、<sup>マ</sup>重複、誤字等があちこちに散見される」ことから、1982年に「一から整理し、文意を保持しながら書き改めた」という（本文120頁）。当時の備忘録が別にある一方で、それをもとに改めてノートに浄書されたものが、今回翻刻収録する「アメリカ遠征日誌」の底本である。したがって、当時の記録をそのままの形でまとめたものではない。日誌のなかには浄書の段階における所感などもはさみこまれている。とはいえ、当時の備忘録と全面的な対照作業はおこなえていないためにあくまでも印象論にとどまるが、当時の描写を活かす形でまとめられているようには感じられる。

なお、翻刻の底本とした「日誌」の原本ノートには、ハワイを出発して日本に帰国するまでの期間のうち6月23日～7月2日、および末尾の「アメリカ遠征の総括」の箇所が切り取られ、ご長男の百瀬国夫氏による翻刻文が貼付されている。これらの部分に百瀬和夫氏のプライバシーに関わる記述が含まれていることから、その部分を割愛するための処置である。今回の翻刻にあたり当該箇所については、百瀬国夫氏のご好意により、切り取られた原本コピー（プライバシー関係の記述を除く）の提供を受け、

それにもとづき改めて入力をおこなった。

1932年のアメリカ遠征について知ろうとする場合、概括的なものとしてマネジャーとして同行した藤田寛治氏の回想文「野球部米国遠征記」「野球部米国遠征記(Ⅱ)」（『立教』第32号・第33号、1964年4月・7月）および「想い出は昨日の如く」（前掲『立教大学野球部史』所収）が挙げられる。特に前者の方では、遠征実現の経緯や遠征中の個別エピソードも織り込みながら遠征過程が詳細にまとめられている。ただ、日時などの情報は含まれていないほか、ハワイへ向うところで連載第二回が終わっているためハワイでの記録を欠いたものになっている（後者の方にはハワイ滞在中の記述があるが、簡略なものにとどまっている）。

これらに対し、「アメリカ遠征日誌」は出発・帰国に至るまで日録の形をとって記録されている。一日ごとに滞在先やそこでの行動が記されていることから、この日誌のデータからアメリカ遠征の全行程を再構成することが可能である。もちろん、他の文献とつきあわせると、異同が見られるところがある。例えば、藤田寛治氏の回想文にある記述事項が「アメリカ遠征日誌」のほうに見られないというケースも散見される。具体的には、聖公会関係者を通じてアメリカのフーバー大統領との会見のセッティングが進められていたものの果たせず（これは山梨日日新聞社編『清里の父 ポール・ラッシュ伝』〔ユニバース出版社、1986年〕にも記述が見られる）、駐米日本大使館への表敬訪問に変わったこと（ちなみに当時の駐米大使である出淵勝次の日記には、関連の記述として「四時半ニハ立教大学ノBall team 来訪。茶菓ヲ饗ス」という会見当日のくだりしかない。高橋勝治「出淵勝次日記（三）昭和六年～八年」〔国学院大学〕日本文化研究所紀要〕第86輯、2000年9月、140頁）、ニューヨーク近郊にある「立教の兄弟校」との間で予定されていた試合が双方の連絡が不十分であったために中止となったこと、などである。ただし、これらの異同は選手とマネジャーという立場の違いから来るものとも考えられる。また、試合回数（勝敗数）や試合スコアなどの面で同時代の史料や『立教大学野球部史』と記述が異なるところもある。例えば試合回数の場合、「アメリカ遠征日誌」では全18戦（7勝11敗。うちハワイで6戦・3勝3敗）であるのに対し、『立教大学野球部史』は全20戦（10勝10敗）、『読売新聞』1932年7月3日付記事「戦績よりも見学に収穫／立教野球団久保田部長談」および『アサヒスポーツ』1932年7月15日号の掲載記事「立教軍布哇に転戦」は全21戦（11勝10敗。後者の記事によればアメリカ大陸で5勝7敗、ハワイで6勝3敗）としている。また、『野球界』1932年9月号の掲載記事「布哇に於ける立教」はハワイでの試合を12回としている。ハワイでの試合については前掲『アサヒスポーツ』記事によるとマウイ島で3戦（立教側の3勝）をおこなっているが、「アメリカ遠征日誌」にはその記述が見られない。これは、マウイ島の試合が百瀬和夫氏の入院時期と重なっていたことによるものと思われる。

従って、「アメリカ遠征日誌」の記述がアメリカ遠征の全貌をあますところなく示しているということはいえない。しかし、アメリカ遠征の全体像に迫ろうという場合、この「アメリカ遠征日誌」がその第一の手がかりになることは間違いない。

一方、雑誌『立教』第226号所収の拙稿で記したように、「アメリカ遠征日誌」は、アメリカ大陸・ハワイ在住の野球チームとの対抗戦の記録にとどまらない内容を持っている。当時としてはきわめて限られている海外渡航の機会を得た大学生が、アメリカの政治・経済・社会・文化などを体当たりでつかみとろうとした体験の記録でもある。これらの点にも留意しながらご味読くださることを願ってやまない。

**【翻刻にあたっての留意点】**

- ・誤字・誤用についてはママを付す、あるいは〔 〕内で補う形をとっている。
- ・数字については一部を除き漢数字で統一している。
- ・仮名づかい・送り仮名・句読点・外来語や地名の表記は原文のままとしている。
- ・用語については原文の表記で存置している（例：「支那人」「大東亜戦争」「ト殺（場）」「土人」「黒んぼ」など）
- ・「アメリカ遠征日誌」のなかには自作の行程地図が書き込まれていたり、戦後のアメリカ各都市の写真切抜（百瀬和夫氏のコメントつき）が貼付されているが、今回の翻刻では割愛した。また日誌巻末に付された遠征参加メンバーの人物紹介も同じく割愛した。



## 百瀬和夫氏「アメリカ遠征日誌」

(立教学院史資料センター「百瀬和夫資料」429014-1)

7th April 1932

St.Pauls BaseBall team

Visit to America

永代保存されたい。

アメリカ遠征が決った頃は、漫然とした気持で、珍しいこと [が] あったら記録する心算で、始めた日誌が、斯くも貴重な書となった。野球試合をやりながらの異国の長い旅は、疲労が大。海上、車中、就寝前のホテルで書き綴った。それに関連し、後半生の悲喜交々の記事である。確かに平凡な人生ではある。

和夫記

~~~~~

渡米の前がき

大正期から、特に昭和初期頃の青少年の志気は、国外勇飛が大きな夢であり、領土である台湾、朝鮮等も稀らしい天地であるが、海を越えて未知の国、アメリカへ一度は行ってみたい。[ママ] と、云うのが、一般的な風潮であった。然し、その機会はなかなかなかった。

外交官、大学教官、官公庁の役人、一流商社の人々と、云うように限られていた。自分の意思で、自由には、勿論出国出来なかった。夢と憧れだけで、実現した者は極く少なかったようである。偶々、俺は渡米のチャンスに恵まれた。幸福者である。

即ち、昭和六年秋の東京六大学野球リーグ戦で、立教大学が優勝したことにより、それまで他大学(早稲田、慶応、明治、法政)は実施していたこともあり、勿論、多額の借金を覚悟でやることになった。

昭和七年四月(一九三二年)約三ヶ月余の日程で、一行一六名(別記)が、参加し行われた。立大は他大学と異り、米国に本部のある日本聖公会(キリスト教系)に属し、その信徒は、知事、市長、一流経済人等の有力者であり、何にかと有利であると聞いていた。日支事変から、大東亜戦争の前で、世情騒然としていた時期である。毎日のように、貨車で輸送し出征する同年輩を駅で見ている。「ベンを銃に変へて」と云う寂しい時代である。

政府、外務省は、渡米は反対して、叱るだらうと、われわれは思っていた。大学で文部省に申請したところ、「斯る時期だから、学生スポーツ使節としての使命を立派に果してくる様に…」と、激励を受けた。諸準備(主として、米国内の受入体制)は出来たので、四月七日朝、立大野球団は、久保田部長統卒のもとに、勇躍、日本郵船ご自慢の新造巨船、日枝丸(ひゑい丸)一二、〇〇〇トンで、北大[太]平洋を横断、北米シヤトルへ四日間の船旅と、大陸を汽車で、東部のデトロイト、シカゴ、ニューヨーク等々を旅して、帰りは、ワシントン、ニューメキシコの中部、西部の広大な高原を汽車で旅し、ロサンゼルス、サンフランシスコまでの内陸滞在約三四日、シスコよりハワイへ七日の航海、ハワイに約一ヶ月間滞在し、六月二日、郵船春洋丸で、横浜に向け八日の船旅を続けて、七月二日、約

八八日の長期旅行を終へ、帰国の予定である。

尚準備として、通常の作法、マナー、(自室外の一切)、風俗習慣の認識、一応の英会話の習得、各都市、地方の特色の再認識等に多忙な毎日であった。

身支度、 洋服(三ツ揃)上物(銀座一番館仕立約五〇円)  
短靴一足、ネクタイ三本、ワイシャツ四枚、ハンカチーフ三枚  
中折帽一、パジャマ、ガウン等は、部負担  
鞆(鉄板大型)手サゲ、各一個は自己負担  
万年筆、ノート、日誌帖、住所録、持薬、お守札、  
カメラ、フィルム三本、着替ズボン、ジャケット  
土産品、 相手大学外へのプレゼント(桜模様のハッピー二〇着)  
〃 〃 (立大のペナント三〇枚)  
船内持込品、 塩せんべい(大缶二) 船酔い防止用 } 差入物  
駄菓子三缶、その他食品多数

米ドル換算値、米一ドルは、二円二三銭(円安相場)

日本郵船(株)の好意、われわれ一行の往復船賃料金は、二等とし、待遇は一等扱いで、船中食は美味豊富、一日割約三八円とのこと。米国航路の郵船での生活は豪勢なもので、特に食事は、好む物を(極上)自由に食べられた。今まで、見たことも、勿論食べたこともない珍品、美味の食品の毎日であった。毎日が、愉快的、しあわせの生活であった。若い、俺は、…

参加した、立教野球団メンバー [学生の学年は一九三一年の優勝当時のもの]

|         |            |            |               |
|---------|------------|------------|---------------|
| 部長      | (立大教授、英語)  | 久保田正次      |               |
| 随員      | (立大教授、体育部) | ジョージ・マーシャル | [実際は立教大学体育主事] |
| マネジャー   | (学年本二)     | 藤田寛治       |               |
| 主将(遊撃手) | ( 〃 三)     | 関口 慶一郎     | スタメン打順 九      |
| 左翼手     | ( 〃 三)     | 三浦 次郎      | 四             |
| 中堅手     | ( 〃 三)     | 中島 栄       | 一             |
| 投手      | ( 〃 三)     | 辻 猛        | 七             |
| 捕手      | ( 〃 二)     | 小笠原 竹次郎    |               |
| 右翼手     | ( 〃 二)     | 国友 正一      | 二             |
| 補欠      | ( 〃 二)     | 加島 秋男      |               |
| 〃       | ( 〃 二)     | 木庭 喜好      |               |
| 捕手      | ( 〃 一)     | 百瀬 和夫      | 五             |
| 投手      | ( 〃 一)     | 菊谷 正一      | (三又七)         |
| 一塁手     | ( 〃 一)     | 山城 健三      | 三             |
| 二〃      | ( 〃 一)     | 畑中 重徳      | 六             |
| 三〃      | (予科三)      | 内田 庸〔肅〕雄   | 八             |

以上一六名

△ポール、ラッシュ先生

尚、米国内の受入体制、諸スケジュールの取り決めのためポール、ラッシュ先生（立大教授、聖公会役員）が、約二ヶ月前より先遣されて、各地の布石をして下さった。

（註）先生は、終戦後は、GHQ（連合軍司令部）の中將級で、立教大保存には、鋭意尽力され、退役後は、山梨県北巨摩郡清里村に入植され、牧場経営に従事、一九七六年、八一才で、御逝去されたが、先生の人生の大半を日本聖公会に奉仕された立大の大恩人である。合掌。

先生は、米国聖公会の司教（日本仏教の僧正格）〔ポール・ラッシュは実際は聖職者ではない〕

~~~~~

この旅行記は、出発から横浜帰港までのいろいろの事柄を日誌として記述したものであり、船中、車中、ホテル内で、随意に書き綴り、試合その他で疲労していても、就寝前とか、振動する船中、車中の記事は、乱筆、重複〔複〕、誤字等があちこちに散見されるため、偶々、昭五七年一月二日から約二ヶ月余相沢病院に入院し体調良好の機を見て、一から整理し、文意を保持しながら書き改めた次第である。

昭和五七年三月吉日、一九八二年

松本市相沢病院個室に於て 百瀬和夫（記述）

以上

~~~~~

奇しくも、数へて五〇年（一九八二—一九三二＝五〇）の時間が、流れたことになるが、半世期〔紀〕の中には、メンバーの運命にも大きな変化が生じ、うたた感無量である。

逝去した者、久保田部長、中島栄、木庭喜好、加島秋男、菊谷正一、畑中重徳、辻猛、国友正一、関口慶一郎の諸氏のご冥福をお祈りします。

~~~~~

### 旅立ちの日

昭和七年四月七日 木 快晴

今日は、幼少の頃から一度は行ってみたい。〔マ〕と、憧れ、思い続けていた。〔マ〕アメリカへ出発する日である。立大野球部合宿所で、七時起床。出発の朝の東長崎町（正確には、東京府豊多摩郡東長崎町）の合宿所は、行く者、残る者が、あちらこちらで談笑〔、〕賑やかな声がある。八時食堂で揃って朝食をすませ、俺は初めて着る背広姿で喜々としていた。九時表庭に整列。迎への自動車で池袋の大学へ行く。杉浦学長の壮行のことばに次いでライフスナイダー総長の辞あり、立教中学では全校生徒の万歳で、壮途につく。勿論立教大学で、米国遠征をさせることは初めてのことである。明治神宮参拝、二重橋外で、宮城遥拝、一〇時半東京駅へ着く。大変な人の見送りだった。先輩、学生、美しく着飾った女性達、他校の選手諸君も多数来てくれた。広い待合室もホームも万歳と写真攻めだった。一二時

一〇分発、京浜線熱海行の電車で東京を去る。横浜駅から自動車で、七号岸壁へ向う。

日本郵船の大きな新造船日枝丸（ヒエイ丸）が、（一二、〇〇〇トン）われわれを待っていた。

トラップを上り、綺麗に整頓された上部一等キャビンに入る。

同室は、投手の菊谷君、航海らしい船旅はこれが初めて、昨夏朝鮮遠征で玄海灘を往来したことはある。不安な中にも希望と期待は大きい。見送りの人々が、次から次と来た。知人も居れば、知らない人々も居る。贈物等沢山貰った。

スポーツ誌各社の要請で、記念撮影を全員上甲板でする。

二時半、船内を、ファン、ファンとあの独特な響きのドラが、鳴って、見送りの人々は名残を告げて、下船して行った。

三時、ボーボーと汽笛が、鳴り渡った。いよいよ出航である。急に緊張した気持になる。予め用意したテープが、投げられる。五色のテープが上と下とで握られて、とても壮観だ。船は静かに北米シヤトルへ向って、動き出した。静かに岸を離れて行く。“さようなら、ご機嫌よろしく”を上と下で繰返すのみ。誰れに云うでもなく、万歳と校歌とテープの風に、涙の出る位嬉しかった。次第に速度を加へて、テープは離れるにつれ切れてゆく。人が小さくなった。“日本よ暫くさようなら”下条良太郎君からのハワイへの便りを期待し、元気を出して航海を終へ、憧れの米国へ行こお。どんな国だらう…

三〇分程して船は港内で停った。水上警察の密行者探査とのこと。この時間に一、二等船客には、サロンでお茶とお菓子が出た。船客はわれわれ一六人、西洋人男女二人程、日本人は東龍太郎博士（東大医学部助教授で、ドイツ留学）〔、〕金谷母子（バンクーバー領事館二等書記生家族）外約一五人。

お互、今日からは、一四日間この船が共同の世界なのだ。

船酔いを防ぐためにも、船内生活を楽しく過すためにも、船内では、努めて動くことと教へられたので、珍しさも手伝い、Aデッキを一廻りした。五時左舷に千葉の山々が見へる。

日は西に傾き、沖合に汽船が二ツ黒い煙を上げているのが、小さく見へた。船は大きな波を破って、二本のスクリューが、つくる白い泡の航跡を長く引いて進んでいた。

六時半周囲は薄暗くなって来た。船は左右に少々揺れて、ギーギーと船体のきしむ音を聞きながら、デッキを歩るいた。胃腸が弱い人は船酔いすると聞かすが、俺は弱くない。Aデッキを歩るいて船内の様子を見る。もうすっかり暗に閉ざされて、何にも見へない。エンジンの音が船底の方です。それが頭に響いて苦になる。

一、二等客は、食堂へ出る時は必ず正装することが、作法である。七時夕食をボーイが告げに来た。軀も動く程相当揺れる。でも食事はおいしく沢山食べた。

メニューには、スープから肉、魚、野菜、飲物が各三種類あり好む物を指す。勿論英字、馴れないと、スープを二度呑むことになる。笑いごとではない。甲板の上は風がとても寒い。

マーシャル夫人（先生の奥さんと同行）と、日本語と英語の混ぜ合せで話しをした。夫人は里帰りで、東部のオハイオ市まで一緒だ。

暗い海上を時折り遠くの方から、サーチライトで信号して居る。

われわれの仲間から、早くも落伍者が二人出た。菊谷と加島。疲れている。航海の安全を祈って、九時就床。

四月八日 金 小雨

七時、ボーイの声で起床。船の寝台は、二段で、壁ぎはに設置してあり、頭の上のところに、キャビン（丸窓）があり、洗面所と便所、バス（洋風呂）が、一ヶ所にある。万事合理的で、至便だ。

船内は、一、二等客四三人と三等客八〇人程と船員三〇人程が、一家で苦楽を共にするファミリーである。然し等級は確然として居り、船底の三等客はAデッキやサロンには入れない。

長期になると、子供達は遠慮なくやって来る。それでいいのだ。

青森の遙か沖合を北上して居る由。まだ日本近海である。

頭も軽く、気分も良く、船の第一の朝を迎へた。

船室の丸窓のカーテンを引くと、大きな青色の波が、窓越しにうねっている。ガラス窓一枚の外は海中だ。

今日は雨降りだ。八時半朝食の合図が鳴る。背広に着替へ食堂へ行く。テーブルには、三三、五五〔三々五々〕、仲間も数人程〔。〕最初、西瓜〔瓜〕が出た。豆腐の味噌汁で飯を食べた。

洋食は後日に。倦るから今の内は日本食を主とする。

小粒の雨が降り、何処を見ても青黒い水の大海原のみ、

一〇時半頃北海道のずっと沖合を航行している事を航路図を見て判った。昼食後、雨も上ったので、Aデッキ（上々甲板で廻廊になっている）を、七廻り程走る。「11 Rounds [ʔʔ] about one miles」と表示してある。輪投げをマーシャル先生とした。

夕食前入浴する（海水で少々塩ばい）〔。〕国では、演歌「蔭を慕いて」が大流行であり、俺は大好きなメロデーだ。

娯楽室で仲間とよく歌った。夜、ダイニングルームで、一、二等客のため映画会があった。九時就床。

四月九日 土 快晴

良く寝れた。部屋付のボーイさんが、朝の紅茶を持って、起しに来た。菊谷君は気分悪いと云って、ベットの中。カーテンを引くと外は晴々としている。爽やかな気分で、朝食も美味。

デッキを散歩している時船尾の方に白い大きな鳥が、飛んでいるのを見て嬉しかった。船以外の目標が出来たから。千島列島に添って北上する由。肌寒い。

この船に二人の可愛らしい女子が居る。一人は金谷迪子（七才）〔。〕父親の勤務地、カナダのバンクーバー日本領事館へ母と行く。もう一人は、レイチューと云う〔。〕母国はロシアとのこと。五ヶ国語を一応話す由。（船員の話で、祖母は三等客）童話の「母を訪ねて」三千里に似た可愛いそおな少女。ロンドン、ローマ、上海と母を訪ね歩るいたが、シヤトルに居るとのことで行く途中。船員の話では、国から国の援護を受けて、旅して居る由。

手振り動作で、意は通じた。船と云う小さな世界で、子供は直ぐ友達になる。この季節の北洋は、大シケが続き今夜辺りから大荒れになるらしい。船の揺れも大きく、廊下は、普通には歩るけなない。九時ベットにもぐる。

四月一〇日 日 快晴

昨夜は頭が重苦しく良く寝れなかったが、八時起床。洗面、朝食は欠く。睡眠を充分とる工夫をしな

いと、病気になって仕舞う。航海の発病は、不安と味気もなく、二重苦となる。努めて快活に振舞い、運動することだ。この季節、この航路で大〔太〕陽が見られることは珍しい、とされている。この大〔太〕陽を今朝も見ることが出来、陽気は爽やかだ。北極圏は解氷期に入るとかで、波のうねりは一段と大きく、小山のような波濤が、船に襲いかかってくる。船の動揺も左右にひどい。俺の船室は右舷にあり、丸窓は水面より一〇米位のところに一列に列〔並〕んでいる。その丸窓が、波をかぶって外が見へたり、かくれたりする。うねりの高さは、七〜八米はあるだらう。

水平線が、波頭のためギザギザに見へる。大洋上では、郵船屈指の巨船も木葉に等しく小さな物だ。船は、毎時一六ノットのスピードで航行しているとのこと。

もう、船は大分北へ来た。千島列島沖からカムチャスカへかかるとのこと。動揺は大きい、金谷の子供と足元に注意し、手すりにつかまりながら、一番上のポートデッキへ行く。

輸出用の金魚が三樽あった。北側の樽には薄氷が張っていた。船では一番高い所である。そこから四囲を見ると、実に壮大な世界で、表現に苦しむ。船旅に倦怠と考へ込むことは、船酔いになり一番いけないこととされている。動揺はローリング（左右、前後）で次第に大きくなる。ランニングは中止。頑張って昼食に出る。

一日割約三八円の客だから、御馳走も沢山ある。見たこともない様な高級高価、珍品が食べられる。健康体であれば、こおした旅行は、天国だ。

夕食前、入浴、テーブルの上の物が動揺で滑り落るので、ワクをはめて防ぐ。船室で日誌を書き、九時就寝。

#### 北洋の海は寒く、波高し

四月一日 月 晴

大きなうねりで船が、左右に揺れて、軀がベットから落ちそおになり、びっくりして目か〔が〕覚めた。

北太平洋の墓場と云われる、ベーリング海。ここ三、四日が海流の関係で、揺れも一番とのこと。朝食は部屋。今朝も太陽が美しく海上に照っている。

陸内で見るとは美しさが違う。小山の様な波が丸窓より高く見へる。海水の色が、濃藍色に変わり、小山が次から次へと動いているようだ。雲と空と水が続いて見へるのみ。寒いので毛布を着て、デッキで話したり、遊びに興じている男女もあり。カムチャスカにかかるので、気温は $-12^{\circ}$ 〔マ〕とのこと。昼飯は美味。甲板上は危険なので、室内で遊ぶ。夕食前入浴して、さっぱりした。夕食後サロンで、二回目の一等客のため活動写真があった。余り面白くなかった。

航海の安全を祈り、一〇時就寝

四月二日 火 風雨

朝食の知らせを知らず、本島によく寝れた。

丸窓は波に洗われ、ガラス一枚、外は海中だ。

生憎、今日は風も強く、雨天。昨日辺りから東経 $170^{\circ}$ に入り、アリウシャン群島の沖を進んで居るとのことで、寒い。

北極洋の冷たい海水が物凄勢で、流れて行く。

船がその海流を横切るので、三～四日は動揺も大きい由。

歩るとき足元が安定しないので、倒れそおになる。

空と海しか見へない日が、後五日も続くのか、と思うと太平洋は、本当に広大だと痛感する。

船員とも仲良になった。彼等の話しでは、この季節運がよいと、鯨や氷山が見られるとのこと。それにオーロラも見られるとか。是非見たい。ピンポンやデッキゴルフも退屈しのぎにやるが、単調である。憧れのアメリカへ後七日で着く勘定。今夜寝ている間に東経180°の線を越すことになる。同室の菊谷君も船酔いも幾分軽くなったようだ。

隣のキャビンで仲間の談笑の音がする。一〇時半床入り。

#### 四月一二日 火 曇天

日付変更の日。

昨夜半東経180°中心経度を越へたとのこと。この線を境いに、一二日が二日あることになる。時差のあることは、世界の広大さを示す。余程北へ寄っているようで、気温が激変し寒い。

四時頃急に北方海上が曇ったと思ったら、アラレの大粒なのが降って来た。とても壮感〔観〕だった。子供の様に嬉しくなって、甲板の上を走り廻ったり、迪子ちゃんと、かき集めて、小さな山を造った。北極洋の黒ずんだ冷たい海流が、大きなうねりとなって流れて行く。晴間をみて、一番広い甲板で、元気な者だけで、キャッチボールをする。投げるのにも、捕るのにも相当苦心する。ボールを一つ海へ落した。直ぐ見たが、小さなボール等明〔マ〕らない。船の中の人々とは、すっかり打ちとけて、迪子ちゃ〔ん〕のお母さんも元気になられ、周囲は朗らかになった。

本科二組で麻雀し、俺と菊谷が勝った。一一時就寝

#### 四月一三日 水 雪、晴

今朝も朝食抜き。実際に八時の食堂行は、つらいことだ。日本国内なら四時頃になる訳だから。九時入浴、洗髪。

さっぱりした気分になり、未だ喫い馴れない煙草をふかし乍らたまり場のデッキへ行く。三時半のお茶の時間後、全員元気になったので、記念にユニホーム着用で撮影することになっていた。ところが、急に雪が降って来たので、中止し、Bデッキで軽いキッチボールを三〇分した。夜三回目の活動写真あり。

大洋上の天候は移り変りが、激しい。雪が止めば、星空になる。一〇時頃、月夜がとても素敵で星が大きく見へた。

日誌を整理し一一時半頃就寝

#### 四月一四日 木 晴、寒風

寝坊は、何処も同じ。迪ちゃんが、「兄ちゃん」と云って起しに来た。朝食はキャビンで済す。背広に着替へるのも上手になった。読書室へ行つて、国への船中便りを三通書く。

海図を案内所で見ると、航跡が記入されて居り、昨日辺りから、アラスカの沖を通っている。道理で寒い。

昼食後、ユニホームを着て、全員で記念撮影をした。迪子ちゃんも、例のさすらいの少女、レイチューも仲間に入った。

北洋の潮風は相当寒いが、陽が当たっている処は、割合に暖かだ。Bデッキへ網を張って、本式にキャツボールを汗の出るまでやった。太平洋上でキャツボールをしたと云うことは、一大痛快事で、将来又とない出来事だ。バスへ入り汗を流したが、万人の出来ることではない。三時のお茶は、おしるこ。

夕食は体調も良く美味かったので、あれこれ沢山食べた。

振動音にも馴れて、一〇時半就床。

#### 四月一五日 金 晴 寒風

今朝九時、船客はじめ船員は、救命胴衣(袋)を着して、指定のポートデッキ(最上部)へ急ぎ集合、との合図のドラが、鳴った。非常訓練である。要領の講習は乗船二日目にやった。三号のポートが、俺達のポート。よく覚えて置く。

理髪部へ行き、カッテングオンリー(刈るだけ、アメリカ式)で、散髪したら、\$一(一ドル)(日本円二円三〇銭位)取られた。これが、ドルの支払初め。

入浴し洗髪して支度したら一一時半だ。東京と時差約六時間だから朝の六時頃だ。船員の声で、指す方を見たら、鯨が三頭沖合を船と反対方向へ遊泳して居るのを見た。小さく見へた。

午後船長室へ行って、高橋船長に、船内外のことや、バンクーバー。[マ]シヤトル等のことを、質問も交へ、いろいろと話して貰う。

#### 四月一六日 土 晴天

九時起床。ベットは抜け出せばよいから、斯る時は都合よい。朝食の知らせは、毎朝ベットの中が主だ。今日の海上は、ゆるやかなうねりで、波高けれど船の揺れは、ゆっくりしていて、海上は明るく航海日和である。

毎食事のメニューは、各人宛で、京都、奈良等の古い風景、人形等の図版の高尚なもの、外人向であるが、俺は記念として、毎回分保存して来た。迪ちゃん、レイチュー、金谷夫人、俺とで、鬼ごっこをして時を過す。レイチュと遊んでいると、幼稚園式だが、遊ぶ時の英語の手伝になる。船内生活にも馴れて、有効的に過せるようになった。船内備付けの郵船はがき二〇枚程に国の人々への便りに馬力をかける。午後のBデッキは気持がよいので、デッキチェアーに横臥し、海を眺めて一時を過す。夕日の影は格別で、真赤に染めて、真ん丸い大きな太陽が、静かに水平線に沈して行く光景は壯嚴の一言に尽きる。船から水平線(四方が水平線だ)までの巨〔距〕離は、約一八哩(カイリ)、八〜九里か。

夜、最後の慰安の活動写真あり。喜劇で大いに笑った。

そろそろ、下船の用意をする。一〇時就寝。

#### 四月一七日 日 晴天

良く寝れたので、朝食に張り切って出席する。

部屋で食べるより気分も良く美味しい。解っていても寝坊はだめだ。



昨夜船員さんが、明日は陸影が見へると云っていた。材木の様なものが漂流している。漁船が、遠方に二ツ程、午後二時頃、船員が遙か前方を指し、陸が見へると云うので、じっと見詰めると遙か水平線上に霞んではいるが、確かに陸だ。オー遂いに米大陸だ。嬉しく、仲間と肩をたたき合った。一寸部屋へ帰り、今度見たときは、山客がはっきり見へ、山上に雪も見へた。

山の形も日本とは幾分異り線が鋭い様に思へる。カナダの沿岸である。海水も黒ずんだ色から濃藍色に変わり、アホウ鳥が船を追って飛んでいた。東大医学部の東龍太郎博士（後年東京都知事になられた。）が、日当りいいデッキで、米国内での注意点、その他面白い話をして下さった。段々湾内へ入って行く。陸影は、はっきり見へ、人家の点在しているのも見へた。藍色の入江は奥が深い。右側は、米領だ。日沈、内外一等客三〇数名と船員幹部との送別交歓会が、サロンで開催された。会場には、日米国旗、美しい花、花電燈で飾られ、テーブルには紙帽子や爆竹その他が列〔並〕べられてあり、紙帽子をかぶり、談笑しながら次から次と運ばれるご馳走を食べながら、紙玉や爆竹を投げ合って、歓を交し合った。なんのこだわりもない和気溢るる晩餐会であった。郵船からのプレゼント（万年筆）あり、初めての経験で深い感銘を受けた。

湾内の夜景を船上から、むさぼる様に眺め入った。

一〇時頃、ピクトリヤと云う沖合で船は停った。カナダの移民官が、ランチでやって来た。喫煙室で、バンクーバーで降る人の検疫あり、部員は全員パスした（トラホームは上陸不可。元へ帰れだ）

移民官を乗せて船は動き出した。暗い海上に時折り燈台の光が映る。船の動揺はほとんどない。明朝は、バンクーバーの港へ着く。憧れの米大陸へ第一歩を踏み入れるのだ。

米国内は、どんな国柄だらう。期待と希望は大きく、なかなか寝れない。一二時過ぎ就床。

## バンクーバー上陸

四月一八日 月 曇天、後雨

廊下の人声で眼が覚めた。7時半頃か。丸窓から見へる外は曇り空。建物や鉄塔が見へる。何時の間にか、俺はバンクーバーの港へ着いていた。初めて見る異国の朝の様子。港で働いている人夫は重そおな荷物を運んでいる。

上陸の支度を整へていたら、十数日、仲良しだった、金谷迪子ちゃんが、左様ならをしに来たので、一緒に金谷母子のキャビンへ行く。

お父さんは、小肥った人で、互に挨拶した。迪子ちゃん達は、ここで下船する〔。〕迪子ちゃんを抱き上げてやる。握手して別れて行った。

レイチューは二日程前から姿を見せなかった。母を訪ねて三、〇〇〇里の哀しい少女。お母さんに訖度再会出来ることを祈りたい。

九時われわれも一応下船。税関吏は英国人で、一時荷物を検査しOKした。俺は第一歩を改めて力強く土に印した。

自動車（鶴見祐助〔祐輔〕氏の弟〔鶴見憲〕外交官の差廻し）で、大陸日報社へ行き、スタンレーパークへドライブする。久々の陸上の行動で、昨日まで、船酔でぐづくづしていた仲間の連中も、すっかり元気に復し大はしゃぎ。この公園は周囲八哩もある自然公園で、市民のキャンプその他憩いの場とのこと。われわれの傍をキジ三羽が、ヒヨコヒヨコ散歩していた。美しい草花や、森や湖が調和よく散在し、好ましい風致だった。かなりの巨〔距〕離をドライブしてから、プリテッシュ・コロンビア州立

大学を訪問した。美しい大きな庭を持った大学で、男女共学とのこと。この頃の日本では、男女共学は思いもよらないことだった。極めて進歩的なことと思った。

整った姿態の女性が大量目についた。デパートの前を通りウェスト街は整った街並だった。この市には日本人も多いようで、街頭でも見受けた。市電は型が大きく、自動車は旧式のご粗末なものが走っていた。昼食は大陸日報前の支那料理亭でやる。

アメリカンインディアンの手造り芸術品展を見に行く。彼等から見れば、今日からわれわれは外国人である。服装その他は堂々としているが、東洋人の何物の行列だらう。一と奴等は思っているだらう。

文化住宅地を見学したが、外見ではなく、西洋人は生活そのものが巧者だと思ふ。日照のいい表庭に草木を植へ、サク等はほとんどない。丸見へである。むしろさあ見てくれ一式。日本人は周囲をかこい見へないように造形する。又感心したことは、良家の令嬢が、嫁入り前、将来の家庭人に備へ看護婦として修養する風習だと話された。この風習は米国内でも盛んに行はれて居る由。日本の上流と称する世界では人手を使うことを美德としている。

曇天なるもユニホームに着替へ、市営のホワイト・スポットグラウンドへ行く。午後三時半から、当市の消防団を主体とした選抜軍と試合を行う。試合中〔半〕ば頃から、雨足も強くなり、田んぼの様になったが、入場料の関係もあり七回終了まで、強行〔。〕8:6勝。邦人観衆が多かった。大急ぎで船へ帰り、バスへ飛び込み汗を流した気分は例へようもなし快々デー。船は間もなく動き出した。バンクーバーの街が、鳥の影になるまで、俺は見詰めていた。

サーチライトが二本夜空を照照していた。船内一等客は部関係と他に数人、急に寂しくなった。船は目的地シヤトルに向って航行中。雨中戦は今後バンクーバーを思い出す度に印象深いものになるであらう。一一時床へ入る。日枝丸の最後の夜。

#### 【バンクーバーでの教訓 四月一九日】

バンクーバー市（カナダ領）は、われわれが訪問した、昭和初期頃は、英国の領地であった。

英国の貴族風強い時代の中で、上流社会の令嬢と称される女性は、自から進んで、将来家庭の主婦であり、母親となった時の用意として、結婚前、一流病院の看護婦を志願し、立派に勉強して、卒業証書を、喜んで受授〔ママ〕。このことを誇りにさへ思ふ由。

尚シヤトル外の都市等でも流行しているとのこと。

日本の場合ほどおだらう。

貴族の婦女や、一応上流と誇称する社会の令嬢さんは、女中をコキ使い往來で持物等は決して持たず、格好をつけて行動することだけを、考へていたし、家族も、やっと女中が使へる、又幾人家に居ると云うことで、身分の上下とした風潮があった。

この二つを比べてみて、感ずることは、別問題だ。只、云いたいことは、気取ってみても、欧米文化や社会慣習には、到底及びもつかない低位であると云うことである。

#### シヤトル上陸

四月一九日 火 晴

八時少し前起床。一四日間の日枝丸での船旅も終った。

丸窓から外を見る。船はシヤトル港の岸壁に横付になっている。

朝食も美味。喫煙室で、米国官吏の検査あり。全員OK。

税関吏の検査も全員OK。荷物も手配済み。船長はじめお世話になったボーイさん方に挨拶して、クラブ（上下時の船橋）上に列〔並〕ぶ。

われわれを待っていた人々が、下で合図の手を振っていた。

四台の大型高級車（クライスラー、リンカーンの表示が読めた）が、待っていて、ポール・ラッシュ先生が、ニコニコ顔で近寄って来られた。

シヤトル市の有力者ホールデン氏（歓迎委員長の由）が先頭。

その前に、二台のモーターカブ（市警官の白バイ）が、先導し、市中へ入ったら、サイレンを鳴らして、約五〇キロのスピードで走行。（これは、歓迎会への時間がなく遅刻する心配のため、非常時扱いでやった由。米人は会合時間を遅へることは、恥じであり、無礼となる風習。学ぶべきことと思った。非常時扱いのサイレン使用は、大統領、政府上級官、議員、知事、市長、消防車〔、〕急救〔マ〕車と市長の認めた市賓に限る、ことを後日聞かされた）歓迎と云う点からすれば、意外にも思う。即ち、廃〔排〕日の米国で然も上海事変直後だけに。サイレン車だから、横断道の通行人や自動車は停止し、優先通行である。

シヤトル市は、人口約四五万の都市、海岸から直ぐ市街地で、坂の多い都市、三〇階位の建物が、中心部に一〇位ある。ワシントン・アスレチック・クラブへ着く。黄色系の壁の二五階ビル。一七階が、われわれに与へられた階で、No一七〇六が俺と菊谷の部屋。窓から外を見ると、人や自動車が蟻のようだ。港の船、山の手街の赤や青い色の家も見へる。勿論、こんな高い所へ上ったのは初めてだ。

アメリカでは、自室内は服装に厳しい制限はないが、廊下では必ず、ガウン着用か正装、エレベーター内に婦人が居るときは脱帽。これを無視すると、怒鳴られる。要注意のこと。

昼食は、ホールデン氏等の接待宴。午後二時よりパシフィック、コーストリーグの開幕戦を見に行く。コーストリーグは大リーグへのステップ台。シヤトル軍が1 vs 5で負けた。ホテルの専用大型バスで帰る。

外人の美しい女性は、本当に素敵だ。明るい表情で、スタイルが、とてもいい。邦人の女性も見ると、比較にならない。彼らに数歩置くだらう。夜が来て、ネオンサインが美しい。銀座にも、二〜三あったが、段違いだ。夕食は好意で日本食、瓜もみ等が出て、とてもうまかった。夜八時、ホールデン氏と夫人も加わり、近くのセヤター（劇場）へ行く。案内嬢はシルクハットにフロックと云う姿。部厚いジュータンの廊下足音などしない。レビューはよかった。劇場へ入ると正面左側に巨大なパイプオルガンの筒が一〇本以上設置してあり、重厚な美しい音色で場内に響き渡っていた。曲は「黒いひとみ」の一節と思へた。

ステージのレビューガールは半裸体で、ピョンピョンと大勢で舞台を飛び廻る。浅草の松竹歌劇も観ているが、ガールは大柄でスタイルが揃っていて迫力がある。

ミスター・ホールデンは、上品な中肉中背、半白の頭髮に眼鏡、常に微笑、物静かな中老紳士。夫人は長身の三〇才位の美人。今日は思いがけない大歓迎で疲れた。

米国での第一夜である。静かに寝る。

## ワシントン州都オリンピアへ

四月二〇日 水 快晴

今朝は早く起きなければならない。それは今日、ホールデンの案内で、タコマ市と近くにある、ワシントン州の州都オリンピアへドライブするからである。長途の船旅も医 [マ] へないこととて、楽しいが、辛い。八時、四階の食堂で軽い朝食。

九時、高級自家用車（聖公会メンバ）四台で、約八〇哩あるタコマ市へ向う。郊外は田園風景で、牧場、畑が連なり、青々とした丘線が長く続きのどかだった。邦人の農夫が働いていた。お互に手を振って交歓し合った。

田舎の質素な人々も農事に忙しそう。洗濯物を干してある。

実際の米国をのぞいた様に思へた。道路は、どんな郊外でも舗装されていた。タウンセントやオーバン等の町を経て一二時頃タコマ市（昭二年太平洋横断飛行で有名）へ着いた。

商業会議所を訪問挨拶し、次のオリンピア市（ワシントン州の州庁所在地）へ向う。このコースは道巾（推定三〇米位）広く、一〇〇キロ以上のスピードで走り、木の電柱が目の前を、ポッポッと云った、リズムで過ぎ、小虫が顔に張り付いていた（手で掃った）恐い様な快感を味った。途中で邦人経営の花果実へ立寄った。A 老人が、二三日の日本人会のパーティーにシヤトルへ行って、又お会すると愉しそおだった。

オリンピアホテルで昼食、当地の米人有力者十数人の招待会だった。

州庁は白の大理石の大きな建物（約四〇〇万ドルとのこと）[。] 好意により庁舎の塔一番上まで上る。市街は高い建物等は少なく、平たい静かな街と云う印象、人口数万とのこと。帰途、飛行場前の喫茶店で、コーヒーを飲んだが、一味うまかった。われわれのドライバーは同年輩らしく、一一〇キロで飛ばし、ニヤニヤしていた。俺はメーターをのぞいて、嫌な奴だと一寸思った。六時半からワシントン大学在学中の邦人学生の招待宴に出席する。祖国の様子を知らう、と質問に終始した。或る者が、立教が優勝するとは思はなかった。[マ] と皮肉った。双方で、エールを交歓し盛況裡に散会。

クラブの自室へ急ぎ、入浴（大型バス、自分で操作）し、今日の出来事を、日誌帖に書き込む。菊谷君は、いびきをかいている。一一時就寝。

四月二一日 木 快晴

八時起床。いくら張り切っても、長途の疲れは残っている。

大急ぎで、飯を食うために背広に着替へ四階の食堂へ行く。

白も居れば、黒もいる。食堂はお静かである。部屋へ帰って、St.paulsのユニホーム（渡米用に新調した、グレーの日米国旗のマークを左胸に着けた、スマートなもの）に着替へ、クラブバスでワシントン大学（日本へ三回程来日した馴染さん）のグラウンドで、本格的な練習を張切ってやる。久々のボール投げで、気分上々 [。]

一二時終り、そのままの姿で、木曜会と云う邦人実業家による昼食会に出席。祖国の話が中心。帰りはクラブも近いので散歩しながら帰る。和やかな陽当りの良い日だった。坂を上って、見物しながらバットをぶらさげて帰る。通行人が、げげんな表情で見て行く。何物達だらう…と。日本と異り路上で、女性を沢山見受ける。暇なのだらうか。身軽な服装で、明るく堂々と歩んでいる。好ましいと思

う。服装を改め、三時半からのワシントン大学、ジャパンソサイテーター主催の茶会へ出席する。

会合者は、W大学の女性、二世日本人や親日の米女学生達。会場へ案内されて入り、先ず驚いたことは、居並ぶ女性群の身長は、われわれ位ある（立大ナインは長身者多く、スマートとの評あり）

明るく健康的な美しさ、唯単に綺麗と云う部類ではなく、伸びのある明朗さだ。いきなり、われわれの間へ入って、話しかけられたので、正直まいった。こんな事ならもっと英語に力を入れればよかった、とは後の祭り。思い切って、Can you Spiek japanis [マ] とやったら“on” [マ] で大笑いとなり、反って会の雰囲気ソフトになり、日本女性から“あなたはいい人ね”とひやかされた。後悔事だが、俺は英語に力を入れなかったが、一応不自由しない、スピーチやライティングは、三ヶ月位彼等の中に居れば可能と思う。彼女等の自由な応対振りは、日本の女子大生ではとても出来ない。国柄が違うこともあるだらう。余興に日本人少年少女の唱歌“さくらさくら、やよいの花は…”があった。ダンスが始まり、俺は駄目だが、中島、国友、小笠原君等は平素ダンスホールへ通い、今回に備へて練習したことだらう。彼女等にひけとらぬ踊り振りで、一段と人気も高く、楽しい会合であった。豊科出身者も居た。

五時半、岡田氏の車で、市内見学。夕食は、シヤトル在住の邦人主催の支那料理の歓迎会（日本人の都市に於ける職業は、主としてグローサリー（雑貨商）で成功して堂々たる風格だった。商社マンも居るだらう）で、ここでも、日本国内の最近の様子を語り合うのが主体だった。美味で沢山頂いた。今日は文字通りの歓迎攻めだった。夜一人で散歩してみた。

#### 四月二日 金 薄日

一七階のカーテン越しに外を見ると、どんより、とした曇り日。

今日、ワシントン大学と同校グラウンドで、初試合。九時起床。

午前中自由行動なので、勇気を出して一人で白人の世界へ入って見、聞きする心算で街へ出る。クラブを出て約一時間近く繁華街を歩く。ウインドの前に立って物色、欲しい物ばかり。一一時半からシヤトル市商業会議所主催の午餐会に出席した。大広間には約三〇〇人程の人々が拍手で迎へてくれた。頭を下げ黙礼。余興として、女性のピアノと独唱があった。この会の模様は、ラジオで放送されるとのこと。W大との試合は、三時プレーボールだ。日本と異り米国では、大学野球は余り人気がないようだ。留学生も含めて男女学生が数百人応援していた。延長一二回目一点リードされて負けた。夕刻七時から日本人教会の晩餐会で、米人も混じへた会合だった。形の如くお祈りから始まる。

終って、レスリングを観に行く。加瀬と云う好青年が、やるのだ。試合中、苦しみもだへて堪へる仕草に、大声を上げて、“ガンバレ ヤッツケロ”と猛声援した。初めて観るゲームの印象は、惨忍で嫌だった。試合が済んで、加瀬のご馳走に預ったが、われわれから“骨が折損しないか、苦しいだらう”と聞いたら、彼は意外にも平気な顔で、“ショーなもの”と云って笑ってみせた。即ち、観物で話し合っでプレーし、観客を喜ばせるのがコツのようだ。移民で渡米した人々の中には、生きるため斯る職業人も居るのだ。

ホテルへ帰って、早く寝らう。

#### 四月三日 土 曇天

八時頃起床。シヤトルの朝、窓越しに下を見ると、小さく見へる人影が忙しく動いている。街の騒音

が、ゴーゴと響く音で、大都市であることを知る。神戸と云ったところか。白人は路上でも服装を乱している者は少なく、交通道德は守られている。又婦人同道の折は、内側へ誘い危難をカバーすることが、紳士の常識の由。left keepである。シヤトルはカナダ領に隣している東北部の港街でもある。ユニホームに着替へ、N.P.Hotelへ昼食に行く。日本食は久し振りなので、四杯平げる。

二時半よりW大との二回戦。昨日はクロスゲームだったので、相当人気あり入場者も多かった。一、〇〇〇人位か。途中から雨がポツポツ降って来た。6:4で勝ち、一勝一負。五時終了。W大より記念品を貰い、立大からは、持参した、ハッピーを贈る。〔。〕ハッピー（しあわせ）と云って喜こんでくれた。

宿舍のアスレチック・クラブへ帰り、背広に着替へ、三晩宿のこの部屋ともお別れして、N.P.Hotelへ移る。日本人経営で、格落ちだ。経費実力なら、これでもやっとなと云うところ。

六時半より、在シヤトル及び近郊（一〇〇キロ遠方の人も多数とか）から参集した老若男女の邦人の歓迎会へ出席する。支那料理で、お腹が空いていたので、とてもおいしかった。型の如く、自己紹介〔介〕した。今日集まられた人々は、移民局の世話で渡米し、各地を放浪し、辛苦に堪へて、今日一応の成功を得た人々とのこと。四〇年前に渡米した人や、二ヶ月前から今日を楽しみに待っていた人や、先日のタコマ行で会った人々で、東京の渋谷、浅草間に地下鉄の計画あることや、特急が東海道線を走ることや、東京は人口六〇〇万人、自動車も五万台はあるだらう、と話したら、皆さん嬉しさうだった。

吉村と云う娘さんが、俺のそばで、質問したり、じっと聞いていた。二世には珍しく温順な人。九時拍手と万歳裡に閉会した。なごやかな会食であった。

今日の会場は、日本人街にあり、少し離れた場所で催されるダンスパーティーへ行く。着飾った男女が、ずらりと列〔並〕んで居て、拍手で迎へてくれた。先程の会の人々も加わり、賑やかだった。俺はダンスはやれないので、椅子に掛けて見ていた。吉村嬢が、教へて上げるからケイコしなさい。〔マ〕と誘ってくれた。が、早速OKしなかった。俺の持論である、“人が人のやることだ、それが俺に出来ない筈はない”〔。〕意を決して教へて貰うことにした。気の毒に幾度か彼女の上物の靴先を踏んで、“スミマセン”の連発。一時半頃岡田氏の車でN.P.Hotelへ帰る。

ホテルのロビーに慶応も法政も止宿しているので、写真があった。

今日も朝から盛り沢山の行事があった。就床。

#### 四月二四日 日曇、雨

九時起床。足腰が痛む、昨夜から俺一人。曇天だ。

話しによれば、シヤトルは雨の多いところとのこと。ショボ、ショボと雨が降り出した。今日は、日曜日なので、働くことは止めにして、教会で、ミサを受ける慣習に習い、迎への自動車で教会へ行く。多数の信徒が、着席していた。俺の隣席に、川上ヨシ子と云う人が居て、米国の教会作法を小声で教へてくれた。

一二時半礼拝は終つて、こん夜は東海林〔ルビ:ジョージ〕さんの教会へ行き保刈さんを待つ。松本の横田の人の由。その方の家へ行き久し振りに純日本食を頂く。松本の話しを暫くして、三時頃から保刈さんの案内で、W大学の校庭を一廻りしたが、造形しない美しさのある大学を見た。それから、ワシントン湖の岸辺を約二時間ドライブした。邦人移民の汗の結晶である畑や果実園を見た。六時、N.

P.Hotelへ帰る。国への便りを書く。

山城より電話あり、彼の部屋へ行く。先日の大学のテーパパーティーで知った有泉文氏の宅へ行く。上田市の人のこと。姉妹三人居て、レコードをかけたり、歌ったりして愉快的な夜だった。

お母さんは、更科郡の人で、温順な人柄と見受けた。

吉村嬢も来る予定だが、学校のことがあるから、よろしくとのこと

名は、トミと云う由。二世の日本人は未だ知らない、日本を慕っている。日本の話をするのと誰れでも父母の国、日本へ行ってみたいと云う。ここで、短時間ではあるが、俺なりに聞いたり、見たり、談論して感得した事の二、三を記してみたい。

#### 所感 その一

米国は国名の如く、世界中から新天地を求めて、希望に燃へ渡来した様々な人種の集合体である。イギリス人もいればフランス人、イタリア人、ロシア人、ユダヤ人、東洋人、黒人等々が〔マ〕

コロンプスが、ヨーク（英国にヨークと云う港街があり、そこによく似ているところから、“新しいヨーク”即ちニューヨークとなった由。嘘か、本当かは知らず）へ上陸し、以来東部（ボストン、ニューヨーク方面）が発展し、次第に中部、西部へと移動して行った歴史があり、かの南北戦争前後の米国は開拓者魂が到るところで吹き出し、インデアンを征服し、黒人をアフリカから狩出して来て、奴隷〔ルビ：ドレイ〕として売買され使役されて来たが、大統領リンカーンの勇断で開〔解〕放され、ジョージ〔マ〕・ワシントン大統領と、この二人の偉人により、亜米利加合衆国として、曲折はあって、今日の超大国となった。〔マ〕と知る。従って、われわれが旅した一九三二年頃は発展の途上であった。

広大な未開の大地が、西部にも中部にも広がり続いて、当時の人口は、約八、〇〇〇万位。だから裕福な富者も居れば、その日暮しの貧者も多数いた筈。ニューヨークやシカゴの様な大都市に明暗が生じていた。

国民性は、気取り屋も居れば、粗雑者もいる。国力が豊富だから、自然に明るく、景気よくやる。単純なところもある。

俺は、この国と日本は仲良くして欲しい。〔マ〕と思った。〔マ〕し俺は好きな国風で、許されるならば、移民してもいいと思った。

#### 所感 その二

渡米前は、日本は極東で戦争状態にあり、米英は強い関心を持って居り、西部の一部では廢〔排〕日の気風さへある、と聞いていた。外務省、文部省も、斯る折だから日本青年の良い面を、スポーツを通して親交して来い。〔マ〕と云う励しもあり、やって来た現地米国内の感情はどおか。直感的であるが、記してみる。

表面的には、格別これと云ったこともない。立教が聖公会関係である点もあらう。日が経ち米人の招待会に幾つか出席し段々と解って来たことは、日米国の空気、情勢は確かに不穏であらう。然し、合衆の米国民には、親日家も多数居るようで、ベースボール・マンのわれわれは、到る所で別扱いの温かい親切心に接した。“大人のゆとり”と云うことなのか。次期大統領候補者（共和党）スミスさんとは、ニューヨークで招待を受け、ワシントン州知事は訪問時、握手して歓迎してくれた。又、ロサンゼルス市長は、市賓に与へるラッキーキー（幸運のカギ）を以って歓迎してくれた。その他キリスト教の高位者、実業団の有力者等々が、自家用高級車を提供し、モーターカーの警官先導は、各市で、やっつく

れ、ワシントンの日本大使館では、出淵大使から、“次回この様な計画をするときは、もっと学生らしいプランでやるように”との訓示めいた歓迎のことばを受けたことを覚えている。

### 所感 その三

シヤトルの或る家に招かれて行った。その家に二世の男子三人居り、長子はW大二年、次子は高校三年、三子は高校一年で、皆んな元気者。彼等の部屋に、剣道用具と柔道着があったので、その方から話合った。父母の勧めでやっている由。好きか、と聞くと、笑っていた。日本では中学の正科になっていて、厳しい指導を受ける、と話した〔。〕

偶々、日本と米国が若し戦う様なことがあれば、君達はどおする、…長子曰く、“父母は確かに日本人だ。ミーの生れたところはアメリカ。そして、今日まで、アメリカの恩恵で大きくなった。アメリカのために働くことにならう”と、大要の意見であった（日本語は割合上手）〔。〕

この子等の考へは、正しい青年の考へ方だと思った。

この様な二世、三世が、若し日米戦はば同胞〔胞〕相打ちと云う不幸があるやも知れずと思った。実際に大東亜戦争の戦場では、米国民として、二世、三世の人達は、祖国日本と戦った。

そして武功を挙げた者も多いと聞く。

米国政府の国民への愛国心の高揚には、各学校、官公署等で毎朝“星条旗に挙手しながら、国歌聖歌〔ママ〕”が義務づけられていると聞く。事実各所で、この光景を見た。

### 四月二五日 月 晴

八時三〇分頃起床。朝食は、トーストと牛乳、目玉焼。

日本への便り、一〇通程、ホテル内のポストへ投函した。

今日、晴れ上がった気持の良い日。ここ日本人街は道路も概してご粗末だ。坂の多い街で、市内電車や自動車が、上下して忙しそおに走っている。一時ユニホームに着替へ、先日行ったコーストリーグ（三A職業野球）の球場へ行く。木製のスタンドの田舎球場だが感じがいい。土地の日本人チームの大洋とは6 vs 4で勝。観客も割合多く、先日来世話になった方々の顔が見受られた。日程の都合で、ダブルヘッダーである〔。〕二試合目の、日本アスレチック・クラブ戦で、俺は二安打して調子が良かったが、途中、足にボールが当り痛むので、小笠原君と交替した。この試合は4 vs 2負け。終了後全員で記念撮影をする。滞在中何にくれとなく親切に世話してくれた吉村トミさんが、ベンチの横で、紺色のオーバー〔を〕着て、観戦していた。記念にボールにサインして贈呈したら、よろこんでいた。旅を思い出深いものにするため、カメラを五\$で買う。イコンツアイス製の独乙品。カメラは、コダック品が優秀だと思っていたが、買った品は、押せば飛び出す。

軽快で、格好もスマート。どんどん撮って、いい記念にしよう。

ホテルへ帰って入浴。荷物をまとめて、日本食でシヤトル最後の晩餐とする。八時バスに乗り、ユニオンステーションへ行く。（ユニオン・パシフィック・レイルウェーカンパニー）と長い名前の会社で、民営で、シヤトルから二晩三日走ってミルウォーキーまで行く）〔。〕屋内にプラットホームのある大きな駅。ホールデン夫妻はじめ四／一九日以來大変お世話になった、米人、日本人の男女約八〇人の見送りである。ピュールマンカー（寝台車一等）一輛に乗込む〔。〕

九時四五分、六日間を過し、嬉しい思い出多い、シヤトル（別名セヤロー）の地を後に、シカゴに



向って動き出した。

お互い手を振っているのみ。“又逢う日まで、又逢う日まで。”は讚美歌○番〔405番〕の一節である。親しき同胞諸氏よ。何時何時までも健在で、幸多かれ、と折るや切。今列車の中で、今日の事々を書いている。約一時間位走ったか、トンネルの中を軽い音をたてて走っている。蛙の鳴声も停車の折聞へた。外は暗くて、何んにも見へない。長い汽車の旅なので、各自適宜自分の席をつくる。俺の隣りは、畑中君だ。勿論一人一席。

## 【シヤトルで実感した教訓 四月二二～二五日】

### 一. 少年の善行

ワシントン大学との試合の時のことである。

われわれ立大ナインは、ワシントン大学のグラウンドで（草あり小石ありの日本の高校級の施設）試合前の練習をしていた。悪戯盛りの近所の男の子（一二才位か）三人が、傍へ来て、用具を手を取ったり、ボールを拾って来たりして、われわれと仲良しになった。

いよいよ試合開始となったら、さっさと入場口（ここで入場料を払う）へ行くので、俺は、ここに居ろ、と手ぶり〔で〕教へたが、彼等は、ノー、サンキューと云って、ニコニコしながら入場料を払って、観戦していた。

われわれの傍で、無料で観戦しても、怒られることないのだ。

### 二. 会合の時間を厳守する風習

シヤトルを初めとして、全米各地で、実際に体験したとこ〔ろ〕であるが、公私を不問のようであるが、会合の定刻には遅刻しない—と云う当然なことが、厳として守られている。モーターバイクの警官先導は、防衛のためではなく、市賓として公式の会合（歓迎会）へ出席するのに遅刻させたら、主催者の恥じ、と考へ予め配慮したことようである。

若し約束の時間到来したなら、人が集らうが、不在だらうが、さっさと定刻開会し進行する由。

遅刻者は赤面し、品格を疑われる—無言の罰程恐いものはない。

日本は主客や、地位の高い者程、故意に遅れることあり〔。〕

## ロッキーの山を越へて

### 四月二六日 火 快晴

シヤトルは、滞在も六日間、内外の人々から、本当に世話になり歓待を受けた。いろいろの意味で、この旅行で最も印象の深いところとなるであらう。昨日は本当に寂しかった。

疲れているので、よく寝れた。ゴーゴーと云う音に眼が覚めた。明るい朝だ。カーテンの透間から陽光が差入る。復〔複〕線で、たまにすれ違う音がする。アメリカの汽車は広軌で大型。それに食堂、理髪店、読書室、喫煙室、洗面所、トイレ等が、完備して居り、長い旅行も退屈しない様に、広々と余祐〔裕〕がある。

ボーイは黒人であるが、温順で親切のようだ。後部の展望車へ行く。山間部のためか、単線である。ロッキー山脈へ段々入って行く。退り行く、ワシントン州の森林やゆるやかな山の線、牧場が窓越しに見へる。

汽車は坂をどんどん登って行く。写真に風景を収める。

小部落が見へ、広漠たる大草原の中を走って行く。

有名な、ロッキー山脈も今夜寝っている内に越へるだらう。

河に沿って、曲り曲って進行している。ロッキー山脈の一部の山であらう、頂上には真白い雪があり、自然林の様だ。枯れた材木が到るところに転がっている。

米国では汽車旅行は贅沢〔ルビ：ゼイタク〕の部に入るそおで、どの箱も、ばらばらだ。一〇輻編成で全部寝台車。又停車時間が短かく、客がホームに居ないと直ぐ発車する。プラット・ホームと云った特設なものもない。車中の食事は自弁で、高価で痛い。夕食は、邦価で四円五〇銭になる。黒人ボーイは掃除から靴の手入れまで、われわれが寝ている間にやってくれる。荷物（試合用具全部と個人物）が山の様にあるので、さながらサーカス団の旅のようだ。汽車の一日が終り夜るになった。真暗な山中を心地よい、スピードで東部へ向って走っている。

#### 四月二七日 水 晴

八時頃目が覚めた。寝台の窓から外を見ると、昨日とは異り大きな樹木、林と云うものは稀にしか見られない。

広漠たる原野を東へ向って急行している。途中から電車になったようだ。牧場のサクが見へ牧舎がポツと二、三軒見へた。木の電柱が広野に続いていた。

精神的にも疲労したのか、仲善しのわれわれも、一寸したことから口論になった。俺は、中島、国友君（何れも上級生）が嫌味を云ったので、ムツとして“文句があるなら外へ出る”と無意識に怒声〔ママ〕ったら、傍らに居た久保田部長が、“外に出る”は傑作だ。〔ママ〕と云って大口をあいて笑ったので、われわれも吹き出し笑をして、ケリ。急行車の中で外へ出るはないよね。気分も悪いので、早くベッドイン。一二時頃、セントポールと云う声で、窓越しに外を見る。田舎の市の様だった。

#### 四月二八日 木 晴

黒人のボーイが起しに来た。眼が痛んで嫌な気分だ。

九時三〇分、シカゴのユニオンステーションに着いた。

ミルウォーキーは夜中に過ぎたようだ。疲れているけれど、一同は元気でホーム（平地）を歩いた。薄暗い大きな石造りの駅舎、広場に果実を売っていたことが、シカゴ駅の印象。ポールラッシュ先生が、ニコニコしな〔が〕ら出迎へて下さった。先生のお力で、此処でも、シャトルと同様の歓迎を受けた。大型バスに乗り、二台の警官乗用のオートバイ先導で、約二〇分程走って市中心部の四〇階級の高層ビル街を通り、ミシガン湖を左に見ながら、「ホテル」・「イージウォータービーチ」と云う、日本には見当たらない立派なホテルに着いた。一日料金一〇〇円の由（勿論有力者の好意多大）〔。〕湖畔の静かな、豪華な建物。同室は仲良し投手の辻さん。

今日は見学日。昼食はレストランで済せ、待望の本場のプロ野球を観るべく、シカゴカブス球場へ行く。CubsとSt.Louis〔ママ〕のゲームとのこと。プレーは日本人のやることとは段違い。速い、大きい連続。この試合を観て「自分の野球が如何に下手くそか」を知らされた。自分では日本国内屈指としていたが、ほとほと嫌になった。4 vs 2カブス勝ち。観客は男女が半々、それは男性が女性の分まで料

金を払うことが、常識であり、男子一人はやばで冷笑される由。

ネオンサインの夜景は美事だ〔。〕見物したいが、流石に犯罪の都だから止める。薄黒い高い建物のある街と云う印象が強い。市中の川に架る橋が真中から、二ツに割れて船が通過するのを見た。夕食は、日本キリスト青年会の招きで、すき焼き会〔。〕思いもよらない馳走で沢山頂戴した。シャトルの様な賑やかさは無い。室内の大型バスに入り、一〇時頃就床。

尚プロ野球では、昨秋来日した、米職業野球団の二塁手のフリッシュ選手（カブス）のプレーも見れた。

#### 四月二九日 金 曇、雨

八時起床。超一流ホテルはマナーが、厳しい。

二、三日前から体調が良くない。昨夜アスピリンを服用したので、夜半発汗、パジャマを着替へる。異国で病気になること程寂しいことはない。長いと一行から脱落し滞在することになる。注意して事故にならない様努める外ない。少々痛むが、ポールラッシュ先生に頑張るよう励まされ、土地の有力者による、朝餐接待会へ出席する。ホテルの大食堂は気分がいい。言葉が通じれば、もっと愉しいだらうが、部長が応待し、要点を話してくれる。米人で、金持ちで親切な人は、とても日本人の比ではなく、スマートで大型だ。

今日は、シカゴ大学と三時頃試合するが、それまで見学。高級自家用車を借り受け、シカゴの有名街、特に木の芽の青くなりかけたミシガン湖畔の大通りを徐行して走る（勿論オープンカー）とき、煙って見通しの悪い湖上の風景も一入趣きがあり、遊覧船が、何隻か動いて居た。中心街には、煉瓦や石材の見上げるような何拾階と云うビルが林立している。街中は古い市のせい、峡〔マ〕いようだ。工業都市だけに感じが騒々しく、大阪のような感じ。世界一殺人罪の多いことでも有名な、大シカゴ市は、昼中でも、何にかが待ちうけている様にさへ思へ、薄気味悪い市だった。

次は、この世の地獄とも云へる有名な、ストックヤード（ト殺場）を見学するが、この事務所の食堂で、肉のご馳走に預る、皮肉なことよ。場内の見学場所で、ト殺の有様を見せられた。檻の外にト殺される沢山の豚が居る。逃げようとするものも、追込れたが最後、後足を鎖でしばられる。大きな円形の板が動くので、しばられた豚は、順次吊るされて前進、そこに小刀を持った黒人によって首部を一突に切り烈〔裂〕かれ、悲鳴を挙げるが数分で断命、これが、次から次と繰返される。全く地獄絵だ。われわれが出口へ来る頃は、白色の美味そおな肉となっていた。余りにも惨たる有様だった。日程の都合上、シカゴ大との試合は、雨中決行〔。〕5 vs 3 で負けた。日本へ帰ると云う邦人夫婦が観戦し、暫く話す。シカゴ大は好チーム。終って、彼等の部屋でシャワーを浴び、同大関係者と晚餐を共にした。型の如く、両校のエールや、校歌斉唱、交歓し記念品を交換し握手して別れた。雨降るシカゴの街を約一時間（この場合は大型バス）ドライブして、ユニオン駅へ着く。まだ発車まで時間があるので、駅附近を一同で散歩した。雨は強く降っていた。一一時四〇分発にて次の市、アゼンス オハイオへ向う。

#### オハイオ市へ入る

#### 四月三〇日 土 霧雨の日

遠征疲れと、ありがたいことながら連日の歓迎攻めとで、皆んな死んだように動く力もなく、寝ている。六時半、黒ちゃんボーイに揺り起され乗替へるので、大急ぎで支度し下車して、駅前の食堂で朝

食。顔も洗はない有様、全たく旅巡りのサーカス団である。

約二時間揺られて、一一時、アゼンス オハイオ (Azenh Ohio) へ着く。この汽車もピュールマンカー (一等級寝台) [。] 霧雨が降っていて嬉しかった。今日は休養したいもの。駅頭には、ジョージ マーシャル夫妻の親族らしい人々が出迎へていて、男女と云はず抱き合い、キスを交して喜び合っていた。夫人はここで、われわれと別れる (帰郷である) [。]

ホテルアゼンスで旅装を解く。午睡する。静かな人口約数万位の静かな学都である。オハイオ州の首都で、この大学は、米国内でも一流校と聞く。夕食後、街へ出て散歩し、少々買物をする。ラッキーストライクと云う煙草二個を二〇セント (約七〇銭) で買う。マーシャル先生の家族の案内で、市内目抜き通りをドライブし、ホテルへ帰り、日記を書いて少々早い、九時就床。

#### 五月一日 日 晴

ここまでの遠征中、二度目の粗末なホテルだ。

自費ならこの辺が、上々だらう。オハイオは州 [庁] 所在地で、有名な、オハイオ大学があるから繁栄して居るようだ。

仲良し、マーシャル先生の母校だ。午後五時から、オハイオ大の学生のサービスを受ける予定。今夜は、彼等の寮で、合宿することになっている。山城君と二人だ。今日、[マ] こそは白人の世界へほり出される。英語は不十分でも、われわれには、日本語と云う、立派な国語がある。当って砕けろ…式で乗り込んだ。度胸を握へて、手振りも交へユーモラスに話したら案外意思は通じる。俺も、いざとなれば、何んとかないと若干の自信を得た。食事中、俺はサラダ類が好きだから大皿から取って食べたなら、向い側の寮長格の学生が、ユーラケト…と云った。俺は突差に You Laik [マ] it と判断、オーシェアーと云ったら、彼は大きな手を突出して、ニコニコしながら握手を求めてきた。席上には約一六人いたが、大笑いとなり、和やかな、日米学生の飾らない夜辺だった。

約三時間半、片苦しい [マ] 思いをした。一〇時就寝 [。]

#### 五月二日 月 晴

八時起床。学生寮だが、昨夜は死んだように寝れた。明るい気持の良い朝だ。附近のレストランで朝食。トースト、ミルク、ハムの軽食とする。五〇セント (約一円二五銭) 払った。

近くなので、歩いてO大学へ行く。モミの木が繁っているし、草花も美しい。立教ものびのびした大学色だが、米国の今まで訪問した大学は、皆好感の持てる、明るい雰囲気学校だった。正服正帽 [マ] と云う、堅苦しい定りはないようだ。ジンパー姿も居れば [ば]、ジャケット、ワイシャツもいるし、本を無造作に小脇にかかへ、女学生も極めて軽装だ。

午後二時から親善試合をやるが、2Avs 1で負けた。

試合は負けたが、好印象を残したことは、確かである。

ここも坂の多い街。午後五時の汽車に乗る。マーシャル先生及関係者の見送りを受けて、オハイオの地を後に次の目的地、デトロイトに向う。途中コロンバスで下車し発車 (乗替時) まで時間があるので、市内を見物し、時間つぶしに活動写真を見る。英語で解らなかった。

一一時汽車に乗り、寝台へもぐる。荷物は、車内へ運んであり安心した。

## デトロイト市へ入る

五月三日 火 晴

六時半、黒人ボーイが起しに来た。寝る時間の少ないことが、この旅行で、一番辛いことだ。車窓から見ると汽車は市街地を走っている。七時半頃、高くて長い美しい橋が見へた。

デトロイト河に架る橋とのこと。八時デトロイト駅に着く。ポールラッシュ先生（立大教授で、今回の米国内のスケジュールは、常に先行して、各地の休〔体〕制をつくられる）が、例の丸い顔をニコニコさせてわれわれを出迎へ、力付けて下さる。駅前から、この度も例のモーターカップの警官三台に先導されて、目抜き通りの大きな美しいホテル、ブックキャデラックと云う九階建の前に停る。

九一二Bが、俺と木庭君に与へられた部屋。階下の大食堂で朝食。終わった頃不覚にも列車内（寝台の下）に\$入れを忘れたことに気付く。瞬間実に驚き寂しかった。無ければ、文なしだもの。後のドライブも趣き半減、いや感じなかった。

四六階のビルデングへ初めて登る。実に高い。市庁を訪問し市長に面会し答礼したら、「良く当市へ来られた。充分目的をとげられるように」大要このような挨拶の由。（後で部長が説明した）

河は、東京の墨田川に似ている。約二時間警官先導で、ドライブをして、自動車王として有名な、ヘンリー・フォード社訪問〔。〕

工場内は、ベルトシステムで、次々と組立られ、次の工程では、仕上がった車が、その場から試運転場へ移行して行った。一時間に七〇台とか。敷地内を自動車一周するに二時間を要するとのこと。飛行場もあれば、運河引込の港まであり、この港から遠方販売は積出す由。発明王トーマス・エジソンとフォード氏は親交あり、苦心研究した部屋から、古い珍しい発明品を見学して、フォード記念館で昼食。従業員九万人とは。夜は当市の教会関係者の歓迎会へ出席した。盛會裡に一〇時閉会した。

この間ニュースで、満州に於て、例の白川〔義則〕大将以下のことから、米租界へ入った日本兵のことで、又々ゴタゴタしている、ことを耳にする。久保田部長はわれわれに要点を説明して、お互に自重することを誓い合う。

外から視る、日本は軍国主義の国だ、と云うことが、よくよく解る。小さい領土で、地下資源は無いに等しい。国際競争を伍格〔互角〕に持って行くには、満州の広野を自由にしたい。蒋介石將軍は、意に従はないどころか反抗する。そこで兵力を用いると云うことになる。近く大戦になるか、嫌だと思う。

五月四日 水

一行は、身心共に疲労していて、話をするのも、動くのも大儀である。口数が少なくなる。八時頃目が覚めた。九階の窓からデトロイトの朝を見る。街はラッシュアワーである。人も電車も自動車も実に忙しそうに動いている。朝食に若干遅刻したが、急いで食べた。スープ等は引き上げた後で、パンと肉、サラダ等で済ませた。本物のバターは美味、東京でも金を出せば勿論あるさ。

九時半荷物をまとめて、迎への自動車で、ブックキャデラック・ホテルを出る。実に立派な宮殿の様なホテル。デトロイトでも大変な歓迎で、外出には必ず警官先導で、警笛を鳴らして五〇キロ位のスピードで走り、通行車は左右に避けて停止させられる（非常時の車則の由）〔。〕偉くなった様な錯覚も起る。

錢布は、列車のボーイから預っている旨の連絡があり、ホット〔と〕した。駅へ立寄り、マーシャル

先生と同道し若干の礼金を渡し、俺は謝意を込めて握手を求めた。ペーリーペーリー、サンキューと云ったら、白い歯をのぞかせて、ニコニコしてくれた。

その正直さに深く感銘した。

そこから、約三〇哩先のミシガン市 (Michigan [マ]) まで、ドライブする。途中の街まで、警官に送って貰う。

別れる時寂しく思った。気分のいい警官達で、お互に手を振って挨拶に代へた。彼等は元来た道をデトロイトへ向って走って行った。道路が広いので、六〇キロ位のスピードが通常の様だ。

### ミシガン大学でのこと

一一時半頃ミシガン大学前に着いた。ここにも、大きな体育館がある。これだから、スポーツが普及し、強化される訳だ。立教に小型のジムネジウムがあるが比べものにならない。

今日は、ミシガン大学の学生寮へ三浦氏と分宿する予定。朗らかなアメリカ大学生と日本大学生が列〔並〕んで昼食したが、初めの中は調子が出ず、堅苦しい雰囲気だった。オハイオの寮の調子で、ベースボールの話からやる。そして東京の話をしたら自動車 (カー) があるか、どの位あるかと質問されたから“アバウト、三ミリオン”と答へたら Oh と云って、驚いた表情。

午後三時から唯一の強敵ミシガン大学と対戦したが、このゲームも残念ながら 7 vs 4 で負けた。

観衆は、東部へ来ると邦人が少ないから、余り期待出来ない。久保田部長ご機嫌悪し。夜は、チャーチ倶楽部の招待会あり出席する。終って、街の活動館へ行って見る。画面が高いところにあり、観やすかった。

### 五月五日 木 晴、夜雨

今朝は、早目に目が覚めた。昨夜は学生のクラブハウスに宿泊〔、〕お世話になる。学生の生活は、何この国も同様で、夜は深更まで歌い、しゃべって騒ぐ。朝も大声で騒ぐ。朝食の時間を知らせる、チリンチリンの振りリンが鳴った。荷物をまとめて、階下へ行く。一〇人程の学生と食卓に着く。上級生が上席に着し、一礼し合って食事。牛乳が大きなビンに何本もあり、水でも飲むように杯を重ねる。パン三枚に目玉焼きと云う軽食だ。食事中、面白い話題に終始し終った。この国にも長上〔マ〕の序と云う礼儀のあることを見た。ノート等へサインを交換し、迎への自動車で、集合所へ行く。約四〇哩先にある、ヒルスデールと云う市へ行き、そこのカレッジと対戦、又、4 vs 1 で負けた。

一人素晴らしい選手がいて、こやつにホームランを打たれて、失点二、投手でうまかった。卒業後は職業団へ入団するとか。

晩餐は男女学生と一緒に食事をして、六時頃来た長い道をドライブして、アンナーバー市へ帰り、ホテルで泊る。

日本では、今日、男の節句、五月五日を祝す家が、多いだらう。

望郷の念にふけりながら寝る。

### 五月六日 金 晴 夜雨

アンナーバーはミシガン大学の街である。

道中も広く両側に青葉の樹木が並び、美しい風景である。若さに溢る男女学生が、腕組みしながら闊歩して、楽しそである。日本でやったら、新聞沙汰だ。今日久し振りに五時までは自由な時間である。ホテル附近を散歩した。

理髪するに料金がなくて驚く。日本の三分一程度の仕事なのに。

一〇セントストアへ行く。少々買物をしたが、金が少なくなり寂しい。上手に使うより致し方なし。若い学生に誘われて、この街の年中行事と云う、川を距てての学生達の綱引を見に行く。余り興味はない。暑いには閉口した。汗が歩いていて出るのは初めて。もう初夏の陽気だ。

アメリカ各地に野外音楽堂（ドーム型の半円形で、ラッパが、こちらを向いている）があり、夕刻から市民が集まり、腕自慢の歌曲を奏るそおだ。夏虫の蚊やブヨ、アブ類がいないからいい施設だと思ふ。防虫駆除に力を入れている由。日本はこの点おけているし、考へ方が違うようだ。

タンポポは黄〔色〕く、雀はチュウチュウ鳴く。夜になって、夕立が降り、涼しい快よい夜になった。夕食は、ミシガン大学に留学している男女学生の招待会。サンドイッチとハム、牛乳、飲物（紅茶、コーヒー）〔、〕フルーツ等で、結構腹一ぱいになった。来年卒業する男性が一番年長、東京、福岡、千葉、三重等の人だった。渡米して暫くは生活様式が異なり、言語も不自由で、嫌になって帰国しようと思ったことも度々あったとか。表向きは平常だが、ジャップ（日本馬鹿）と云う、ことばも聞くことがある由。気心の解る良い友達が出来ると、半年以上かかる由。皆さん、やっと落ち着いて勉強に力が入るようになった。〔マ〕と云っていた。親からの仕送りだけでやっている者は、二、三人で皿洗いや、運送店の手伝い、邦人店の手伝い等で、費用を稼いでいる者が主の様だ。専科は、文系が主のようだ。

今日の外出の案内は、三上と云う学生にお世話になった。東京市ヶ谷の人。国の話しを知りたがる、〔マ〕ことは何処の人々も同じで、新聞、ニュース等で知る限り、日米関係は不穏で、心配だ、とも云った。別れるに当たり、大声を張り上げて、君が代を唱い、万歳をした。雨も強くなり、雷が鳴った。

ホテルへ帰り、俺は、便り二、日誌を書く。一〇時就床。

## 【ミシガン大学での良風 五月六日】

### 一、長上〔マ〕の序（一）

渡米中、ホテル生活を離れて、日米学生が、寮で一夜を過ごすことに意義あり、とのことで、ミシガン大学でのこと。

試合が終って、学生寮（日本のより大きく設備も整い、立派なもの）へ案内された。二人一組になって、明日の集合時まで、彼等米学生の中で寝食を共にする訳だ。

言葉は不自由で、難儀もしたが、日本語も立派なことば、当っていただけろ、式に、“あなたは日本語を話せるか”と下手な英語やったら、ニコニコしながら“ノー”〔。〕ジェスチャーを交へ英単語を加へて、夕食会と食後の懇親は終り、二階の部屋で一夜を過した。

朝食のテーブル〔マ〕の時のことである。自由主義の国の若い学生だから、勝手に始めてもよさそおに思へたが、寮長格の（堂々たる人）人が着席し、一言朝のお祈りをするまで、誰れ一人として勝手な言動をしなかった。

このなんでもない行為が、とても爽やかで、明るく、本当にいいナターと感じた。別に規則的ではないようだ。

五月七日 土 晴

今朝は、気分も良く、ベットのの上に跳び起きた。

今日、この夏日本を訪れる、四大州から集まる、聖公会の総会がある由。朝ポール先生に引率されて、教会へ行く。この方々と記念撮影をし、一堂に会して昼食した。

暑いには閉口。洋服が一着きりで、冬物だから暑くてやりきれない。服装を乱す訳にいかないし、上等の服だ。どこで買ったと聞かれること各地。日本でこんな上物が、出来るか、と驚く人もいた。ホテルで荷物をまとめて、迎への大型バスで、二〇哩程先へ、キャンプに行く。田舎道を相当走って、若草、樹木もある小川の丘へ来た。

二軒の屋根から煙が上っている。白人も黒人も、われわれも加って、インドアベースをやる。日本三角ベースのようなもの。俺は応援に廻る。夕刻、小屋で野営の馳走である。サンドイッチにいろいろの取り合せ物。牛乳は、どこへ行っても実に豊富だ、ガブガブ飲む。日が沈んだ頃を見計り草原に集り、タキ火を中心に、歌ったり、踊ったりして大いに楽しみ、旅の疲れを医〔マ〕すことが出来て、本当によかった。

とても爽やかな気分になり、名残りを惜しんで、アンナーバーの地を退る。九時アンナーバーを發して、一〇時半頃再びデトロイト駅へ着いた。ナイヤガラ瀑布を見に、一時カナダ領へ入るので、パスポートを調べられた。ピュールマンカー（寝台車）へ乗り、指定の寝台にもぐる。暑くて容易に寝附かれない。

その中に汽車の動いて居ることに気付いたら、午前一時半だった〔。〕

デトロイトを發して、バッファロー市へ向う、夜汽車の中。

ナイヤガラ瀑布を訪ねて

五月八日 日 雨天

六時目が覚めたら、汽車の中だ。ガウーガウーと凄い勢で、走っている。大急ぎで支度する。カーテンを上げた時丁度鉄橋の上を通っていた。河中広く、とても高い。河上の方（左側）に水煙が見へ、瀧のようなものが見へた。アッ、ナイヤガラだなと直感して叫んだ。そばの仲間も窓越しにじっと見ていた。

八時、バッファロー駅に着いた。ここでは誰れの出迎へもない。われわれだけの行動である。アメリカへ来て、初めて自由な自分達だった。自動車で、ホテル・ステートラーと云う大きな建物の前へ停る。九階の九四〇号が、俺と内田の部屋。同じ一等でも、シカゴやデトロイドとは幾らか格落ちだ。学生の俺達としては、分不相応である。

朝から不安だった天気は、午後になって雨降りとなる。生憎、ナイヤガラ見物に行く頃は、大雨となる。

暫く待って、二時四三分の普通車で行く。四五分程して、ナイヤガラ駅に着く。雨も小降りとなり自動車で約一〇分、ナイヤガラの岸へ出た。下方に先程渡った鉄橋が見へ、河中は一番広いところで二〇〇米あるとのこと。河水は薄黄色をしていた。対岸はカナダ領である。瀑布のところまで歩いて行くが、ガウーガウーと地響きを立てて、モウモウと水煙を上げて、一八〇呎の高さから落下する、ナイヤガラ瀑布を見た時、俺の想像より遙かに壮大で、目を見張った。



アメリカ滝とカナダ滝を向う岸へ行って、正面から見たときは、その雄大で厳然たることに、実に驚いた。

滝ツボの近くまで、小型の遊覧船が行くのを上から見た。アメリカ滝への広場（自動車置場）のところにインディアンの商人が、土産物を売っていた。話し声は一切聞へない。滝ツボの岸のサクに寄り、倦ることなく、見ていた。夕方七時頃、バッファロー市のホテルへ帰る。

夕食は食堂で手軽く済ませ、九時就床〔。〕

#### 五月九日 月 晴

よく寝れて気分よし。食堂で軽く朝食を済ます。

このホテルは一日二〇\$とのことだ。普通の日本人なら泊らない。

雨のナイアガラ見物も印象的である。橋一ツ距れば、対岸は英領カナダである。橋の反対側に、米、加の検問所があり、国旗が掲揚し厳重なる検査を誰れでも受ける。相互国境を越へて交流しているが、米国は禁酒（表向き）の国だから、カナダより持込む酒類は特に厳しい由。裏道もあると聞く。ホテルから大型バスで約二〇分程走って、ボストン行きの駅に着く。

俺は特に、大きな荷物を左右にさげて歩くので、黒人の赤帽の奴、笑っていた。俺に頼めばいいのにと云うことだらう。

五時間程汽車に乗り、乗替へる。この列車（普通）は乗客も多く今までに一番賑やかだった。東洋の妙な連中と思っていたであらう。時折り駅のホームで見かける、特に若人の別れの情熱的な接吻には、見せられる俺達が恥しい位だ。

白樺の林が沢山あった。日が沈んで美しい昏黄〔マ〕である。この汽車の停った所が、この旅行の一番遠い地点で、そこからは、一歩一歩日本へ近づくのである。

ウェストフィルズから電車で大型バスで、二時間半程して、ニューヘブンへ来た。この大型バスの運転手さんは、なんと妙齢の女性で、背高も俺位あり、皮手袋にジーンパーサングラスと云う堂々たる出立〔ルビ：イデタチ〕だった。年は二五、六かな。

ホテルへ着き、一一時就床。

#### ニューヘブン

#### ニューヨークの灯

#### 五月一〇日 火 晴

ニューヘブン市（New haven〔マ〕）へ昨夜着いた。

今日は、自由な自分の時間なので、朝飯を抜いて寝っていた。

マーシャル先生（俺とは大の仲良し、日本語は俺が教へる、彼は英語）が起しに来た。先生は奥さんをオハイオに置いて、われわれと行動を終始一致である。Y clubと云うエール大学々生の食堂で昼食。ミルクやパン野菜肉類が豊富で、セルフサービスだから、欲しいだけ盛り込んで来た。美味しいから沢山食べた。三時半から、米国の大学随一の強チームである〔。〕学問でも東大以上と有名な、エール大学と試合をする。

この大学の野球場は、スタンドもコンクリート造りで、立派でありダックアウト（選手席）も上々、今までで格段の違いの立派さだ。

アメリカの大学では、アメリカンフット、ボールの選手で、学業も優秀な人が、一番人気があるとのこと。日本とは反対である。

この日の俺は休業で、コーチに出て騒ぐ。小笠原君が捕手をやり投手菊谷。陽気が少々寒いので、ベンチでは毛布を使う。

菊谷が良く頑張り8 vs 4 で大勝した。大学最強チームに大勝したことが、ニューヨーク、タイムズのスポーツ欄で報道されたので、ニューヨーク入しては、大変な評判だった。(後記)

試合後、学生寮でシャワーを浴び、夕食をエール大の選手三〇人程と共にし、校歌やエールを交換し、当校からは持参の桜模様入りのハッピーとベナントを送り、エール大からは、大きなベナントが贈られた。ニューヘブーンに左様ならをして、途中のスプリングフィールド(分岐点で、ニューヨークへの駅)から普通車で、二時間程して、憧れの灯の都である、ニューヨークの中央駅へ着いた。地下鉄駅だから薄暗い。タクシーで五分、ニューヨークの中央、ブロードウェイ横の三四番街にある、ホテル、マックアルピンと云う大きな構への正門へ着いた。

もう、こおした大型立派なホテルに泊ることも、しばしばであり、特に珍しいとか、気おくれはしなくなった。いかにして有効的に利用するか、である。勿論、米人有力者の好意によるものである。一八階の九四号が、俺と木庭君の部屋。窓からは高い建物が、林立していて、屋上まで見渡せるものは、少ない。夜だからかも知れないが、外は薄ぼんやりして居て、灯と騒音が、気になるだけで、余りに大きな夜景ではある。魔天楼が、林立している。疲れてはいるが、寝るには如何にも惜しい。元気を出し頑張ることにし、一同で、一〇時有名な地下鉄で、燈の街、美化の街、ブロードウェイの夜景を見物に行く。

銀座には、落ち着きと静かな趣の街の味がある。然しスケールが違い過ぎる。こちらは動的な魅力がある。道路の中央は、車道で、上下の車が溢れていた。両側の人道には、美しく着飾った人々が往来していた。大きな店舗は夜は閉めてあったが、ウインドは美しく飾られていた。MX Y と云う有名な活動館(シヤター)の前を通る。煙草二個(チェスターフィールド)買う。東京亭と云う日本人経営の食堂で、うな丼を食べたが、純日本式で実に美味だった。

ニューヨークで、こおした物が食べられるとは、思はなかつた。

アメリカにも、ごろつきは多い。酔漢に逢って道をゆずりすり抜けた。午前一時半ホテルへ帰るも、ニューヨークの午前一時、はまだ宵の内で、どこも賑やかだ。

社交会帰りの婦人らしい女が、ホテルにも路上にも見かけた。

あの高いことで余りにも名高い、エムバイヤーステート、ビルが、ホテルの窓からすぐそこに見へるが、五〇階まで数へるのに相当時間が、かかった。一〇三階とは、流石は、アメリカ。ニューヨークである。

午前二時半、入浴して床に入る。

#### 五月一日 水 晴

八時半頃起床。カーテンを開くと、朝のニューヨークが、活力に溢れた、ゴーゴーと表現したい音響の中で、動いている。幾拾階と云う高層ビルが、林立している巨大都市だ。

ここでは試合はない。約三日間を見物等に過すプランだ。

朝食を階下のホールで済ませ、その足で木庭君(ブロークンだが英語を幾分かこなす)と有名な、メツ

シと云う百貨店へ行く。

日本のデパート、例へば三越等とは趣が異なる。陣〔陳〕列が、実にあっさりして買いやすい感じ。目移りしないで自由に選択出来るように仕向けている。学びたいところ。流行の女物が沢山飾ってあった。

一時揃って、前市長スミスさん（次期民主党大統領候補、小柄な温顔の老紳士）の客として、名高い、エンパイヤーステート、ビル（一九三一年完成）へ上る。ホテルの直ぐ近くで歩いて行く。

美しい白系大理石の実に巨大な建築物で、最初八六階まで、（ここまでは大型で収容人員約三〇人）エレベーターで行き、乗替へる。ここから中型になって一五人収容で、一五階を上り、後二階程徒歩して屋上へ出る。一〇三階の空中に立つことになる。屋上の広さは、ざっと二〇〇畳位。一口に一〇三階と云っても、エレベーターで上昇中、途中で気圧のため耳が、ガンと一時的になり少々痛い。又、八六階までの、各階エレベーターの単位は、一〇階で、瞬〔ルビ：マタタ〕く間に上る。実に速い。急行と並とあり、八基が平列〔マ〕していた。

二度目の乗替への広場で、スミスさんを中心に、パラマウント（有名な映画社）のトーキー画撮影。地上を見ると、人も自動車も、一点で、ゴマ粒より小さく見へた。五〇階、七〇階は眼下。上る時の急行を計時したら、約三分で、乗替階まで行った。

普通利用する人は、一\$（一ドル、二円三二銭位）払う由。建造物では、勿論最高であり、人力の偉大さに敬意を表したい。

昼食は、日本人経営の「東京亭」で、日本趣味。集った方々は、親日派の相当高い地位の人々とか。（商業会議所関係）すき焼で、久し振りに満足した。

#### 【球聖ベーブ・ルース、ルー・ゲーリック】

市中を往来する乗物は、大型バスであるが、市賓扱いであるから、ここでも警官先導。今日は、球聖ベーブ・ルースとルー・ゲーリック両選手に面会し、本場の真剣なプロの試合を観戦する楽しみが多い一日である。ヤンキース（ニューヨーク、ヤンキース）球場へ行く。まだゲーム前で、われわれが、ボール先生に引率されて球場内へ出た時、あの偉大な球人、ベーブ・ルースが、ベンチからヒョッコリ顔を出し、こつちへ歩るいて来て、大きな堅い手で、How do you do（ご機嫌如何ですか）と云って、握手された。目の当りに見る、ルースは、眼玉の大きな、頑丈な大男で、顔色はコゲ茶、のしのしと歩るく。ルー・ゲーリック選手は昨秋来日し、立教と日本第一戦を神宮球場でやって、お馴染さん。ニコニコ顔で、黙っていた。ホームベースの所で、両球聖を中心に記念撮影した。このことは、一見なんでもないことの様であるが、恐らく、日本球人としては、最初であり、最後と思う。（両選手は、二年後夫々逝去された）

米大リーグの一流チーム、ヤンキース（ニューヨーク市）vs セントルイス（セントルイス市）の試合を、練習から観れて、本当によかった。

ルースは右翼を守り、一度三振した。ゲーリックは一塁を守り、ショートバウンドの球を、うまくすくい上げて好捕し、うまいナーと思った。

球場のレフト後方に、高架線の電車が動いていた。よく写真に出てくる場面だ。他のゲームは雨のため中止。

夜は、スポーツマン、シツプ主催（スポーツマン・シツプと云う団体は、各種スポーツ競技の中で、

日刊紙スポーツ記者が選出した、超一流の競技者による組織の由)の晩餐会が七時より、レストランであり出席。入口近くの欄干にゲーリックが腰掛けて、ニコニコしていた。この人はエール大出身と聞かすが、態度が堂々としていて、礼儀も正しく、内外多数のファンから愛される好人物。俺より五才位上か。宴席は、俺の前が、ゲーリックさん、隣の隣りが、ペーブ・ルースさん 偶然とは云へ、願ってもない席次だ。俺は素知らぬ顔で、注意深く両者の一挙手を見ていた。両者とも食物は余り食べない。(食事に気を付けて、体調保持とみた) ルースは二、三度附近の人と喋った。前のゲーリックが、俺に“You position [ママ]”と聞いたので、“catcher”と答へた。黙っているも能がないと思ひ、意を決して“what do you think japan”と云つたら“Oh！！ Very Nice”と、あの特徴ある笑顔で答へて来れた。サインをボールにして貰った。二人は一〇時頃帰っていった。この持廻りサイン会で思ったことは、ゲーリックがボールが先に廻って来たが、サインペンとボールを先ず前のルースに渡し、ルースが署名して、ゲーリックが書き次へ送った。日本の場合だと下級者が、平気で自己名を書く場面が多い。“長上 [ママ] の序”は米国にもあるを知った。この写真即ち、ルース。[ママ] 関口百瀬は俺は大切にアルバムに保存している。正に類のない傑作であり、俺の財産の一つとして、一段と貴重なものである。

来た時と同様、バス(帰りは警官先導なし)で、ホテルへ帰った。

渡米したときは、国内でも歌謡曲が流行して居り、北村定二君が歌っていた曲、“おお素晴らしの、ニューヨーク、空を圧するビルデング、街のかなでる、ジャズ バンド、エールやサブエー姦 [ルビ:カシマ] しく云々”が全く、ぴったりのニューヨークの印象であった。

今日は、本当に朝から楽しい一日であったと思う。

#### 【ニューヨークでのこと 五月一日】

長上 [ママ] の序 (二)

野球をやる者で、球聖ペーブ・ルースとルー・ゲーリックを知らない者はないだらう。尤も現代っ子は、別だが。

ニューヨークで、この偉大な球人二人と会食の席が接近している幸運に恵まれた。この目で見、息づかいが肌で感じられる近さ。職業人だから常に体調を考へ、馴れない食物は余りやらない。これは当然のこと。ボールを廻してサインを求め [た] ときのことである。

ボールと万年筆は、ゲーリックの方から廻って来た。ゲーリック選手は、前の席に居る、ルースに極く自然な動作で、二品を押しやってやった。ゲーリックは隣人(米人)と話しながら、署名して隣人に渡し、数人(有名なスポーツ人の会合)で終った。一見なんでもないことであるが、この二聖はどちらが先に署名しても、誰れも不思議に思う人もない力量の持主達である。

野球を職業とする社会だから、そんな廻りくどいことをしなくても、笑ったり、文句を云う者もいない筈 [。]

これは、ルー・ゲーリック選手(エール大学出の紳士)の人格を讀むべきであらう。

日本のプロ連中では、お先に失礼とも云はず、簡単にやってのけるだらう。時の馬鹿人気のある連中諸君よ見習い実行せよ、と苦言を呈して置く。

今日ここまで、日本プロ野球が発展したのは、幾多先人の労苦に因るところで、君達ではない。努力されよ。

## ブロードウェイの夜

五月一二日 木 雨天

ニューヨークでの第二の朝を迎えた。一八階の窓からは、高さを競うようなビルディングの群れだけで、あちこちのビルからは、煙が、細長い尾を引いて出ている。マンハッタン地区が中心で、ハドソン湾にそそぐ、大河二本で形ち造っているのが、この三角地帯のマンハッタンである。窓の右側対岸は、ブルックリン地区で、長大な橋で結ばれている。

橋脚のない、大吊り橋で、橋面と水面が中央部で、約一〇〇米あり、大きな汽船も航行していた。

雨天で、雨に煙っている、ニューヨークの景観も一入乙な趣きである。今日は一日ゆっくりと市中の見物や、土産等物色できて嬉しい。世界一と云っても過言でないと思う、メッシーデパートへ行く。この百貨店は、建物も有名であるが、売上高に於ても、又信用（配達は、客と約束した時間に必ず届ける美点）に於ても抜群の由。内部は五／一一日見物記の通り。

ブロードウェイをブラつく。青柳さんの店（諸雑貨）で若干買物をした。東京亭で軽く昼食。一\$五〇C払う。

久保田部長と、又、ブロードウェイへ来た。広い道路の三又地点に、ニューヨーク・タイムズ社（世界屈指の新聞社）の細長い八階建ての社舎があった。

一〇C（一〇銭）ストアへ入って、小物若干買った。

高架電車（エールと呼ぶ）が、頭上を走って行くし、どの街へ入っても、見上げる建物で、さながら深い谷間の感じ。午後は雨も上って、見物には絶好の日である。

ニューヨーク市は、確かに美しいところも多いが、高層ビルの林立で、立体的な、近代文化都市と云いたい。

総てが、世界第一位で文句の云う余地なし。明日は、この地ともお別れだ。将来又来る折は、万事が変わっているだらう。辻さんと雨のそぼ降る街を一〇分程歩いて、夕食に東京亭へ行く。案内してくれた席に、山城、菊谷、畑中君等が居て、思い出のため奮発して、一\$すき焼とした。

ブロードウェイを七町通りまで歩いた。夜景は、ネオンサイン、イルミネーションが美しい光りを放ち、音楽も聞へ、人々が右往、左往していた。タイムズの時計が、午後一〇時を指していた。これだから、ニューヨークの本当の姿なのだ。

一〇日には、午前一時過まで、遊歩した。本場のレビューの観るチャンスのないのが、残念。美女達が、半裸で、大胆なポーズで舞台狭しと飛び廻るぞおだ。

仲間の或る奴は、或る市で、そっと抜け出して、観に行った由。

一応ホテルへ帰る。入浴して気分爽やか。最後の夜のニューヨークを、倦くことなく眺めていた。

## 自由の女神を眺めて

### ワシントン市入り

五月一三日 金 快晴

ニューヨークでの三日目の朝が、明けた。晴天である。

昨夜は、最後の夜であり、充分名残りを惜んだ心算。この地での便り一〇通程と日誌のため、午前二時までかかった。寝る前シャワーを浴び、しみじみ旅趣を味わう。良く寝れたが、六時起床は辛かった。手

早く支度し、いま一度窓から、早朝のニューヨーク市街を見下す。対岸の街、ブルクリンと高架吊橋が遙かに見へた。文化的な巨大都市ではあるが、石材とコンクリートで固めた、固い感じの街、と云う印象だ。階下で日本の方々への便り、勿論自己宛のものもあるが、投函した。消印がニューヨークでありたい。

部の大荷物と共に大型バスで（この場合警官先導なし）ホテル前からジョージ市へ向う。途中高架電鉄の下や、ブロードウエーを横切って、日当りの悪い溪谷の様な街を通して、ハドソン河の岸へ来た。フェリーボートなので、自動車毎船に乗って向う岸へ渡る。船はニューヨークの建物を左に見て、あの、グレタガルボ（有名な米女優）が演じた「貨物船の女」で見た、港口の河を今俺は渡っているのだ。カメラを向ける。右手港口に、青色（銅製のためのロクシヨーカ）した、見上げるような大きな、あの、自由の女神の銅像を見て船は進行する。

人工島（約二、〇〇〇坪位か）が、湾（ハドソン河口）の入口附近にある。女神は、右手を高くさし上げて、平和を叫んでいる様な、厳やかな姿、目測二〇米以上の建造物。ニューヨーク港は活気があり、大船、小船が、白い煙を上げて往来していた。約三〇分程して対岸へ着いた。自動車のまま、駅のホームへ入った。汽車の窓から暫くの間は、自由の女神像も見へた。二度と来るチャンスもないであらう。心残り、あのワシントン橋（大吊鉄橋）を渡らなかつたことである。一〇時半ペンシルバニア市へ着いた。

下車して教会で昼食。牧師（米人）の妹さんが、われわれに親切なサービスをして下さる。こん度の米国旅行で、当初から、米国内での諸企画（市賓扱から、各種歓迎会、ホテル上級等々）と、いろいろ懇切にお世話下された。[マ] ポール・ラッシュ先生と、一〇月東京での再会を約し、ここでお別れした。汽車で二時間程して、首都ワシントン市へ四時着く。ここでも警官先導で通行した。

緑の生々とした樹木や芝生の美しい街を走って、ホワイトハウス横のアメリカ政府の心臓部である国務省へ行く。次官補の某氏に面接、表敬して退出。ホワイトハウス（米政府、大統領官舎）の前を通過して、無名戦死者の碑前に花輪を捧げた。

民間の然も学生の行動としては、いささか奇異かも知れない。小型の真白い将士の碑が、広い墓地に沢山列んでいた。

首都ワシントンは、静かな手入れの行届いた緑樹の多い、美しい都である。今までのどの市街より落ち着いたムードは、一番印象が良い。大使館訪問、部長が、来たことの挨拶をした。出淵〔勝次〕大使は夫妻と娘（確か節子と云い、後の父秩宮姫〔秩父宮妃。実際の秩父宮妃は松平節子〕）さんが、サンドイッチとコーヒの接待をして下さる。大使は、歓迎のことばの中で“諸君こんど来る時は、もっと学生らしいスケジュールを組むように云々”〔6〕これは正にお説教で気分は良くなかつた。思うに各都市での警官先導は、大公使といへども、今までになかつたことだから。（米政府は、政治家等の扱いには余り気配しないらしい、ご勝手に式）大使館を辞去。六時の汽車で、フィヤデルフィヤに向う。丁度日没で、静かな暮色が、新緑の美しい、ワシントンの街に漂っていた。米国で、当時汽車（上級車）旅行は贅沢とされていた。民営であり、各社競争で、車輛改善するため、料金が高くなる。われわれ旅行者は致し方ない。綺麗に整へられた食堂車で、黒人ボーイの運ぶ食事は、うまかつた。車窓から、夕景を見て時を過ごす。一〇時寝台へもぐる。

## フィラデルフィア市

五月一四日 土 晴

八時、目が覚めたら列車の中だ。昨夜は暑く寝苦しかった。

上級の寝台車で、中部へ向う。朝と昼食は車中。われわれ以外数人が、食事しているだけ、のんびりした情景であった。

午睡をし、三時半頃フィヤデルフィヤに着く。ここでも警官の先導で、直ぐ野球場へ行く。ゲームは六回目から観る。米職業野球の最後のゲームである。都合三回試合を観戦した。

ここには、昨秋来日した米職業野球団（立大と序戦やる）の主将で、名二塁手のフリッシュさんが、ベンチから僕等に合図していた。このゲームは勝って一緒に記念撮影をする。スタンドは、花が咲いたように、色とりどりの服装をした女の子達が盛んに応援していたが、前の球場と様子が違う。

今日はとても暑苦しい日で汗が流れ、カンカン帽（麦ワラ製の天井の平らなもの）を路上で沢山見受けた。もうすっかり初夏だ。薄物を着た半裸の様な姿の婦人が、大勢往来していた。日本では、思いもよらない情景、矢張りアメリカだナァーと思った。

ここでも、市内有力者の厚意で、高級車（クライスラー）で、市内の目ぼしい所を見物して廻る。市営公園は規模が大きく、手入れが行届いていた。夕方のドライブは又格別である。

世界一長大の河は、西部の山地を源として、ここセントルイスへ流入する、ミシシッピー河であり、先程鉄橋を渡った。時間があつたので、河岸まで行って見る。黄色の水がゆるやかに流れていた。大型船も上下航行していた。

社交倶楽部へ案内されて食事前、汗を流し落すためもあり、四階の室内プールで泳ぐ。皆んな愉快地単時間を遊ぶ。さっぱりし、お腹も空いて、沢山食べた。洋食にも馴れて上手になった。梶原氏の案内で、市内を自動車の中から見物した。この市には黒人が多いことに気付く。西部開拓時代の影響かと思う。

アメリカ中部の都市としては、余り活気もなく、人口も約四〇万位とのこと。街の家並も古く、四〇階以上と思へるビルが、ぼつぼつ見える。駅舎は古いが、大きい。この街には、これと云う名所も少ない様だし、日本人クラブも活発でないようだ。駅舎の中で雑談し時間をつぶす。夜一二時の寝台車（ビュールマン、カー）で、次の街、カンサスシテへ向う。

疲れているので、寝台へもぐり込む。

#### ミシシッピー河からカンサス・シテ

五月一日 日 晴

ごとと揺れる、寝台車では良く寝られない。七時起きた。

今日も途中下車する予定。八時半カンサスシテ市へ着く。映画西部劇で良く聞く名前の市だ。われわれの寝台車は、切り離して別のレールで乗るまで待っていてくれる。荷物を動かす必要がない。この市の教会関係者が出迎へてくれた。米国人は、朝は必ずと云っていい程、“よく寝れましたか”と聞く。西部では屈指の賑やかな市ようだ。ポールラッシュ先生が、一三日、われわれと別れ別行動されたので、後の米人との交渉はマーシャル先生が、担当されているようだ。

駅前が若草の丘で、西部らしい家が行列〔並〕んでいて、長閑だ。新緑の並木路を車で、教会へ行く。日曜日なので、朝の礼拝者も多かった。朝食を婦人達も加わり、明るい談笑裡に終る。発車までの時間を利用して、カンサスシテの街をドライブする。車があるから至極都合がいい。

昼食は、自弁一\$を奮発して、車中の食堂。四時間程汽車で、ドッジシテへ来た。西部の広大な草

原帯である。地平線に夕焼の陽が没してゆく。実に雄大である。今日も終る。寝台へ横になる。

## ニューメキシコの広野

### アリゾナの高原

五月一六日 月 快晴

平原の日没はおそく、午後七時でも日が暮れなかった。

又、昨夜仲間の口論、喧嘩があった。主将の関口さんと三浦氏、この人達は最上級生で、帰国すれば、既に就職先も決っている。入社延期の恩典で慰労旅行である。

口論の起りは、ささいなことから。先に車中で、俺もやったが、異国を大勢で長期の旅行をするとき、仲良しの仲間でありながら口論になる。一種の甘へから来る、ホームシックかな。考へて見ると、言葉（英話）が不自由で食生活も異なる。それに疲労も手伝うらしい。二人で口論しているので、俺は立教の優勝は、“人の和”で勝った。そして、米国へ来て、楽しい旅をしているのになんですか、止めて下さい。[マ]と云ってやった。暫くして忘れたように静かな車中となった

汽車は、心地良い音をたてて、西部へ向って走っている。広大な丘陵と草原を約二時間程走って、インデアン部落のある、小さな駅に停った。下車して、インデアン婦人と列〔並〕んで写真を所望したところ、“いやだ”のゼスチュアアでおこられ、逃げて行つた。観物的なことは、習慣上絶対やらない由。一五分程して、発車した。

今日で、ニューヨークを發して、三日目である。単調な汽車の旅に倦怠する。昼近い頃、速くに小松林と小山が見へ、砂丘に土で造つた四角な土人の家が点在していた。一二時半ころニューメキシコへ着く。黒人ボーイが持って来た新聞ニュースを部長が解説した。日本で犬養首相が、軍部の一部により暗殺された（五、一五事件）英字報道である。一行は黙禱した。昭和維新と称して一部の軍人が反乱したとのこと。嫌な気分、時が時だ、日支事變の真只中である。われわれに向けられる、米国民の感情が心配になる。事なきよう祈る。

ニューメキシコは西部中心地であり、交通の要衝。下車して市中へ行く予定はない。ホーム周辺で、一時間程の時間だ。なすこともなく、沿線の畠を見たら、土人の耕作したと思へる麦が一尺程に伸びていた。肥料不足か生長が悪い。

ニューメキシコを後にして、昏黄〔マ〕迫る頃、ウインスローへ着く。思いがけなく、同胞（一世と二世か）の婦女子、男、子供一〇人程が、汽車のところへ集り出迎へてくれたことは、本当に嬉しかった。日本語で話した。移民でやって来た、広島、山口の人々だった。われわれの旅寂を医〔マ〕すに充分であった。

二度とは見られぬ、西部のアメリカ高原を車窓から、なんとなく眺めていたら、附近が赤紅の岩肌の高原が見て来たので、オヤ、グランドキャニオンかも知れない。[マ]と思いつき、車窓にかじりついて外景を見た。溪谷に架る高い鉄橋を渡るとき、附近の景観が、あのグランドキャニオンの一部であると思ひ。[マ] 観れたことを幸と思う。俺が、大声で知らせたが趣味が違うか、感じ方が薄かった。晚餐の車中は最後と思ひ、気張っておごる。夕暗が、すぐそこに迫っている。アリゾナ高原に今日の名残をとどめて、真つ赤な丸い大きな太陽が、地平線へ没して行く、景観は大陸でしか見られないものだ。上り列車とすれ違った。



黒人ボーイが寝台の用意をしている。大柄で、温順な、このボーイさん（写真を撮ってある）とも、明日は、お別れだ。人種は異なるが、いい人で、色々世話になった。

外は暗で、何にも見へない。明日は、ロサンゼルスだ。この汽車が停れば、アメリカ大陸を、西北（シヤトル）からニューヨークの東部横断と、東部から西部のロスへの横断と、二度やったことになる。寝いので、インベッドとする。

## ロサンゼルス入り

五月一七日 火 快晴

七時目覚めたら、車中である。ニューヨークを發つて、四日目の朝だ。汽車は今朝も大平原や丘陵地帯、あの西部劇の場面に出てくる、地方を通り、亜熱帯地特有のソテツや見知らぬ樹木も見へ、時折七～八百メートル級の山も見へた。

実に長い汽車の旅で、倦いた。長かったアメリカ大陸二度目の横断も、この列車が停れば、終ることになる。

ロスが近くなったのか、住家の型が変わって文化的である。

九時半頃から車窓に見へるものは、一面オレンジ園で、次第に畠園も大きく、果しなく続いている。そして、うまさうに黄色く熟した、オレンジが、青い葉の中に鈴なりにになっている。ここが、有名なオレンジの産地、サンキストの町を通過して、市街地に入って来た。好人物の黒人、ボーイが、“ロサンゼルス”と告げた。遂に来たか。[マ]と思う。米大陸を往復横断して、思うことは、アメリカ、それは広大だナァである。

セントルイスから親切に車中の世話をしてくれた、ボーイさんにわれわれ一同は感謝し、心からグッドバイをした。ホームで、記念の撮影をして、握手して別れた。駅頭には、邦人が、大勢で出迎へてくれた。ロスには、日本人が何万と居る由。

ここでも警官先導で、市庁訪問。市長より「ラッキーのキー」を関口主将〔が〕授受した。一つの市賓に対する儀式で、立派な木製の錠で受けて返すだけ。市の正式客に促す儀礼の由。

旅装を都ホテル（邦人経営）に解く。本当にホッとした。嬉しいことに、邦人が多く、シヤトルのような和やかさだ。日本風呂に入って、さっぱりし長途の疲れが医〔マ〕へた。流石の、ピュールマンカー（一等寝台）でも、四日間には、きたなくなった。支度して、夕食前、当市で最も美しい街で、富豪連の住宅地をドライブする。シュロ樹の大きな並木に夕日が映えて美しかった。聖公会の教会へ行き、日米国旗で飾られた会場で晚餐。盛会であった。

そこを辞して、ロス日本人会主催の歓迎会へ出席した。

明治の中期から移民し、幾多辛酸をなめ苦労した邦人であらうが、成功した者は、多くはないであらう。今晚ここへ集まれた、人々は首尾よく成功された方々であらう。

広島や九州地の人が多く、国の様子を話せと云う。

去る、一五日の犬養首相暗殺も心配していた老人もいた。

朝から家を出て、八〇哩先から参加した一世の夫婦もいた。

伊藤道朗（舞踊家）氏の挨拶と弟子連の舞踊もあり、会は談笑し愉しかった。早く寝るのも惜しいので、今夜は門限なしの自由行動。ロスには二泊三日の滞在だから、畑中君等と、夜のロスの街を見物に

出掛ける。不安もあり、ホテル周辺をぶらつく。米少年二人が、俺達に向って、“チャイニーズ”と云ったので、“ノージャパニーズ”と云い返したら、ニヤニヤしながら逃げていった。カリフォルニア等東洋人の多いところでは、日本人より支那人の方が、金持ちも多く成功者もいて勢力が上とのこと。

ホテルへ帰り、日誌を記し、一二時就床。

## ハリウッドを訪ねて

五月一八日 水 快晴

途中、三～四〔回?〕下車し休息はしたが、四昼夜の横断旅は疲れた。後では、いい思い出になるであらうが。ロスでの一夜は明けた。映画の都、光りと果実の都である、ロサンゼルスは、日本では、一番馴染み深くて、人気の都だ。今日は、九時頃まで寝た。

同室は畑中君（九州嘉穂中）〔。〕彼は昔から早起きだ。同期の桜で、気分のいい奴。ロスの果実、オレンジ、メロン、バナナ等は、日本で食へ〔べ〕るのと、確かに一と味違って、うまい、と思う。昨晚貰って来た、メロン、イチゴ、オレンジを朝食時食べた。

都ホテルは、日本人街に在り、窓から下を見ると、看板も日本字のものが多い。邦人の姿もあちこちに見うけられる。

一一時半、自動車（有力者提供）で、映画の街ハリウッドへ行く。市内とのことだが、巨〔距〕離は相当あり遠い。ゆるやかな丘陵は一面芝生でおおわれ、草花、樹木もあって、美しい。

時間等の都合もあって、フォクス・スタジオ（Fox Stadio〔マ〕）を見学する。写真機は一切厳禁で、門衛所に預けて入場した

場内バスで、或る地点まで行く。そこからは、都会の街、田舎の街、村の風物、原住民の家、熱帯樹林、水場等々の、セットがあちこちに配置され、役者らしい人々が、出入りしていた。丁度撮影を終った、インディアン姿の男女が出て来て握手し合った。（勿論通訳に、ロス有力者）この男女俳優は、今売り出し中の、女優は、エリッサ・ランデー〔、〕男優は、ワーナー・バクスターであった。広い場内のセットをバス上で見て廻る。約一時間で、ロンドンへ行き、ロシヤへ行き、ニューヨークの裏街へ行き、支那街から、パリと云うように、実に巧妙に仕組みられていて、驚いた。

チャネット・ゲイナーの夫君と云う男を見たが、好男子に非ず。

フォクス社を出て、海水浴場（ここは、白人専用、有色人種はダメ）のレストランで昼食、威張るだけあって、設備は立派なものだ。ロングビーチ（長い浜）と云うだけあって、遠浅で、海水も濃藍色。潮風が吹いて、心地がいい。チャーリー・チャプリン（喜劇王、大正中期頃の世界的人気者）の邸宅を三時頃訪問した。チャプリン氏は、日本へ行って留守だった。邦人のボーイの好意で、屋内を案内して貰う。世界の喜劇王チャプリン氏は、純東洋趣味の人で、日本人形や双剣類、鎧甲が応接間とロビーに飾ってあった。トイレから寝室まで見せて貰った。庭内は広々としていて、プール（二〇米位）やテニス・コートまで、あった。再び、ハリウッドを通って、五時宿舎へ帰る。

七時、ユニホームに着替へ野球場へ行く。夜間試合（ナイター）の設備は、球場の四ヶ所の鉄塔に仕掛けた幾拾と云う、電球の光で、球場を明るく照らす仕組。空には星や月が見へ、夜である。はじめての経験であり、土産話になる。日本では、想像もつかないことだ。

試合と云う気分ではなく、まるで、鬼ごっこでもしているようだった。夜が更けて肌寒くなる。観衆

は応援に力を入れてくれるが、ナイターに馴れないこともあって、5 vs 2 で負けた。相手の南加大学（サザン・カリフォルニア・ユニーブ）は、強いチームだった。

夜も更け、一一時半ホテルへ帰り、入浴して、汗を流す。夜二時まで、日誌、便りに費す。

#### 五月一九日 木 快晴

今朝は途中で目が覚め、それから又寝ったので、起きたのが、一〇時。食堂へ行ったら、サーバント（女中）に笑われた。今日一日で、ロスともお別れだ、と思へば寸暇も惜しい。利用出来るだけ利用したい。

一一時半、南加大の学生（日本人留学生）の案内で、同校見学。米国内での大学視察は、これが最後。

草花、樹木（ヒマラヤ杉の巨木）の並木が、特に美しい。校内の隣りが、今の夏開催される、ロサンゼルス・オリンピックの主競技場である。水、陸両会場を見学した。約一五万人収容可能とは驚きだ。われわれが、日本へ帰った頃、始まるらしい。残念だが、しょうがないさ。

プールには、米女性が五人泳いでいた。

昼食は、同校の好意による。三時からは自由な時間だ。山崎さんの案内で、デパートへ買物に行く。日本製品がある、下駄のあるのに驚く。舶来品（米製品等）と思って買って帰国し、made in japanで、笑われたり、怒ったりはしたくない。日本品は粗悪品が、多いと聞く。

夜、八時の列車で、ロスを後に、サンフランシスコへ向う。アメリカの自動車も、これが最後と思へば〔ば〕、未練も残る。

仲間と、語り合い、差入れの果実を食べ、寝台へ入る。

夜が明ければ、終点、サンフランシスコ（普通は、シスコ）である。この線の汽車は、おそい。小高い処に見へる一群の燈は、映画の都、ハリウッドの夜景だらう。

車窓からは、月明りに、美しい波打ちぎわが、見へる。海岸沿いに走っている。

ロスは西部一の都会で、人口約一五〇万、邦人が、数万とのこと。赤道にも近いので、暑い。夏服が欲しいが、ハワイで麻（マニラ麻）の服を買う予定。

寝台へもぐる。

#### 【人種差別の旺盛なアメリカ】

昭和初期、五～六年頃のアメリカ、特にカリフォルニア州は、人種差別が、ことさら旺盛で、有色人種は事毎に差別されたと聞く。黒人の生活圏は場末の一角（スラム街）に集団。ロサンゼルスに、ロングビーチと呼ばれる、美しい海水浴場がある。名の如く、白砂の浜が長く延び、半裸の米人男女が、愉しそおに遊んでいた。われわれも五〇米位離れたところから見ただけ。有色人一切立入厳禁である。

又、プロ野球には黒人は不在、若し入団していたら、そのチームは除名されボイコットされる。学校も区別され、日本人学校となる。スポーツ競技では、拔群な者は、黒人が占めている。オリンピックの短巨〔距〕離が語ってくれる。白人で一〇〇米を九秒台で走る者は、今のところ居らない。アメリカ陸上競技で常に上位を占める原動力は、黒人である。

アメリカのプロ野球の優秀選手は、黒人に多い。

註 一九六〇年以降は、人種差別はやらないようだ

### サンフランシスコのこと

五月二〇日 金 快晴

七時ボーイにゆり起された。今日、スタンフォード大学と試合するので、途中下車。ここにも、立大卒業生が、留学していた。アメリカの大学は、野球場は、ご粗末だが、アメリカンフットボールの競技場は、屋根付のスタンドで、収容力も、二、三万人は可能だ。この球場も、立大長崎球場位の規模。野球は米国の国技であるが、一般的に小、中、高、大学のレベルでは、人気がない。在学中に傑出した選手が居て、卒業後プロ野球へ行くのが、コースのようだ。試合は元気なく、4 vs 2 で、又負けた。

夕食を載いて、持参した、ハッピーコートをプレゼントして、記念品を貰い。[マ] 八時の汽車で、終点である、シスコへ向う。九時半シスコ着、宿泊、加洲ホテル投宿。

ここも、日本人経営。シスコにも邦人が多いと聞く。寝るには惜しいので、村山さん（松本市出身）を紹介されていたので、架電したら、直ぐ車で迎へに来てくれた。是非、松本の話も聞きたいと誘われたので、お宅へ行き、雑談した。シスコは、通過するだけで、昼頃は、この地ともお別れだ。村山さんの案内で、夜のシスコの街を車中より眺めた。坂道の多い街で、港街だから、活気があり、邦人の経営する店も、あちこちにあった。雑貨店（グローサリー）か、花屋が多い様だ。それも独立して店を持つには容易なことではないらしい。西部第二の都市で、ロス同様日本人好みの港町。高い建物と云っても三〇階程のものが、あちこちに散見された。夜も更けて来たので、ホテル前で村山氏と別れ、部屋へ行く。

畑中君は未だ帰っていなかった。憧れのアメリカへ上陸して、約一ヶ月余日、北西部シヤトルを振出しに、東部のシカゴやニューヨークを歩るいて、西部のロス、シスコと思い深い楽しい旅行をして来た。各地で、米人、邦人方の御親切に接し、われわれも、礼節を心掛け、そお云う点では、聊か日米親善を果たしたように思う。在米、最後の夜、ホテルの窓から名残を惜しむ。日誌や国への便りを書く。午前一時就床。

シスコは雨の多いところと聞いていたが、幸い快晴に恵まれてよかった。

### アメリカよさらば

五月二一日 土 快晴

八時起床。畑中君は、まだ寝ている。昨夜彼の帰ったのを知らない。どこか面白い所で、遊んで来たであらう。

今日午後の郵船大洋丸（一〇、〇〇〇トン）で、出航する。

村山氏宅で、食事に招かれた。迎への車で行く。出航までの時間を有効に使いたい。村山氏の案内で、海岸から要塞地帯を見る。砲台が三門あった。実用かは不明。

シスコの対岸は、ボークレー市。この両市を結ぶのに、世界屈指の大吊鉄橋。有名な“金門橋（ゴールデン・ゲイト）”〔。〕橋上と水面位は八〇米の由。シスコ湾に架っている名物橋を望見し、市中大通りを通る。神戸市の様な地形で、坂の多い街。この坂道を市電、自動車、人が忙しきうに往来していた。九段坂位のもの、ざらだった。日本とは、極めて馴染の深い港街である

――一時波止場へ行く。全員集合し、一通りの税関の検査あり、オールOK。俺は大きな荷物二個を持って、トラップを上り、自室へ入る。内外人が船内を行来きしていた。まだ時間があつたので、いま一度アメリカの土を踏みたくて、下船し雑沓する人群の中に立って、下から船を見上げた。大きいが、古色蒼然たる老船である。

二隻の引船のロープが、ピーンと張り渡り、大洋丸は、一二時ボーボーを合図に、シスコの岸壁を静かに離れ、出航した。送る人、送られる人との心をつなぐ、五色のテープが風流れて、船出は何処も美しく壮感〔観〕である。船出は華やかだが、又寂しいものだ。われわれを見送ってくれる人々は、少数で、お手を振って、別れを告げた。金門橋を見上げながら、二度ボーボーの汽笛が鳴って、船は自力で動き出した。

名残りに、サンフランシスコの街をカメラに収める。絵の様な兩岸の景色を俺は、倦くことなく追いつめていた。今朝行ったオランダの風車小屋も見へるし、丘の上には赤や白のマッチ箱のような民家が沢山列〔並〕んで見へた。さながら花が咲いているようだ。ゴールデン・ゲイト（金門）と云はれる兩岸の岩門を出る頃は、サンフランシスコの街も丘も小さくなった。カモメが船を追って飛んで来る。二度目デッキへ出た時は、三時で陸影が、遙か後方に、ぼんやりと見へた。“アメリカよさらば”左様ならを右手を挙げて、心の中で、大声で叫んだ。

また、あの濃藍色の水の世界を幾日も航海するのだが、幸に良く航海であれかし、と祈る。大海の真只中で、四圍〔圀〕は、空と水の一色の世界だ。船は左右にゆるやかに揺れて進行している。夕食は七時半、ドラの音の合図がする。日が、水平線へ没する景は、まん丸で真赤な大きな大〔太〕陽があたり一面、紅赤色に染めて、次第に沈下してゆく有様はなんと表現していいか。“ただ壮厳”に尽きる。

#### **【アメリカを退るに当り、感謝、感想、印象の総括】**

アメリカ合衆国。一口に云って、とてつもない、大きな、豊かで、文化の進んだ、強大な国家である。土地は広大で、都市と田園が、程よく調和していて、民情も明るく、つき合いのいい国民性だ、と感じた。反面単純ともとれる面ものぞく。文化は東部（ニューヨーク、ワシントン方面）が高く、建造物も、シヤトルで、三〇階が、シカゴ、デトロイトで六〇階、ニューヨークでは一〇三階、ホテルの規模は立派で大きく、乗物も多く速いと感じた。

われわれ、立教野球団は、米国聖公会のご好意で、日本人では、皇族が待遇されただけで、大使と云へども、各都市で、市賓としての扱いは受けていない由。その破格の市賓扱いを、シスコ、とオハイオを除く各市で、警官先導（モーターカップと云い、非常時（火災外）大統領、知事、市長が急用時、又は認めるとき）で、往来することが出来た。最初シヤトル到着時は、われわれに予告もなく、いきなり、ウーウーと二台のオートバイ先導で、実は驚いた。日支事変悪化で、米国民の感情も悪く、危害を考慮しての防衛か、と思った。然し知事、市長方の弟への御好意と知り、深い感銘を覚へた。又、超一流ホテルを宿舍に、好意による高級車で、黄色の青年団一行が、大通りをサイレン車で往来したのだから、大使館で出淵大使から“次回来る折は、もっと学生らしいプランでやるように”と文句を云われた。日本人としては、空前絶後と云ってよい。

日本聖公会の配意（ポール・ラッシュ先生が先行し、布石された）も大であらうが、心良く、むしろ進んで歓待して下さった。特に米国有力者の方々の、心温まる、致れり尽せりの歓迎を各地で受け、

思い出も深く、邦人の皆様へも併せて感謝して、次の天地、ハワイのホノルルへ向う。

五月二二日 日 快晴

在米中の旅行は、日程の都合もあり、強行だったので、船中は休養とする。昨日の航海では、仲間の  
大勢が、船酔いでやられた。俺は気分も良かったので、朝食に出席。

卓上には美しい花が、籠にいけてあり、気分を落ち付かせる。

メニューは高尚な図版で、帰りの船では、欧米調が、多いようだ。食事は、好みを注文する仕組で、  
ゼイ沢な食事である。

ミルク、ハム類を主に軽食で済ませた。濃藍の海上を快よい速度で航行して居る。船の経済速度は、  
一八ノット位とのこと。一面、水と空の世界であり、この船一つが、命の頼り、事故なく頼むよ、と云  
う気持ち、海上も今のところ、割合に静かだ。マーシャル先生と他に二外人も加わり、デッキゴルフを  
組分けしてやった。狭いデッキだが、面白かった。

Mayと云う、二世で一〇才の女の子がやって来た。初めて母と日本へ行く由。なかなか、オキャン  
な娘さんだった。

この辺は寒流のせいか、気候は肌寒い。長閑な日を受けてデッキでは、婦人や子供が毛布を敷いて、  
遊んでいる。

夕食の時、今シーズンの東京六大学野球は、慶応の優勝で、終わった事を知る。一一時就床〔。〕

西太平洋をハワイへ

五月二三日 月 晴、曇

夜半、寒いので、目が覚めた。船室は個室。

若干、風邪気味もあるので、朝食は抜く。三日目の船中。

幸い、うねりは小さく動揺も少ない。海上は実に静かで、嬉しい。今日、三等の船客の子供さん達  
と、輪投げをして遊ぶ。朗らかで面白かった。航海中は考へ事はせず、努めて、無邪気に遊び、デッキ  
を歩くき廻り運動すること。これを、この航海でも心掛ける心算。午後は気分良くなったので、船尾に  
立って、前方を見ると、二本の大きな煙突から白く薄い煙が出〔て〕いる。この船も重油船（Oil Ship）  
だからとのこと。カモメは昨日より見かけなくなり、代って海の鳥 大洋に住む、アホウ鳥が、五、六  
羽船の後を追ってくる。大きな白い鳥で、浪の上に降りることもある。動く船のお友達でもある。大洋  
に今日も夜が訪れた。

今夜は月影もなく真暗だ。船底の方から、ゴーゴと云うエンジンの音だけが聞える。寝台に入る  
前、日誌（こここで、書き続けたから、有終の美といきたい）を書き、ハワイから持って行く、国の  
方々への便りをまとめる。

五月二四日 火 晴

別にやることもないし、疲れもあるので、ベットで休養。

今日も天気は良いようだ。動揺も少なく、気分は良いが、朝食を、ボーイさんに、船室まで持って来  
て貰う。この船は腰高で、丸窓は上の方にあり、日枝丸の様に、時に海中へ沈するようなスリルは今の

ところない。――時軽装（薄いジャケットとフラノのズボン）で、デッキへ行く。日当りのいいデッキでは、子供もアメリカ帰りの婦人連も思い思いの遊びを愉しんでいる。船は航跡の白い泡を立てて、うねる浪を蹴破って進んで行く。航海にも馴れて楽しい。海流の関係か、大洋上の気候は急変する。初夏の陽光が、溢っている。この船の一、二等船客は六〇人位。皆んな運動不足を補う工夫か、輪投げ、デッキゴルフをキャツ、キャツ騒いでやっている。大洋丸でのわれわれの記念撮影をする。

夕食は、おいしく沢山食べられた。体調は至極上々である。今夜は星空である。食後のBデッキは賑やかである。

暑い船室に居るより、よっぽと〔ど〕楽しい。お互に名乗らずとも、仲間には直くなる。北斗七星が頭上に光っていた。

船内での、二回目の活動写真が、八時半より、サロンであった。

日課を果し、――時就寝〔。〕

#### 五月二五日 水 快晴

昨夜はととても寝苦しくて、困った。

今朝は九時起床。何時の間にか枕許に食事が持って来てある。ありがたく頂戴した。キャビンの丸窓から見へる海上は波も静かなようだ。気分よいのでBデッキへ出る。何時ものことながら、顔見知りだが、思い思いの遊びに熱中して居る。別にやることもなく、船内の遊びは定まっているので、工夫するより方法なし。

航海は馴れて、船酔いしない人には嬉しいものだ。

船上は、同じ運命の共同体、限られた範囲内での生活だが、うまい物を自由に存分食べ、好きな時に入浴、キャビンも綺麗で、ボーイさん付だもの。

今日も、うらかな日和。アボウ鳥が相変わらず、船を追っている。今日は肌寒いので、船内プールでの水泳は止めた。夕食前入浴し、さっぱりした。夕食の時間が、待速しい。ラジオ、ニュースで、斉藤実さんが組閣完了し、首相就任したことを知る。留守中、国内には、大きな政変があった。七時半、マーシャル先生とデッキを三周した、約四〇〇米歩るいた。一〇時就寝。

#### 五月二六日 木 晴、曇

今朝は少々早く起きられた。それでも八時である。

大きな船に少数の人だから、割合に静かだ。明日は、憧れのハワイのホノルルである。どんな所か、と想像は大きい。

デッキでは、何時ものメンバーが、騒いで、遊んで居る。

寝椅子に横になって、海を見ていた。体調がいいのか、昼飯が、待速しい。三時まで割当てられたので、ポートデッキの船内プール（長さ六米位）で、泳ぐ。力を入れて、二つ程泳ぐと向側だ。汗を流す程度。然し大洋の只中で、泳ぐのも又一興である。強い日を受けて、半裸で歌い騒ぐ若い男女の仕草は、ほほ笑ましい。この六日間の航海は荒れず、比較的平穩であった。入日が、水平線下に没して行く光景は、全く壮厳で、幾度あっても見倦きるものではない。

夕食は、ホノルルで下船する者のために、最後の晩餐であるから大テーブルに、沢山の御馳走が列

び、贈物も飾ってあった。珍しく今夜は星一つ見へない暗い夜である。

八時三〇分より、三回目の活動写真あり、面白くなかった。

下船の準備と、日本へこの船で持って行って貰う、便り一通と、冬服や余分の物を小包にした。仲間と談笑した。

## ハワイのホノルルへ上陸

五月二七日 金 晴

昨日までは、濃藍の四海と、紺べきの空しか見へない世界だったが、デッキへ出て見たら、船は速度を落し静かに岬の間へ入って行く。入江は藍色だった。

突き出した岬一面に、南国特有のヤシ樹の林が見へ、介在する土民の家も望見した。洗面し大急ぎで朝食。

日本向の荷物を送る手続を、インフォメーション（案内所、受付）で済ます。又うるさい税関の検査で、折角整理した荷物を、だいなしにして仕舞った。ホノルルの港は貧弱である。

上陸して、ハワイ伝統である、色とりどりの生花で造った首飾りを出迎への人々により、一同首一つばい、掛けて貰う。嬉しいような妙な気持だった。珍しい催しと思う。

常夏の島、ハワイは静かで、伸び伸びした島である。自動車（古く旧型）で島の珍しい所を見て廻る。ワイキキの浜辺は美しい。海とヤシ樹の調和が好きだ。海水は飲んでみたいような、清純さ。路傍で見受ける白人も、われわれより黒いようだ。この大洋に浮いた様な島、ハワイには、まだ、文明、文化の風は余り吹いて居らず、人工を加へない素朴な姿。丘に登って市中を見る。米本土の都市と異り、平面的な街である。三、四階の建物や塔が、介在していた。涼しい潮風が吹いて心地よい。観光は後日にして、早くホテルへ行き、そして休養したい。多忙だったアメリカ旅行の疲労を医〔マ〕やす所が欲しい。屹度、この島は休養させてくれるだらう。ホノルルへ着いて一番先に知りたいことは、故郷松本の友から来ている筈の便りのことである。或る件を依頼して出発した。下條良太郎君（小学校より松本商業同期）からと塚田積君から来ていた。（当時海外へ通信することは、容易でなかった）内容は“見込薄い”との意、寂しく致し方ない。他にスポーツ誌や、日本の新聞（われわれの渡米中の記事のあるもの）が、橋倉から送って来てあった。本当にありがたいことと思った。

山城ホテル（広島県人で、渡布以来三〇余年とのこと、孫や子達多数あり）へ投宿。一と休みして、冷水のシャワーを浴びた。

夕食は久し振りの日本食で、実にうまかった。夜は自動車で、市外の山（六〇〇米位）へ行き、ホノルルの燈を見る。海は薄黒く広がり、美しい夜景だった。

暑いので、なかなか寝れない。——時就床〔。〕

五月二八日 土 快晴

ホノルルは、ハワイ（カリフォルニア州の支所）四島の中の一島で、一番大きく（カワイ島）文化的で、曾て昔日には、王城もあり、大王（カメハメハ）も住んで居たと伝へられる。

この地でのこれからの生活は、野球試合を六回行う。（日系と支那人チーム）次の予約船は、一ヶ月先でないと来ない。それまで、この楽園で過すのだ。



ホノルルの人達は、夜は深更まで、踊ったり、歌ったり、して過す風習とのこと。これは、小島で単調な、然も亜熱帯で、これと云ってやることも少ない、地域的、気候的がそおさせているからであらう。ハワイは、日本に居ると余り変らない風習、浴衣が着れて、何より嬉しい。今年は夏を二度やることになる。朝食は軽く、パンと牛乳で済せ、一時より練習のため、市営球場へ行く。日本の何処にもある規模のグラウンドである。新聞宣伝が、利いてか見物人が多い。ここらにも、単調な島人の生活の一面が、あるようだ。汗が眼に入って痛い。今日一日で、とても黒くなった。米本土では、白かったが、ここで、真黒く日焼し健やかな心身を持って、帰国しよう。

ホテルへ帰って涼水のシャワーを浴び、清々する。

輪切りの生のパイナップルが、疲れを医〔マ〕してくれた。安売りがあるとのことで、仲間は外出した。マーシャル先生と夜散歩に出掛け、一〇時帰り就床。今日も安らかなることを感謝する。

### 日本は、ハワイが、いらぬか

明治維新前、日本は鎖国政策をとって居た。その頃時の、ハワイ王は、日本へ帰化し属領となりたい、ことを日本（当時は幕府）へ伝へたと云う。勿論受入れはしなかった、と云う、古い言い伝へがあるとか。某氏の快談〔。〕

事実だとすれば面白い話であり、時の幕府の役人衆の如何に腹の小さい奴等か惜しいことである。

今日、ハワイが日本領であったら、歴史は大きく変って居りいろいろの意味で、どんなによいか計り知れない（和夫思う）〔。〕

### ハワイの生活

#### 五月二九日 日 晴

七時頃起きた。矢張り早く起ると気分がいい。

今日は珍しく朝から曇天。今日は、地元の朝日チーム（日系、ノンプロ）と対戦し、内容的にもいい試合だったと思う。交戦七回で捕手を小笠原君と交代する。

結果は、8 vs 6 で負けた。最初のゲームだから、勝ちたかった。致し方ない。夕食後市内中心部の夜景を愉しみに出掛ける。海から吹いてくる潮風が心地よい。ワイシャツに半ズボン姿、これで、少しもおかしくない。

ハワイ諸島を統一した英傑カメハメハ王の銅像（堂々たる立体像）が、道路沿いの公園に在った。

ホテルへ帰って、メロンを食べて、部屋で、ゴロゴロしていた。ハワイは日中は暑い。平均27～8°〔マ〕か。然し救はれ、好都合なことに、午後二時頃になると、急に入道雲が出てきて、夕立が定った様に降る。雨降りが又、猛烈であり、さながら、シャワー（風呂場の施設）に似ているところから、当地の人は、これを“シャワー”と呼ぶ。別に、スコールと云う人も居る。

#### 五月三〇日 月 晴

ハワイへ来て、伸び伸びした。心身の休養を得て気分も至極上々。七時半頃起床。夜は海風があり比較的涼しいが、朝は早くから暑い。ハワイは果実が実にうまい。パパイヤ。〔マ〕マンゴは特に好だ。パパイヤはスプーンで、削いで食べるし、マンゴーは皮をむいて、かじる（一寸渋い）〔。〕パイナップ

ルの生も、いい風味と味いだ。シャワーは思い出したように必ず降る。今日は、ホノルルで欧州大戦の戦死者の鎮魂祭があり、表通り（ホテルの前）を賑やかな米陸軍々楽隊の吹奏する“星条旗の下に”につれて、軍隊の堂々たる行進があった。二時は一番蒸し暑い時。必勝を期して、球場へ行く。今日の相手は、ハワイのブレイブス（日系）。昨日のゲームの折も嫌な気持ちだったが、観衆が実に口汚ない。試合は利あらず5 vs 2 で破れた。遠征中一番不愉快な試合だった。そして、俺は、アゴに球が当り負傷した。

仲良しのわれわれでも、一寸したことから口論、喧嘩となる。二、三日前からチームワークもうまくいっていない。斯様な逆境の折には、露骨なもので、責任のなすりあいをする。人は人、俺は、俺の信念で、一切黙す。米本土で二回、今度で三回目だ。嫌な空気だ。夜は、ラジオで、いろいろの催物がある。プログラムの中に、立教大学校歌放送あり、俺は負傷しているから、欠席した。バーラーで、山城の人々と放送を聴く。スピーカーから、久保田部長の挨拶とナインの歌う「吾等の学府」立大校歌が、実に立派に放送された。日本が懐しい、友人が懐かしい。妹達（智恵子と春子（松本高等女学校一年生）〔 〕）〔と〕父は、丈夫かしら、そんな事を思いつつ寝る。

（追記）今日の午後東京から二軍の応援隊（宮田マネ、山崎、生田、松本〔木〕）がやって来た。急に活気が出て賑やかになった。〔この記述内容は六月二日のもの〕

#### 五月三十一日 火 快晴

昨夜半は、雨が降っていたが、今朝は晴れている。

今日は、一日休養で、自由行動、アゴの負傷の痛みも大部薄らぐ。朝は、ホテルで、ぶらぶらしていた。

昼食は、パン、卵、フルーツ。午後関口先輩（主将）と写真機を持って、市の中央区の方へ出る。通行している人々は、ハワイ市民が、ほとんどで、服装は極めて薄物で、軽装だ。男性は、ワイシャツかアロハ（半袖物）シャツ、女性は、ワンピースかズボンのスタイルが多く、われわれと同じスタイルになってきた。デパート（三階建て）を二軒程ひやかし、何んにも買わずに帰る。西の空に夕焼が美しい。涼しい海風が吹いて来た。

夕食の合図の、チリン、チリンをホテルの娘量子さんが振ったので、皆んなで、二階からひやかす。平凡な一日であった。

#### 六月一日 水 快晴

いよいよ、六月だ。横浜を出て、三ヶ月目になる。

思へば、大旅行をしている。大した故障者もなく、行を共に出来ることを祝福したい。今暁一時半頃、ホテルの向い先に、火事があり、まだ寝らないで居たから、呑気に腰掛けて、見物した。大事なく鎮火。その為九時頃まで寝坊した。二時から練習する。暑い中二時間程練習し、一汗かいて、ホテルへ帰り入浴し晴々した、気分になる。夕食はすき焼、アゴの傷も良くなったので、そろそろかむ。おいしかった。辻投手盲腸炎で、今日、ハワイ病院へ入院した。見舞に行った時は、最早手術も終って静かに寝っていた。

カイザー田中氏の自動車で、強い風が吹くことで、有名な谷へ行く。地形の関係で、風道になってい

るためか、強風（一〇米以上）だった。

関口さんと三人で、途中で果物を食べる。

明朝は、いよいよ、日本より二軍の五名が、参加する日だ。いろいろと噂をしながら、寝る。

#### 六月二日 木 快晴

九時目覚めた。今朝入港の外国船で、五名来る筈だ。一〇時半頃元気な懐しい連中の顔を見た時は、なんとも云へない嬉しい気がして、今まで、見馴れた顔とは異なり、一同急に朗になる。今日も二時より練習をする。今日は、新手五名が加ったので、張り切って賑やかだった。

一汗かいて帰る。一切りの西瓜は千金の価がする。

暑くて寝られないし、ホノルルの人達は、日中は、午睡するか、木蔭のベンチで憩うか、活動するのは、日没からのようだ。土地の慣習や、食物のうまい店、安売りの日等段々と判って来たので、それに調子を合せる。頭は生きている時に使うべきだ。二、三の連中と港街の方へ散歩に行く。市電には、まだ乗らない。その中利用する心算。

ホノルルの人達は、楽天的だ。男女間の交際は、とても自由で、開放的だ。誘惑こそ要注意。こんな所で、問題を起せば、一生の不覚と思へ。日記を記して寝る

#### 六月三日 金 晴

近頃、体調が悪く憂鬱だ。ホームシックかも知れない。一〇時起床。午前中は自由行動。辻さんを病院へ見舞う。手術の痛みもなくなり、ベットに起きて、対談した。後五日もすれば退院だらう。

格別変わったこともなく、昼を迎えた。午後二時から新人も加えて、本格的な練習の予定。今日は、俺は休むことの許可を得た。今日も暑い。日本と違い陽光が、強烈だ。夕食はお腹が空いて居るので、沢山食べた。夜、誘われて麻雀して負けた。依頼されたスポーツ社への原稿（旅行記三編）を書く。

ホノルル市では、昔から日本人と支那人は縄張り争いが、激しく、商売上や生活圏で常に争っている由。五日支那人チームと対戦するが、夜る、日本人の代表三人が、ホテルへ来て、“若し支那人チームに負けるような事があつたら、直ちに帰国してくれ”と強談判。われわれは、バストを尽すが、必ず勝つとは約束出来ない。スポーツとは、そお云うものだ。[ママ]と諭して帰す。ホテルのサービスのメロンとアイスクリームを皆んなで戴き、明日はゲームだから、静かに就寝 [。]

#### 六月四日 土 晴

今朝も寝坊して、九時頃起きた。

常夏、ハワイは朝から暑い。シャワーは、ハワイの人も草木も生々とさせてくれる。新緑の草樹が一層美しく、色彩を増す。ホテルの横に巾三〇米位の川があり、川水は黄色く、にごっている。遠くの山は煙って見へる。今日は気分も良い。午後二時の練習で、三時半から、ワンダラス（日系ノンプロ）と対戦してハワイで初めて、7vs5で勝つ。俺は今日はベンチを温め役。一汗かいて、勝ってホテルへ帰り、入浴したが、実にいい気分だった。新人の諸君が、良く働いてくれた。

この連中の中から、秋季リーグ戦の活力になる者を、選考する目的で、ハワイへの参加とした。

夕食後、皆、思い思いに外出した。俺は、ホテルの子供達 星、錦さんとトランプをして遊ぶ。傍に

部長が本を読んでいた。この老先生は、余り雑談しないが、ニコニコしていて、部員には、大変慕われている、人格者である。

六月五日 日 快晴

ハワイでは、日曜日の教会礼拝はない。

昨夜は、今日約束厳しい、支那人チームと対戦するので、自重して、皆早く寝た。日曜日の大通りは、大勢の人々が往来していて賑やかだ。ホノルル市の人口は、約一五万と云う。

アララ公園（市中央にあり）の樹蔭は涼しそお。雲の動きも、ワイキキの海岸も、遠くに見へるダイヤモンドヘッドの山容も、絵てが、南国情緒で、ヤシ樹の茂った姿は、好ましい。田中さん（カイザー田中は、ハワイ・ブレイブスの名捕手であり昭和一〇年以降、阪神タイガースの捕手として名声を拍〔博〕した人）の車で、関口、宮田、山崎、俺の五人で、郊外へドライブする。白人の若い女三人が、海で泳いでいた。

三時半から、待望の支那人チームと試合する。結果はシーソーゲームの末11 vs 10 で辛勝し、ほっとした。

この土地の邦人は、支那人に対する感情は悪く、大変なもので、三日の夜の強談判もあり、是が非でも勝つことに全力を注がねばならないのだ。あの涼しい客、シャワーは珍しく、今日ない。蒸し暑い日で、骨が折れた。

ゲームは勝ったが、支那人は辛抱強い国民性か、なかなか、試合を捨てず、じりじりねばって、追撃してくる。その迫力は、大いに学ぶべきものと痛感した。一例は、立教軍は初回五点を取り、相手一点、双方加点したが、確か八回だと思う〔、〕立教一一点、相手五点、その差六点なら普通は捨て戦法で、荒いプレーになりがちだ。ところが支那式で、じりじり攻め立てる。俺は、折々ベンチへ、後何点かと聞いて、プレーした。

スコアボードは結果表示で、中途計はない。やっと逃げるようにして、この重大な試合に勝った。俺はこの試合、四打数四安打の一〇〇%の大働きをした。ホテルで一風呂浴び、当市有志の歓迎会へ出席する。「望月」と云う料亭で、ハワイにもこんな料亭があるのか、と思へる純日本式の家で、支那料理に空腹を満す。余興として、本島人女性の“尻振りダンス（フラダンス）”〔\*〕と、例の“アロハハワイ”と云う情緒も寂調な歌を、女性歌手のウラ声で歌いすっかり、いい気持になった。主催者より、今日の試合の勝利を祝されたが、ヒヤ汗物。自己紹介し、万歳裡に一〇時半、散会する。ホテルへ帰って、マンゴを食べて、疲れたので、寝る。

六月六日 月 快晴

目覚めて見れば、ホノルルの地だ。

日本が懐しい。どれ程楽しい旅行でも、外国では、一日として故郷のことを忘れた事はなく、世界は広いが、故郷に優るところは無い。〔マ〕とつくづく感じた。

今日も朝から暑い日で、海風の吹くところが欲しい。

ハワイの風習、気候等にも、次第に馴れてきた。

散髪すべく出掛ける。ところが、外国型（お皿刈り、上部には余り、剪を使わず、周囲〔囲〕を短か

く刈るので、髪と肉部が判然とする）に刈られ支那人と間違へられた位だった。昼食を済せて、マーシャル先生と、ワイキキの浜辺へ行く。ホノルルの海遊びは、ワイキキが一番良いところである。湾曲した長い海岸線が、遥かに見へる、ハワイの表象である、鼻形の山、“ダイヤモンドベツト”の方まで続き、遠浅の海岸は実に素敵だ。ヤシ樹が生茂り、白い砂浜、青い空に湧き立つ白い雲の、少しも人工力の入らない天地、これこそ正に、平和の楽園である。押し寄せる高波に、六尺程の板スキーに乗ってくる連中（波乗りは、なかなか、むずかしく、俺もやってみたが、バランスを崩したら、海中だ、死ぬことはないが）、〔、〕砂浜に寝て日光浴する女男、皆んな愉しそおである。

快よい半日を過ぎて、帰りは市内電車で帰る。夜は雨が稀〔珍〕しくポツリ、ポツリ降り出した。のどかな一日だった。

#### 六月七日 火 快晴

横浜を発って以来、二ヶ月目が来た。

恵まれた、こおした生活にも馴れて来ると、幸福とか感激が薄らいで、平凡に思へるものだ。人間って勝ってなものよ。

俺は、幸福者である。本来ならば責任ある一家の大黒柱として、父、妹二人を支へる立場にあるのだ。卒業まで、暫時我慢して待って貰うにしても、自由に好きなボールを握って、米国旅行をしているのだ。どんなに感謝してよいか、明〔マ〕らない。

午後、関口、藤田さんと、三人で、辻さんをハワイ病院へ見舞いに行く。経過も良好で元気だった。

帰路、大通りへ出て、デパートを廻る。五時、日本へ向う外国船の汽笛が聞へた。静かな一日だった。

#### 六月八日 水 晴

九時起床。おだやかな朝だ。仲間に変ったこともない。

ハワイは、文化の点では、まだまだ行届かないところが、多いと思う。自然の姿で、大〔太〕平洋上の楽園として、主として、観光政策を売物にしていると云ってよいだらう。

将来、大〔太〕平洋が、いろいろの意味で重要となると共に、ハワイの位置と云うものは、益々重要性を帯びてくるであらう。

楽器、ウクレレの音色も哀調な、アロハ、ハワイは本当に平和郷である。午後一同元気で練習する。この練習は、秋のリーグ戦に備へ、新メンバーで臨むための、ハワイキャンプでもある。俺達は、その諸君を引っ張って行く責任が、ある。夕食後は、自由行動だ。

スポーツ社依頼の原稿を書き上げた。大変疲れた。

ロマンチックの島、ハワイの夜は、悩ましい場面が、多い〔。〕ヤシ樹の二人、自動車の中の二人、歩くけば幾組にも出会う。日本では、想像もつかない事だが、

一〇時メロンを食べて、日誌を整理し就床。

#### 六月九日 木 快晴

ハワイへ来て、なんとなし暮す中、もう一〇日余を過ぎた。

気分は良いし、徒々〔ルビ：ツレツレ〕なるままに街へ出て、そろそろ土産物を物色。買うは後にして、見ただけ着〔マ〕けて来た。

午後一時より、秋季リーグ戦に備へることを、互々自覚しての上の練習に、みっちり三時間励んだ。今度のゲームから卒業生は（関口、三浦、中島、辻。この人達は、三月卒業して、就職先も決めている）入らず、われわれ現役のみで、やることに話合いで決めた。

夕食を済ませて、当市二世の女子のダンス・パーティーがあり、六時一同出席する。会場のYMCAは綺麗な設備だ。

われわれと同じ年輩の人達であったが、割合に寂しかった。

俺は、ダンスはこれで、三度目（米国内二度）で、決してうまくない。稲毛と云う人と踊るも、よく足を踏んで、気の毒をした。

謝りながらやった。ダンスは気分の上でもいい、と思うが、俺には余り必要ないと思う。忘れてたが、昼食は男子の人々の招待で愉しく騒ぐ。夜おそく、山城ホテルで、ビールを三浦氏に飲ませたことから、木庭君と内田が喧嘩をして、そのため部内が面白くなかった。酒類は厳禁だ。酒に飲まれるなら飲むな、馬鹿者達メガ。俺はアルコールはやらない。

### ワイキキの浜辺は、楽しい

六月一〇日 金 快晴

酒は気遣い水、とは良く云ったもので、朝になれば、昨夜の酔漢も別人の様だ！！俺は、酒は必要あるまでは、やらない心算。大学で学ぶことは、自己の将来の飛躍の土台であり、目的と所信の前に努力すればよい。〔マ〕と考へる。格別変わったこともなく、各自思い思いの行動で終始した。

夕方、ワイキキ海岸の「塩湯」と云う料亭で、招待会があり、一同出席。支那料理が卓上に沢山盛られてあった。型の如く、自己紹介をして、食事も美味で、沢山食べた。毎度のことであるが、学生と云うことで、米本土でも、飲物は、ブドウ酒類か、タンサン系の物だった。

黄昏時の海は一層楽しかった。今日の名残りを停めて、街の上は夕日で紅〔ルビ：クレナイ〕色に染り、いいナーとつくづく感じた。海風が吹いて、なんとも云へない気分であった。俺は、宮田、山崎君と岬の方まで、歩るいた。丁度その時巨船が、ホノルルの港から出て来たところで、雄々しい姿だった。辻さんの退院を手伝い迎へに行く。日高婦長婆さんは、親切な人だった。

### 【ホノルル（ハワイの首都）とは、】

われわれが、滞在していた昭和六年頃のホノルル市は、高い建物（五階以上はない）もなく、平坦な街並で、人口も本島人（皮膚の色は赤褐色で体軀は頑丈）が、主で、支那人、日本人〔、〕アメリカ人、その他で約二〜三万人か。カリフォルニア州の支所があり、産業は農産物（バナナ、パイナップル、砂糖が主力）を米本土、や日本へ輪〔輸〕出し、観光客と云っても、米本土から来る人々や船旅の途中下船客位で、取り立てて論じる程のものではなく、至極のんびりした風情だった。市内電車が大通りを走って居り、人々の遊び場は、ワイキキの浜辺が、人気があり、遠浅で、白い砂浜が、湾の入口の方に在る、ダイヤモンドヘッドの方へ彎曲しながら長々続いていて、美しい海岸線であった。六尺位の板に乗って、沖から岸へ向う高波に上手に乗れば、一〇〇米位滑走して、見る者も楽しい風景であった。海

岸に椰子が沢山あり、裸で木登りした(写真あり)頃の俺は若かった。このハワイ四島を時の大王は、日本の属領になってもよい。[マ]と申出たとか。(日誌中五／二八日の項に記述した。乞参照)惜しいことをしたものだ。

日米間太平洋横断には、必ず立寄る島なのだ。

註 戦後の日本民衆は、ハワイ(ホノルルのこと)へ軽い気持ちで出掛ける。ジェット機で、数時間、余りにも簡単な旅だから、後に何んにも残らない、味気のないことよ。

#### 六月一日 土 快晴

九時起床。午後は試合があるが、それまで自由行動。

附近の公園へ行く。新緑のホノルルの街は、静かで、然も伸び伸びしたところが、とても好だ。

人があまり居ない。芝生の上に寝転がって、空を見る。白い雲が、海の方から山の方へ流れていた。

昼食を済ませ、早目に全員球場へ行く。今日は、全ハワイ、即ち、日系三チームよりの選抜軍であり強力の評判である。立教もベストメンバーで、当然対戦すべきであるが、先日の話し合いで決めた、現役だけの新メンバーでやることにし、必要あれば、卒業組にも手伝って貰うことにして、開始した。結果は、最終回二点入り、6 vs 4で勝った。

ホテルでは、祝賀パーティーを開いてくれた。そこへ街のお馴染の男女友達数人も加わり賑やかだった。

街へ散歩に出掛けた者も多く、ホテル内の二階のわれわれの郎[マ]室は静かであった。俺は出たくないので、身辺の整理をした。

#### 六月二日 日 快晴

今日も、朝から照りつけて蒸し暑い日だ。

午後三時から、ホノルルに於ける最後のゲーム、米海軍との対戦がある。それまでは、自由行動。海風が涼しいから助かるものの、これが無ければ、住む気にならない。

シャワーは、一時だけだが、それは猛烈な降りですらで地べたへ、たたきつけるように降る。

定刻、グラウンドへ行き、軽い練習をする。又、あの口汚い観衆が、ざわめき騒いでいる。辻投手が、退院後で、欠場するので、ベストメンバーとはいかない。皆んな頑張らねばいけない。結果は、最終回長打され4 vs 3で、最終戦を飾れなかった。負けても、今日のゲームは内容的にも、良かったと思う。負けても惜しいのもあれば、勝った試合でも後味の悪いこともある。入浴して、ワイキキの塩湯(料亭)で、チャプスイ(支那料理)による歓迎会兼送別会へ出席する。何時も外人の会合は、朗かである。ありがたいことだが、歓迎会も感激も薄くなった。

ホテルの次男坊と海岸通りを、涼みながらドライブした。

ホテルへ帰って、早く寝る。日誌も記した[。]

#### 六月三日 月 晴

三日程前から、顔に吹き出物が出た。

目覚めて、先ず気になることは、顔の吹き出物だ。今朝は症状が悪く、悲感[観]して部屋から出

るのも嫌だ。食事にも行かない。憂鬱この上なし。午後医者へ行行って診察を受けたが、納得しない。お白粉の様な薬を顔へ染〔塗〕って、芝居の時の様だ。われながら苦笑した。一日中部屋をうろつき、一人で黙々としげこんでいる事程、寂しく腹立しいことはない。

旅行中、一番不愉快な日。時が経つより処置なし。

夜も昼もない嫌な時間を過す。

## 入院生活

### 六月一四日 火 快晴

今朝は早く目が覚めた。鏡に映る自分の顔を見て、情なく思う。熱がある（37°.1 [マ]）し軀が、すっかり疲れて駄目になった。ホテルの子供（星ちゃん（一才）〔、〕 錦さん（一九才）〔〕）達が、牛乳の温いので果実（メロン、パパイヤ）を持って来てくれた。

藤田氏（マネージャー）〔、〕 桂さんも見舞ってくれて、病院へ電話して下さる。異国で病気を患う事程寂しいことはない。

部員一同、ピクニックへ出掛けた。ホテル山城の主人と病院へ行く。日本人病院の玄関から、台車に乗せられて、二階へ運ばれた。とおとお入院だ。惨たる哉、俺の姿よ。

一六番室。婦長の日高婆さんはじめ看護婦の人々が、大変親切にしてくれる。診察の結果軽い盲腸炎とのこと。上と下を水で冷す。一応入院するが、若し手術すれば、皆んなど、月末帰国が出来ないことも考へられるので、（俺はいいとしても、誰れか一人後に残ることになる。部にも迷惑となるし）部長、幹部と相談の結果、冷して病状を落ち着かせ、万一船中で再発すれば（船の動揺で、手術は不可）その時は運の尽きらしい。重苦しい一日であった。

夜半腹部が少々痛む。一日が非常に長く思へた。

### 六月一五日 水 晴

朝六時検温（36° 3 [マ]）〔。〕 洗面してもらおう。薬を飲まされた。

食事は、カユと薄いスープだけ。それに便通に動けないので、ベットの中で器を使ってやるが、嫌だ。一番嫌なことだ。

軀を拭いてもらおうと清々した。恥しいも何にもない裸〔?〕にならねばならない。血液を耳たぶより探って検査した。花を藤井さんが下さったので、飾って貰う。桂さんと菊谷君が見舞ってくれた。

午後部屋を静かな所へ替へてもらおう。辻さんが居た部屋だ。この方が、涼しいし外の景色もよい。視界は向い窓一つ。

木々が揺れ外は風が吹いている。新緑の外の景色も、うつろだ。今日から断食して、汁物（番茶）少量以外口へは入らない。

夜、関口さんと一緒に錦さん、星ちゃんが来てくれて、嬉しかった。じっとして居るより外ない、今の俺だ。

病院の一日は長く思へる。健康こそ最良の倅ませだ。

シャワーが欲しい。ハワイは暑いと思う。

昼頃、桂、宮田、辻、菊谷、沢本〔木〕と三波多さん達が、見舞いに来てくれ、マウイ島へ行行ってく



る話をしていた。

六月一六日 木 小雨、晴

今朝は、気分も大変良く、昨夜は良く寝れた。

下腹の痛みも薄らいだようだ。外はまだ薄暗く、遠くの山の頂は霞んで見へない。今の俺の心のよう  
に重苦しい空。

珍しく雨が降って来た。実に静かな島の朝だった。

俺は、ぼんやりと病院のベッドの中から見詰めて居た。

割合に涼しい日、窓から見へる今日の港は賑やかだ。

立大組はマウイ島へ遊び（キラウエヤーは火山口）に行く〔。〕

シスコへ行く巨船、日本へ行く船、その船には故郷への便り数通と、スポーツ社への原稿が乗っているのだ。

昼の食事も手当も済んだ。静かに寝らう。ドクターが二回診察した。下腹部は未だ少々痛む。又、夕方  
方が来た。病院生活で、夕方、夜が一番寂しく嫌なものだ。

夕食は何時もより、堅目のカユだった。寝台を窓ぎわへ移してもらう。入陽を受けたホノルルの街  
は、一段と美しく、静かだ。夜八時三〇分ホノルル港から二度発船の気笛が聞えた。病院は静かな丘の  
上にあり、眺望は良好。

六月一七日 金 雨天

病院生活四日目、昨夜も良く寝れた。

六時検温（平常の由）〔。〕顔や手を拭いてもらう。何にもかも、人手の生活だ。気分もいい。開けっ  
ぱなされた入口や窓からは、新鮮な朝の姿が見へる。あたりは何時もと変りないが、ベッドの上の己れ  
が情ない。今日は朝からホノルルには稀〔珍〕しい長雨で、日本の梅雨のようだ。総てが甦った様で、  
生々して見へる。山が、ポーッと浮いて見へ、とても静かだ。ハワイには稀〔珍〕しく曇天の続く日  
だ。六時夕食、お腹が空いて、待遠しい。

日高婦長は、三〇年近く病院生活をして居るとのこと。病人にとっては慈母の様な婦長さんと、鬱々  
とした気分をほぐしてくれる。午前稲毛、一条さん〔が〕見舞ってくれ、午後星ちゃん錦さんが来て、  
親切に見舞って下さる。名物の虹が向いの山に見へる。雨天のハワイもまた一興だ。

夕日が西山に傾き、静かな夜が近づいてきた。

退院を指折り数へて待つしかない。

夜は、雑誌を見て、九時就床。

六月一八日 土 晴

昨日辺りから気分も良く、お腹の痛味も薄らぎ、少々の無理も出来るまでになった。便所へも歩るい  
て行けた。軽い食事を済ませ診察、宮本医師は、今夕退院してよい、と云った。病院で入浴を何日振り  
かでする。実に気分よし。背中を看護婦さんが、流してくれた。

桂輝三氏と辻さん（マウイ行病後で中止した由）が、来た。今夕退院のことを話す。喜こんでくれ

た。日高婦長の案内で、日本病院の内部を視て歩く。養老院のような施設もあった。そして軽い夕食後、入院以来五日目で退院した。ホテルへ帰ったら、皆さんニコニコ顔で、迎えてくれた。健康に勝るものなし、入院して、つくづく感じた。退院したので、夏用の白麻（マニラ麻）洋服とモダンな赤系の靴を、\$一六（日本貨約三八円）で買った。

六月一九日 日 快晴

朝気分良く目覚めた。病状は幸い軽症であったが、要注意である。食事や行動を強行しないように、自分で工夫したい。

前々からの約束もあり、帰国も迫って来たこともあり、それに俺が、希望していた島巡りを、今日やると云う。九時桂さんの自動車（大型）で、ホテルの主婦、星、錦、坊ず、(Endey tol) 辻、俺とバーバラが無理し割り込み、食糧を沢山積んで出発した。

ハワイの海岸は何処へ行っても美しかった。比較的閑静な田舎道を相当走って、山の頂へ出た。地層が砂岩で珍しい形をしていた。そこからは遠く（二里以上）ホノルル市やダイヤモンド・ヘッドが見へ、眼下には荒波の大〔太〕平洋が、果しなく続いている。

昼食は、或る浜辺で、潮風に吹かれながら、皆んなで揃って食べておいしかった。沢山の人が泳ぎに来ていた。

帰途、バナナの林や砂糖キビの畠や、又パイナップルの大きな畠も見た。今日は久々に外出し、気分もよく、実に愉快な一日であり、未開のハワイ島の一部を見ることが出来た。

夕方ホテルへ帰る。

日本人が農場を立派に耕作し経営して居られたことに深い敬意を表する。

六月二〇日 月 快晴

今朝も気分が、いいので嬉しい。

錦さんは、今日から休暇（ベケーション）も終って、お勤めの由。

午前中、日本人病院へ行き、診察を受ける。“まあ大丈夫とのこと”〔。〕

世話になった婦長、医師外に、挨拶してお別れした。

白い麻服が、良く似合う、と云って、ひやかされた。

帰りに大通りへ出て、買物をする。そろそろ帰りの支度をしなければならない。シャワーが降って涼しくなった。

夕食後、稲毛さんが迎へに来て、一条さんの家へ行く。兄さんは、一見野武士の様な感じで、話してみると、好人物。九時半まで、いろいろ話し、一緒に帰る。

ホテルへ帰り誘われて、一時頃まで、“そば”を賭けて、麻雀をして、俺と辻さんが、勝った。月を見ながら表通りの屋台で食べた。そばの味はお世辞にもうまではない。まあうどんに近い。

ホテルのサービスで、メロンを頂くが、この方は本物で、実に、うまい。二時頃就寝。

六月二一日 火 曇天

昨夜は、ハワイの友達とお別れ会の心算で、久し振りに麻雀をやった。今朝の起床は、七時半だっ

た。

矢張り早起きした気分はよいものである。午前中荷物を纏めて、四個とする。終って買物に辻さんと出掛ける。

一〇セントストアーで、目星しいものを見付けた。真白い新調した服を着て行く。良く似合うと思う。帰路先日の散髪店（バーバーシップ）へ立寄ったら花を襟につけてくれた。

次男坊が、ドライブの練習に行くと言うので、写真を撮りながら、ワイキキ浜の方へ行く。又逢う日まで、ダイヤモンドヘッド（金剛峯）もワイキキの海も変りなく。稲毛さんが来て居て、仲よし連中で記念に裏庭で撮影した。

少々動いたので、汗をかいた。ゴロゴロ雷が鳴って、今日、シャワーが、一時降った。珍しいポタ餅を頂く。異郷の最後の夕食である。静かに暮色が、あたりに迫って来た。涼しい夕方だ。明日は皆んな加哇島から帰ってくる。又賑になる。夕食後、ホノルル座へ星坊や錦さんと行く。“舶来文明”と言う映画を観る。面白かった。ホテルへ帰ったら、桂さんが来ていて、ホテルのおばさんも加へて、夜のワイキキへ出掛ける。

生憎く月はなかったが、涼しく夜のワイキキもまた一入だった。皆んなで、面白、おかしく談笑し、帰路アイスクリーム店へ寄る。尽きない名残りを残して、一〇時半就床した。

## ホノルル最後の夜

六月二日 水 快晴

ホノルルの最後の夜は明た。七時仲間が加哇島から帰って来たようだ。階下で賑やかな声がする。

皆んな元気で再会した。午前中は、夫々荷物を纏めるやら買物をするやら、大忙しの時を過ぎた。なんば買っても、買い足りないように思へる。金の不足が、旅を憂鬱にする。

滞在中いろいろお世話になった藤井さんから電話があり、病気で行けないが、お逢いしたいと、それで星坊やを伴って、近いところだから歩いて行く。ヤシ樹が庭に幾本もあり、良い家の一人娘のようだが、病身だ。見舞って気毒に思へた。饞別を呉れたのには、一寸照た。

一―時錦さんから、レイ（祝いの生花）を首に飾ってもらう。彼女は勤めがあるので、これきり逢へないのだが、この人にもいろいろお世話になった。明るく、さようならをしてお別れをした。丸顔で、クリクリした眼付きの真面目な良い人。約一ヶ月家族的な気分で、お世話になった

山城ホテルの皆さんともお別れ。アイスクリームを頂きお酒をお互に捧げて、いよいよ、お別れの時が来た。ハワイへ着いた時は、四週間は長いと思つたが、過ぎてみれば、早いものだ。自動車に分乗し、ホノルル港へ行く。部員一同、首にレイを沢山飾っている。数の多い程幸福者とのこと。レイは黒人や白人の子供が、波止場で売っている。春洋丸〔、〕これが帰国の船だ。

船出は何処も同様賑やかの中に、ひしひし迫る別れの寂しさは、嫌なものだ。四週間、本当に親切にお世話下さった人々が、一団となつて、その中に、ホテルの皆さん、桂氏、宮波多氏、万歳氏、星坊、トーチャンもまた稲毛さんも居る。テーブルの代りに花を投げてやる。とも綱が解かれて、午後四時春洋丸には、ポーボーと汽笛が鳴り響いて、“左様〔ルビ：さよ〕なら”の声の中を静かに常夏ハワイの地を離れた。“ああ、さらば、Hawaiiよ”！！

われわれは、お礼の交歓に、セントポールス（St.Paul's）の歌と、鳥で覚へた“アロハ（Aloha）”を

歌った。大声で、朗かな気持ちで、思い切り歌った。

港は、小規模だ。船からも陸からも、何時までも手を振って合図していた。海中にお祝いとして投げた硬貨を拾う事を職業にして居る、土人が、海中に、六～七人見へ、船からもダイビングした。

ホノルルの街も、アロハ塔も、ダイヤモンドヘッドもあの美しいワイキキの浜辺も、われわれには、懐しいものだった。

ずうーと沖へ出たので、一望の中にホノルル市が見へる。

本当に、ハワイは太平洋上の楽園だった。又、来ることを約したが、それは何時の事か。境遇が変わって居るだらう。

ホノルルを速くに見ながら、鳥が水平線に霞む頃、夕食の卓に着く。“さよならハワイ”又逢う日まで。病氣したと共に忘れられない島、Hawaii [。]

船は、ゆるやかに揺れながら、進行している。入浴して、早目にベッドに入る。今度の航海は、同級生（本科二年）四人（山城、菊谷、畑中、俺）が、同室だ。

後、一年半この連中と、ベースボールをやったり、色々とおつき合いを、しなければならぬが、然し、いい奴等だ。ことばを選んだり、飾ったり、気取った言動をすることを知らない野育ちの同期の桜である。

### 【ハワイ、ホノルルの印象】

太平洋の真只中に、浮かぶが如き常夏の楽園で、ヤシ樹、ビンロージュ、ソテツ等が到るところに繁り、空気は、清澄、海は濃青色で、ワイキキの砂浜は遠浅で、夜も昼も、裸族の天国。ホノルルの街には、四階建の建物は数へる程しかなく、文化、文明は、米本土とは、比較にならない低さだ。病院が二ツ、デパートが大小三ツ、高校が二ツ、大学なし。人口数万の静かな都市。勿論カリフォルニア州の支所である。日系人が多く、日本語で不自由しない。服装は総て軽装で、普通の人は、夏用の上下服と、ワイシャツ三枚位と替ズボン二枚もあれば過せる由。暑いためか、日中は総てが、スローで、夜に入り動きが、激しくなるようだ。

果実の、マンゴー、パパイヤ、バナナ、パインナップルの木で熟した物は、実にうまい。

約四週間余滞在したので、島の友達も大勢出来、親切に、いろいろお世話になった。ホノルルの街中やワイキキやダイヤモンド・ヘッドへは度々行った。

郊外へ出掛け、邦人の農耕も視た。故国を大正初期頃離れ、渡来し辛酸をなめ幾多消長、曲折の末成功の域に達した人々は、そお多くはない筈。この点米本土も同じだ。

ウクレレの哀調に乗って、島民の恋歌、アローハウォェアローハウォェーは、夜となると、浜辺でも、樹蔭でも、ウクレレを弾きながら、楽しおに歌はれている [。]

伸び伸びとした島の生活は、そのまま楽天的な気風となり、観光、農業以外これと云った産業はないようだ。

金を持って、遊覧に来る楽園の印象を強く受けた。

六月二三日 木 快晴

快晴で船の動揺も小さい。

洋上で、帰国第一の朝を迎へた。米本土内のこと、ハワイ島内での思ひ出は多いが、今は、只管帰国したい、と思う。今朝七時頃、左舷の水平線近くに、小さな鳥が見へた。ミッドウエー (Midway) とのこと。話しに聞いていた鳥鳥だ。(横浜と米国への中間と云うことのような)

食事は部屋、軽装して、デッキへ行く。今度の船は、外人が多い。面白く、楽しい毎日にしたい。相も変わらず、曲投げやデッキゴルフに時を過す。外にデッキではやることがない。揺れるし、狭いデッキでは、自ずと制限される。

まだ、知り人もない。カモメの様な白い鳥が見へ、アホウ鳥は航海者にとって、なくてはならない良き友であり、慰められる。春洋丸は船体は長く、幅の狭い船で、古い型だ。又、果しない大洋上の生活が、続くのだ。

暑い一日が終って、夕方が来た。波浪のうねりが、高くなる。前方は夕暮れの美しい黄昏の色。一天四水濃藍の世界。宇宙は雄大で神秘。人間は小さな存在だ、と云うことを識らされた。

デッキでは、若い男女の外人が、レコードをかけて、ダンスを始めた。彼等は思い切った服装で、半裸体だ。

夕食が、六時三〇分、まだ明るい。夕日が水平線下に沈む時は壮〔莊〕厳で、大〔太〕陽は巨大だと思ふ。渡米の時と違い、今度は時間が、一日三〇分位づつ遅れる訳だ。コースが大部南を通して居るようだ。船に静かな夜が訪れた。空には無数の星が、またたいて美しい。今のところ船の動揺は小さく楽な航海だ。

航海の平安を祈り、一〇時就床〔。〕

#### 南太平洋の海上を

六月二四日 金 快晴

七時起床。入浴、海水の湯は馴れると調子が、いい。

チーム一同至極元気。山城、菊谷、畑中、は俺の上の寝台でお互によく騒ぐ。又、この様に長期の旅は騒いで、余駄を飛ばさなければ面白味もない。食事のボン、ボンの合図にも馴れて来た。食堂への出入も渡米時は、朝、夕、は正装が定りであり、マナーを、犯〔マ〕せば船員の注意は基より、自分自身が恥しくなり、出入りにしくいだらう。今回は、暑期でもあるのか、この点は制限がなく、自由のようだ。

今朝は、遭難に備へての非常訓練がある旨通知あり。ポー、ポーポーと三回汽笛が鳴ったので、廊下の備品の救命胴衣(袋を前後に着る)を胴着して、予め決められた集合所 (NO七号のポート) へ集り、いざと云う時の注意を受けた。要領は、周章ろうばいしないこと。落ち着いて胴衣をしっかりと結び付け、船員の指示に忠実に従うこと。〔マ〕であった。訓練は、一時間程で終わった。

外人の女達は喜々として騒いでいる。デッキチェアに腰掛け横になり休む。

一、二等船客の記念(乗船・下船までにくれる)撮影が景色良い上甲板であった。船は、うねりに添って快適に航海している。日中は実に暑い。汗々だ。

Bデッキは、家庭で云へば、茶の間であり、応接であり、皆んなで利用し愉しむところ。一番広く、安全な場所だから、みんな集って、思い思いの遊びや、読書、昼寝の場所でもある。

船内皆んなが、ニコニコで、明るく朗なら航海は愉しい。今度の航海も楽しいようだ。何にも目標のない生活程倦怠することはない。只起きて、同じ人を同じ所で見ただけだもの。夕方デッキを歩るいて

居た折、眼鏡を架た、三五才位の邦人紳士と知り合った。話しは期せずして、お互の視て来たこと、経済問題、日本の長短等について、約一時間程語り合ったが、本当によかったと思った。この人は、独乙、英国、米国を旅して来た由。俺は今度の旅行を良き機会に、努めて、広く、多くを視て来た心算。経済学を学ぶ者として、物価の比較、人の好みの色、形、デパートの営業状態、将来性と云う様に。ところが仲間の或る者曰ク〔ママ〕お前は“細かい”と〔。〕笑ふ者は、大いに笑へ。俺は、俺の所信に向って、努力するのだから。野球は一つの趣味にしか過ぎない。日本はまだ野球では飯は喰へない。技術のいい奴なら、野球チーム〔を〕持つ、一流商社、鉄道管理局、銀行への就職は大いに期待出来、希望も大きいことは、確かである。

六月二五日 土 快晴

暑くて容易に寝られない。それでも、今朝は七時半起床。入浴（自分で、コックをひねると熱湯が出る）して、清々した。

食事は、ボーイさんが持って来てくれて、キャビンで済ます。

Bデッキでは、大勢の男女が、用具を使って遊んでいる。

四海、空も海も青一色。何に一つ見へない世界だ。船は、静かな動揺を繰り返しながら、航行している。今朝の海上は、不思議な程静かで、油を流したように波もなく、船員も稀〔珍〕しいことと云っていた。“太平洋”とは誰れが名付けたか、正に文字の如し。

アホウ鳥は相も変わらず、船の後になり、先になりして、ついてくる。この大洋の唯一の友は、決して“アホウ”ではない。

一〇時頃、船を追う、フカ（猛魚）の群れ（四匹いた）を見て、大騒ぎになった。望遠鏡を持って来た人もいた。

狭い（約四〇坪位か）デッキが、何にをやるにも利用される唯一の団樂の場。三時のテイタイムが待遠しい。

今日もまた、べら棒に暑苦しい。裸になりたい。

船のコースは、大分南を通っているようだ。この船には、三等が、二〇〇人余、二等が八〇人程、一等に四〇人程の人が居る。船員も加へると四〇〇人以上の人が、共同生活をしている訳だ。船は古い、ロシヤの巨船とか。

夕方を迎へた船は、一段と賑やかで、思い思いの服装の紳士、淑女が、デッキへ沢山集つて来る。何時も思うことだが、水平線下に没する夕日は、真赤で、大きく、実に壮〔莊〕厳で美しい。

夜八時半から、ショー（見せ物）あり、一、二等船客のためBデッキで催された。

船員達の芝居だが、小道具も入念で、芸もなかなか上手だった。スタンフォード大学の女学生達は、一一時頃半裸で、ダンスをして居た。一二時就床〔。〕

六月二六日 日 晴

昨夜で航海も半分来たとのこと。そして、今朝デースライン（日付変更線）を越すとのこと。地球は大きい。東経180°が東西の接点で、時差を生ずる訳だ。明朝時差の調整がある。八時頃起床。入浴した。

浪は少々高く、うねりもある。雲も四方に見られる。

船の動揺に身体を合せられるようになれば、船酔いにはならないそおだ。それには年期〔ママ〕が必要の由。体調を良くするには、兎に角、考へ込んだりせず、出来るだけ無邪気に、そしてデッキを歩く運動することと聞く。やるべし。

スタンフォードの女学生に、船内のレコードの日本の歌（雨降りお月さん）を教へてやる。英語はブローケンでも意味は通じる。

玉突を船室でやった。

陸上の暑気とは違うが、海上も暑い。Bデッキの椅子に腰掛け、輪投げやデッキゴルフを知り合った人々と一緒に興じた。

#### 六月二七日・二八日 火 快晴

宇宙は、偉大であることをつくづく知る。いや、知らされた。そして、本当に地球の丸い。〔ママ〕と云う事をも。海上の視力の及ぶ範囲は、日本尺で、五里とも八里とも云う。何処まで進んでも、同じ間隔で、四方が水平線で、方向を定めるには、船首が前方であるとする事だ。渡米の折は、同日が二日あり、帰国の今日は二七日を越して、二八日だ。不思議な様であるが、事実だ。地球は大きく、地球の表と裏とでは、時差があり、日付変更線を境いに、日時を調整する訳だ。良く云う、時差ボケにご注意あれ。

起床八時半。何時ものように入浴。

朝の澄みきった空気を心ゆくまで吸う。爽やかだ。

快晴の大〔太〕陽は、船一ぱいに照り栄え、船は、白い泡の航跡を長く引いて、今は、ローリング（左右動）で、航行している〔。〕

今日は、一、二等船客の慰安のため、茶会（ティーパーティ）が、盛大にBデッキで催された。会場には、生花と万国旗で、美しく飾られ、紙細工の帽子をかぶっている。内外男女が、アイスクリーム、サンドイッチ、紅茶、コーヒー、或る人達は、おでん、おしるこ、そば等を食べ、飲んで、朗らかで楽しい会だった。他のデッキでは、続いて、ダンスを始めたので、ジャズが聞へる。

#### 六月二九日 水 曇・小雨

何時もより早く起床し、正装して食堂へ行く。

スープから一通りコース食を平らげた。仲間の連中も雑談して笑っていた。皆んな航海にも馴れて、船酔いしてい〔る〕者はない。残り少ない船旅を万〔満〕喫しているようだ。

上甲板へ行って、退り行く海を眺め、快よい朝の空気を吸った。エンジンの音響も馴れると騒音ではなくなる。

後、二日すれば、日本の陸影が見へるとのこと。早く上陸とも思い、もっと続け、とも思う。濃藍色の海面と青い空、その接するところが、水平線で、行けども行けども果てしない世界だ。この船体も、一万トンある巨船であるが、海洋上では、木葉に等しい小さな存在だ。小山の様な大きな、うねりが、ゆるやかだから、動揺もゆるやか。ギーギーと船体のきしむ音を聞きながら、デッキで過ごす。

今日の夕日も実に美しかった。夕方、小雨が降って来た。暑い夜となるだらう。航海中の雨は無粋なものである。大洋上では必ず風雨となり、甲板上には居れないから、船室のあちこちで、勝手なことを

して、時を過ごすより、致し方ない。スタンフォードの女学生等は、女同志でダンスをしてキャツ、キャツと云って騒いでいる。全く屈托〔託〕のない連中だ。彼等の仕草には、巧みがなく極く自然だ。ブンブンして怒るときもある。夏期休暇を利用して「日本歴史、即ち源平を研究したい由」。

――一時寝なくなったので、部屋へ行く。同期の連中も騒いでいた。

#### 日本近し

六月三〇日 木 曇天・雨

八時半起床。今朝は入浴は、時間がないので、午後にする。船は入港前で忙しい様子。

椅子によって、旅行記の続きを書き込む。

薄曇りの日で、セーターが必要な位だ。

昼食の折、今晚催す仮装舞踏会の要領が書いてあった。さて、なにをやらうかと迷う。簡単に粉〔扮〕装できることで、結局「船長」と決めて、船長さんに一式を借用した。丁度サイズが、ピッタリでよかった。

仮装舞踏会出場者には、胸に番号を付し、投票で上位から決めて表彰するので、秘密裡に苦心しているようだ。結果は、立教ナインから、一、二位が出た。一人は宮田君の南洋の黒んぼ（身体中を墨汁で塗り、赤いフンドシ姿）〔。〕もう一人は山崎君（長野中卒。京都の大原女、紺ガスリに赤いタスキ姿）〔。〕この二人の応援をチームでやり、終って皆んなで祝し合った。

スタンフォード大女軍も実に巧妙で、海賊ドン・ファン。闘牛士。スペイン人で美人の某女は、当時人気の女優グレタ・ガルボに粉〔扮〕し、実に良く似ていた。終了して其の場で出場者全員の記念写真へ。俺は、目星しい人々からサインをもらった。

夕食は、フルコースと張り切って沢山食べた。

外は、雨が降っている。寒い風だ。ホールや娯楽室で、外人連はダンス、われわれの仲間は麻雀をやっていた。――一時就床〔。〕

七月一日 金 曇・夜雨

七時半起床。いよいよ七月だ。

空気がとても、ぢめぢめしていて気分が悪い。波は相当高く、大きなうねりで、船はローリング（左右の揺れ）で、進行している。

――一時頃左側の沖合いに三隻の漁船を見た。勿論、日本の船で、もう日本も近い、と知る。

夕刻のデッキは、一入賑やかである。

航海の最後の夜が遂に来了。旅先で、或る時は、母国を慕い早く帰りたい。〔ママ〕と思ったこともある。然しいざ明日終るのだと思うとなんとなく寂しく、もっと続いて欲しい、と思う。あれだけ憧れた、米国遠征の終結を告げる時が来た。夜は、生憎の雨で、肌寒い。

#### 横浜へ帰った

七月二日 土 風雨

七時頃起床。船内の最後の入浴。足、腰を思い切り伸ばしてゆっくりする。清々した気分になる。正



装して朝食に出席。スープから始めて、フルコースは、とても美味で、一品、一品を咀〔嚙〕みしめて食した。船内は上陸の準備で、忙しそおだ。

一〇時頃、右舷に、ノコギリ崎を見る。日本へ帰った。

船は曲ったコースをとって、横須賀を望見しながら進む。風が強く、船員は苦心している。

一二時半、本牧沖で検疫あり。全員OK。

朝日新聞外雑誌社等の撮影あり。身辺も忙しくなってきた。

船の最後の昼食を、一、二等客揃って済ませ、会釈して別れを告げた。Bデッキ（上甲板）や、手すりに添って、近づく横浜市を見て居た。曳船二隻が、船首、船尾について、引張って行く。

本船のエンジンは停止され、次第に埠頭に接近して行く。出迎への人の群が、大きくなって見へる。

風で入港が遅れ三時無事四号岸壁に静かに着いた。人々の顔が見へる。松商後輩の村田、高野も、そして、そして、小旗を振って、船上と下とで、声なき感激の挨拶。賑やかな、吹奏楽裡に、そは降る小雨の中、日本の土を踏むことが出来た。

出迎への人々と省電に乗り、今日は自由行動とのことで俺は、合宿所へ向う。

#### アメリカ遠征の総括（別冊アルバムも語る）

未知の世界に対する期待と希望は、極めて多大であり、それだけに不安も生じた。船旅往復二八日、内陸は寝台車（ピュールマンカー）（電気機関車は少なく、大型蒸気機関車が主）と高級家用車、大型（八〇人）バス等で、約三六日、ハワイ滞在二八日の長い外遊だったが、各地の聖公会のメンバー各位が、州知事、市長、政財界の大物が、好意的に「兄弟の扱」をしてくれ、ホテルは超一流（日本人だけなら相手にしてくれないし、費用が続かないだらう）〔。〕都市往来には、モーターカップの警官二名の先導はサイレンを鳴らし、一般車は、交叉点も一時停止（これは、火災外緊急時と知事以上の人の非常往来に使う由）〔、〕往来車は外側へ避けて停止、その中を走るので、通行人は、「黄色人種の何者だらう」と奇妙な表情で見ていた。これは市賓としての歓迎で、時局上（日支事変の悪化の折）の警護ではない。〔マ〕と云うことを知って、感激した。国土は広大、中、西部は未開の山野が、至るところに広がり、八〇階以上の高い建物の多い大都市群、料理は美味、総てが贅沢であり、高い文化、明るい国民性で、われわれには大変親切にしてくれた。大学は何処も草木が青々と繁り、（立教大を幾倍かに大きくした感じ）男女共学で愉しそおだった。特筆したいことは、野球人として、憧れの球聖ベープ・ルースとルー・ゲーリック両選手と同席し若干の会話をしたことと夜間試合を経験し、本場の職業野球を三回も観れたこと。各都市の印象は、旅行記にあり。ハワイでの約一ヶ月は、慰安であって、実にのんびりした生活だった。出発前昔学習した、アメリカ都市の特徴、歴史、地理、産物等を復習し、そんなことを基に、努めて観察し歩るいても見たので、望外の収穫があったと思う。

アメリカ！！とは一口に言って、「新しい未来のある、明るく強大な国家」だと感得した。

深く感謝し、各方面へ厚く御礼を述べ、この稿を終りたい。

以上で、米国遠征に係はる大筋は終りとするが、数字的諸集計を追記する。

## 記

## 渡米中の自動車走行キロ数（推定）

都市名	往来地名	走行キロ数	備考	
バンクーバー	市内、自然公園	40	カナダ領で寄港地	
シヤトル	タコマ市、オリンピア市	350	5日間滞在、往復、郊外	
シカゴ	市内外往来	20	シカゴ、ニューヨーク等の大都市は別として中都市の郊外往来は平均80～110キロのスピード、走行していた	
デトロイト	〃 〃	35		
ミシガン	デトロイト往復外	50		
ヒルスデール	郊外地往復	95		
アゼンス・オハイオ	市内	5		
バッファロー	ナイアガラ往復	20		
ニューヨーク	市内度々往来	80		
ニューヘブン	市内往来	25		
ワシントン	〃 〃	7		
フィヤデルフィア	〃 〃	7		
セントルイス	市内、郊外往来	15		
カンサスシティー	市内	4		
ロサンゼルス	ハリウッド、郊外	40		
サンフランシスコ	市内、郊外	25		
ホノルル	〃 〃	8		
計		826		